秋田県文化財調査報告書第171集

# 玉内遺跡発掘調査報告書

――一般国道282号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査――

1988・3

秋田県教育委員会

# 玉内（たまない）遺跡発掘調査報告書

――一般国道282号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査――

1988・3

秋田県教育委員会

# 序

先人の遺した文化遺産を目の当りにし、郷土の歴史や文化を知ることは、私達の生活をより潤いのあるものにするものと考えます。埋蔵文化財の調査・研究は、このような観点からも重要であります。

この度、一般国道282号の改良工事が計画され、その路線内に、いわゆる日時計状組石が発見されたことで知られる玉内遺跡の一部が含まれていることがわかりました。このため、当教育委員会は記録保存を目的に本年度発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代晩期の墓域、縄文・平安時代の竪穴住居跡などが、多数の土器・石器とともに検出されました。墓域の中には、下部に石槨状の組石を持ち、その上部に日時計状組石を配置した珍しい配石墓などがあります。また、竪穴住居跡などは、これまでその存在が予測できなかったような急斜面から検出されております。

本報告書は、これらの貴重な調査成果を収めたものでありますが、刊行するに当り、本調査に御協力いただきました秋田県土木部鹿角土木事務所・鹿角市教育委員会をはじめ関係各位に対し、深く感謝の意を表しますとともに、本書が学術上はもちろんのこと、埋蔵文化財に対する御理解と保護のために広く活用されることを希望するものであります。

昭和63年 3 月25日

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

# 例　　言

1．本報告書は、一般国道282号改良工事に係る玉内遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書の執筆は、学芸主事大野憲司が行った。

3．土色の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修　(財団法人)日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

4．本報告書の作成にあたり、国立歴史民俗博物館阿部義平助教授に御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

# 凡　　例

1．本報告書中の遺構実測図は、各遺構に合わせて、20分の１・40分の１の縮尺を基本とした。遺物実測図・拓影図は、２分の１を基本としたが、2.5分の１・３分の１・４分の１のものもあり、それぞれスケールを付した。

2．遺構には略記号を付してあるが、それは以下のとおりである。

竪穴住居跡……ＳＩ　　配石遺構……ＳＱ　　土壙墓・土坑……ＳＫ

土器棺墓……ＳＲ　　溝状遺構……ＳＤ

3．挿図に使用したスクリーントーンは下記のとおりである。

地山土：　　焼　　土：

ベンガラ：　　アスファルト：

# 目　　次

序
例言・凡例
目次
第1章　はじめに……1
　第1節　調査に至るまで……1
　第2節　調査の組織と構成……1
第2章　遺跡の立地と環境……2
　第1節　遺跡の位置と立地……2
　第2節　歴史的環境……4
第3章　発掘調査の概要……6
　第1節　遺跡の概観……6
　第2節　調査の方法……9
　第3節　調査経過……9
第4章　調査の記録……12
　第1節　A地区……12
　　1．検出遺構と遺物……13
　　2．遺構外出土遺物……28
　第2節　B地区……52
　　1．検出遺構と遺物……52
　　2．遺構外出土遺物……72
第5章　まとめ……77
写真図版

# 挿　図　目　次

第1図　玉内遺跡の位置……2
第2図　玉内遺跡周辺の地形……3
第3図　玉内遺跡の位置と周辺の遺跡……4
第4図　昭和36年発見の玉内遺跡
　日時計状組石……5
第5図　玉内遺跡　現況地形南北縦断面
　概念図と遺構の位置……6
第6図　工事計画図と発掘調査区……7
第7図　A地区土層図……8
第8図　玉内遺跡遺構・グリッド配置図……11
第9図　A地区遺構配置図……13
第10図　SQ14配石墓……15
第11図　A地区遺物包含層上～中位の河原石
　分布状況……17
　（橙色の線は配石墓下部の堀り
　込みと土壙墓）
第12図　SQ15・28配石墓……19
第13図　SQ16配石墓……20
第14図　SQ06配石遺構……21
第15図　SK17～25・27土壙墓……22
第16図　SK05土壙墓……24
第17図　SR01・02・04土器棺墓……26
第18図　SR01・02・04土器棺……27
第19図　A地区遺構内出土遺物……28
第20図　A地区遺構外出土土器（1）　縄文
　後期中葉～後葉（注口・鉢形土器）…33
第21図　A地区遺構外出土土器（2）
　縄文後期・末葉（注口土器）……34
第22図　A地区遺構外出土土器（3）
　縄文晩期前葉第1期の土器(1)…… 35
第23図　A地区遺構外出土土器（4）
　縄文晩期前葉第1期の土器(2)…… 36
第24図　A地区遺構外出土土器（5）
　縄文晩期前葉第1期の土器(3)…… 37
第25図　A地区遺構外出土土器（6）
　縄文晩期前葉第1期の土器(4)…… 38
第26図　A地区遺構外出土土器（7）
　縄文晩期前葉第1期の土器(5)…… 39
第27図　A地区遺構外出土土器（8）
　縄文晩期前葉第1期の土器(6)…… 40
第28図　A地区遺構外出土土器（9）
　縄文晩期前葉第2期の土器(1)…… 41
第29図　A地区遺構外出土土器(10)
　縄文晩期前葉第2期の土器(2)…… 42
第30図　A地区遺構外出土土器(11)
　縄文晩期前葉第2期の土器(3)…… 43
第31図　A地区遺構外出土土器(12)
　縄文晩期前葉第2期の土器(4)…… 44
第32図　A地区遺構外出土土器(13)
　縄文晩期前葉第3期の土器(1)…… 45
第33図　A地区遺構外出土土器(14)
　縄文晩期前葉第3期の土器(2)…… 46

第34図　Ａ地区遺構外出土土器(15)
縄文中•後期土器拓影…… 47
第35図　Ａ地区遺構外出土土器(16)
縄文晩期前葉土器拓影(1)…… 48
第36図　Ａ地区遺構外出土土器(17)
縄文晩期前葉土器拓影(2)…… 49
第37図　Ａ地区遺構外出土土製品・
中空土製品……50
第38図　Ａ地区遺構外出土石器・石製品……51
第39図　Ｂ地区遺構・グリッド配置図・
土層断面図……53
第40図　ＳＩ121・122竪穴住居跡
ＳＫ123・124土壙墓……55
第41図　ＳＫ129・130フラスコ状土坑
ＳＫ115・123・131土坑…… 57
第42図　ＳＲ101・102土器棺墓と土器棺……59
第43図　ＳＲ103・120土器棺墓と土器棺……60
第44図　ＳＩ110•112•116•118竪穴住居跡… 63
第45図　ＳＩ117竪穴住居跡…… 65
第46図　ＳＫ108・125・126・111・119土坑
ＳＤ109・134溝状遺構……67
第47図　ＳＤ104～107・127・133溝状遺構…69
第48図　Ｂ地区遺構内出土遺物(１)……70
第49図　Ｂ地区遺構内出土遺物(２)……71
第50図　Ｂ地区遺構内出土遺物(3)
鉄製品……72
第51図　Ｂ地区遺構外出土遺物　土器(１)…73
第52図　Ｂ地区遺構外出土遺物　土器(２)…74
第53図　Ｂ地区遺構外出土遺物　土器(３)・
石器……75
第54図　秋田県内における縄文後期後葉～晩
期の墓域が検出されている遺跡……78
第55図　ＳＱ14配石墓構築想像図……80
(人物のイラストは高橋弘美による)
第56図　玉内遺跡及び周辺遺跡出土の縄文時代
後期末葉～晩期前葉の土器……83

# 図　版　目　次

図版１．1.水晶山山頂より見た玉内遺跡
2.遺跡全景(西▷)　3.遺跡近景(南東▷)
図版２．1.昭和36年発見の日時計状組石の現況
2.Ａ地区調査風景(北▷)　3.同上
図版３．1.ＳＱ14配石墓検出状況(北西▷)
2.同上(真上から　上が南東)
3.同上(南東▷)
図版４．1.ＳＱ14配石墓検出状況(北西▷)
2.ＳＱ14断面の状況(北西▷)
3.ＳＱ14立石状況(北西▷)
図版５．1.ＳＱ14下部配石状況(北西▷)
2.同上(北東▷)　3.ＳＱ14壙底面の状況
図版６．1.ＳＱ15・28配石墓(南東▷)
2.同上(南西▷)　3.ＳＱ28耳飾出土状況
図版７．1.ＳＱ16配石墓(東▷)
2.ＳＫ17・18・19・20・21・24土壙墓
検出状況(南西▷)
3.同上完堀状況(南西▷)
図版８．1.ＳＲ02・04土器棺墓検出状況(西▷)
2.ＳＲ01(東▷)　3.ＳＲ04(西▷)
4.ＳＲ02(西▷)
図版９．1.Ａ地区遺物出土状況　2.同上　3.同上
図版10．Ａ地区出土土器、耳飾
図版11．Ａ地区出土土器
図版12．Ａ地区出土土器
図版13．Ａ地区出土土器、Ｂ地区ＳＩ110出土
土器
図版14．1.Ｂ地区全景(南▷)
2.Ｂ地区ＳＲ101検出状況と
調査風景(北▷)
3.ＳＩ竪穴住居跡完掘状況(南▷)
図版15．1.ＳＫ123・124の検出状況(北東▷)
2.ＳＩ110床面貼床状況とＳＫ129・130
フラスコ状土坑(北▷)
3.ＳＫ128土坑(南西▷)
図版16．1.ＳＲ101土器棺墓(北西▷)
2.ＳＲ103土器棺墓(北西▷)
3.ＳＩ110•112•116•118竪穴住居跡(北▷)
図版17．1.ＳＩ110•112•116•118竪穴住居跡(東▷)
2.ＳＩ110カマド(西▷)
3.同上断面(南▷)
図版18．1.ＳＤ104・105・106など溝状遺構(南▷)
2.ＳＤ124溝状遺構(北西▷)
3.Ｂ地区調査風景

# 第１章　はじめに

## 第１節　調査に至るまで

一般国道282号は、東北自動車道が開通した現在でも、秋田県鹿角市及び小坂町をそれぞれに岩手県・青森県に結ぶ幹線道路として重要な役割を果している。しかしながらこの道路は、比較的平坦地部分にあっても見通しの悪いカーブがあったりして、いくつかの危険箇所がある。その中でも、鹿角市八幡平字玉内地区においては特にその改良工事が望まれるところであった。このため、秋田県土木部鹿角土木事務所は、この部分の改良工事を計画したが、計画路線上には昭和36年に発見された玉内遺跡の一部が重なるため、同事務所と秋田県教育委員会は協議を行い、その部分を工事に先立って調査し、記録保存することとした。昭和61年11月に秋田県教育委員会は、予定路線部分の範囲確認調査を行い、発掘調査の必要な面積を890m²とした。

## 第２節　調査の組織と構成

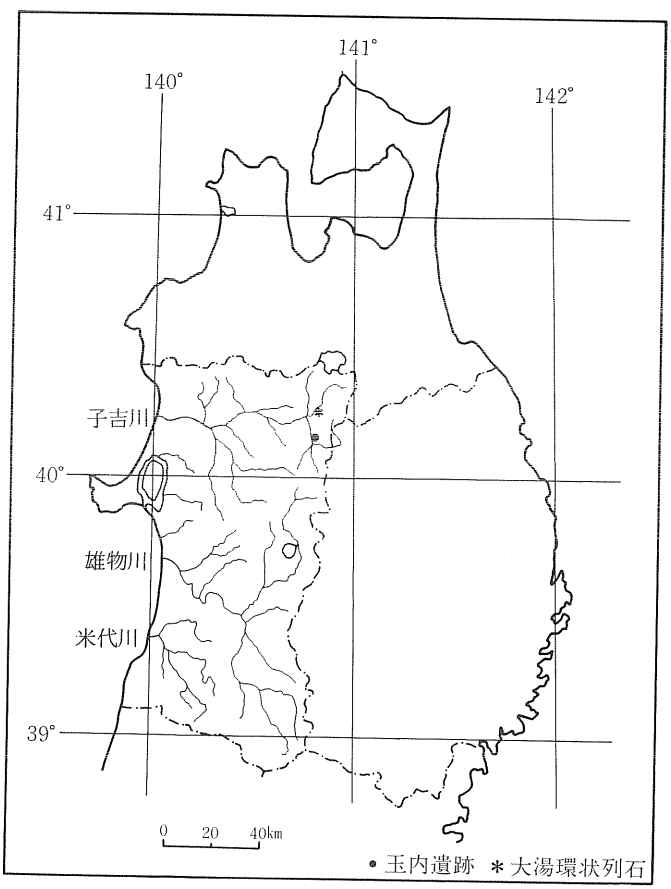
| | |
|---|---|
| 所　在　地 | 秋田県鹿角市八幡平字玉内40番地、外 |
| 調 査 期 間 | 昭和62年７月20日～10月２日 |
| 調査対象面積 | ８９０m² |
| 調 査 面 積 | ５５０m² |
| 調査主体者 | 秋田県教育委員会 |
| 調 査 担 当 | 大野　憲司（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事） |
| 調査総務担当 | 加藤　進（秋田県埋蔵文化財センター主査） |
| | 高橋　忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事） |
| 調査協力機関 | 秋田県土木部鹿角土木事務所 |
| | 鹿角市教育委員会 |

# 第２章　遺跡の立地と環境

## 第１節　遺跡の位置と立地

玉内遺跡は、鹿角市八幡平字玉内に所在し、ＪＲ東日本花輪線陸中花輪駅の南約２km、北緯約40°10′10″、東経約140°47′30″に位置する。国指定特別史跡大湯環状列石の南方約11kmの地点である。

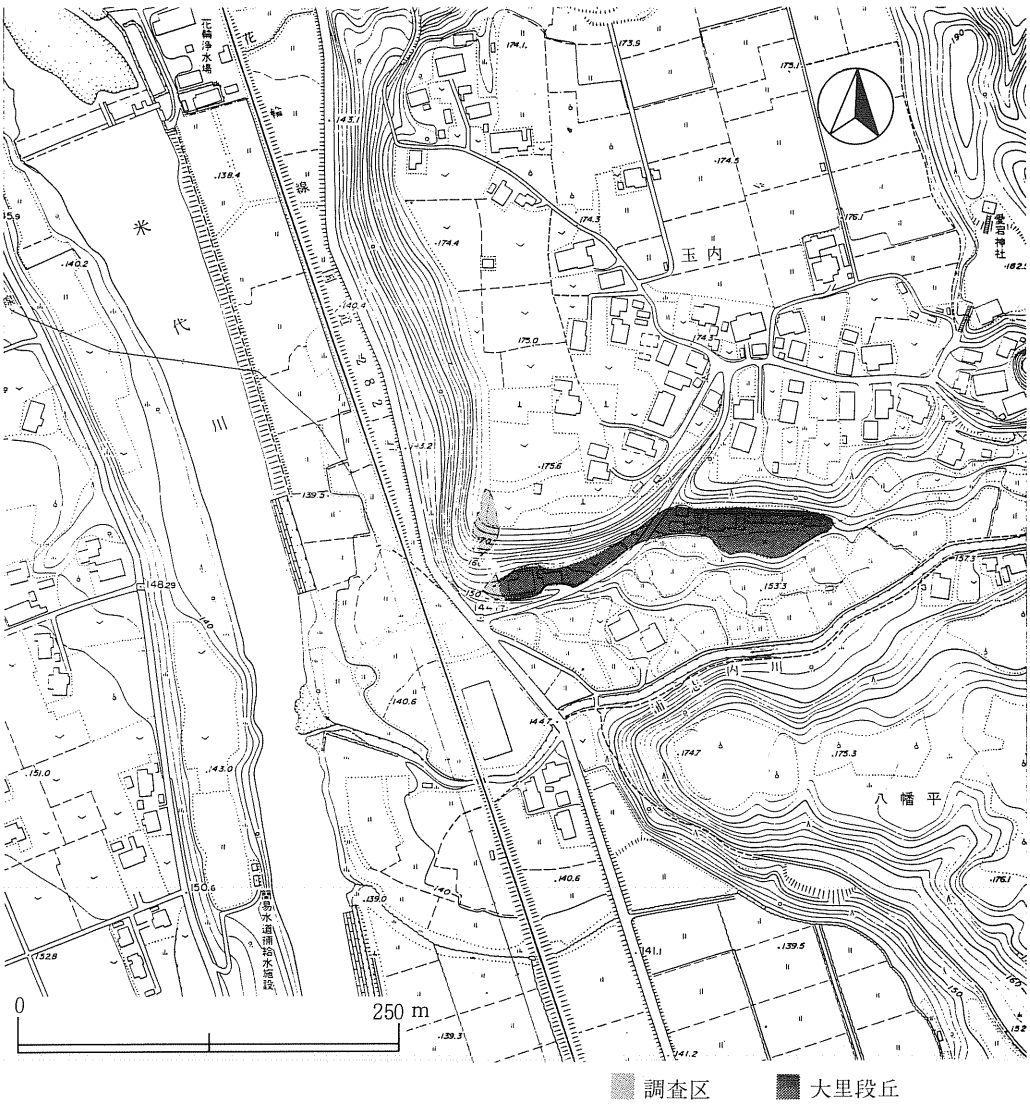
岩手県四角岳に源を発する米代川は、花輪盆地南端部で熊沢川・夜明島川を合流して、盆地西端を北上し、鹿角市十和田南付近で西に向きをかえ一路日本海に流下する。米代川はその左右に計６面の河成段丘を形成しており、それらは上位から高位段丘・鳥越段丘・関上段丘・松館段丘・大里段丘・毛馬内段丘と命名されている(註1)。このうち玉内遺跡は関上・大里段丘面及び両者の間の急な斜面に形成されている。遺跡付近の関上段丘は標高約175m、大里段丘は約153mで、沖積地との比高差は前者で約35m、後者で約10mである。




第１図　玉内遺跡の位置

鹿角市八幡平字玉内における関上段丘は、米代川の必従河川である黒沢川と浦志内川によって浸蝕され、東から西に延びる南北約350m、東西約320mの舌状台地となっている。また、大里段丘は、この舌状台地南側の段丘崖下部に棚状に残存しており、その幅は10～15mと狭い。

今回の発掘調査は、玉内における両段丘面及び斜面のうち南西端部が対象となったものであ




**第２図　玉内遺跡周辺の地形**

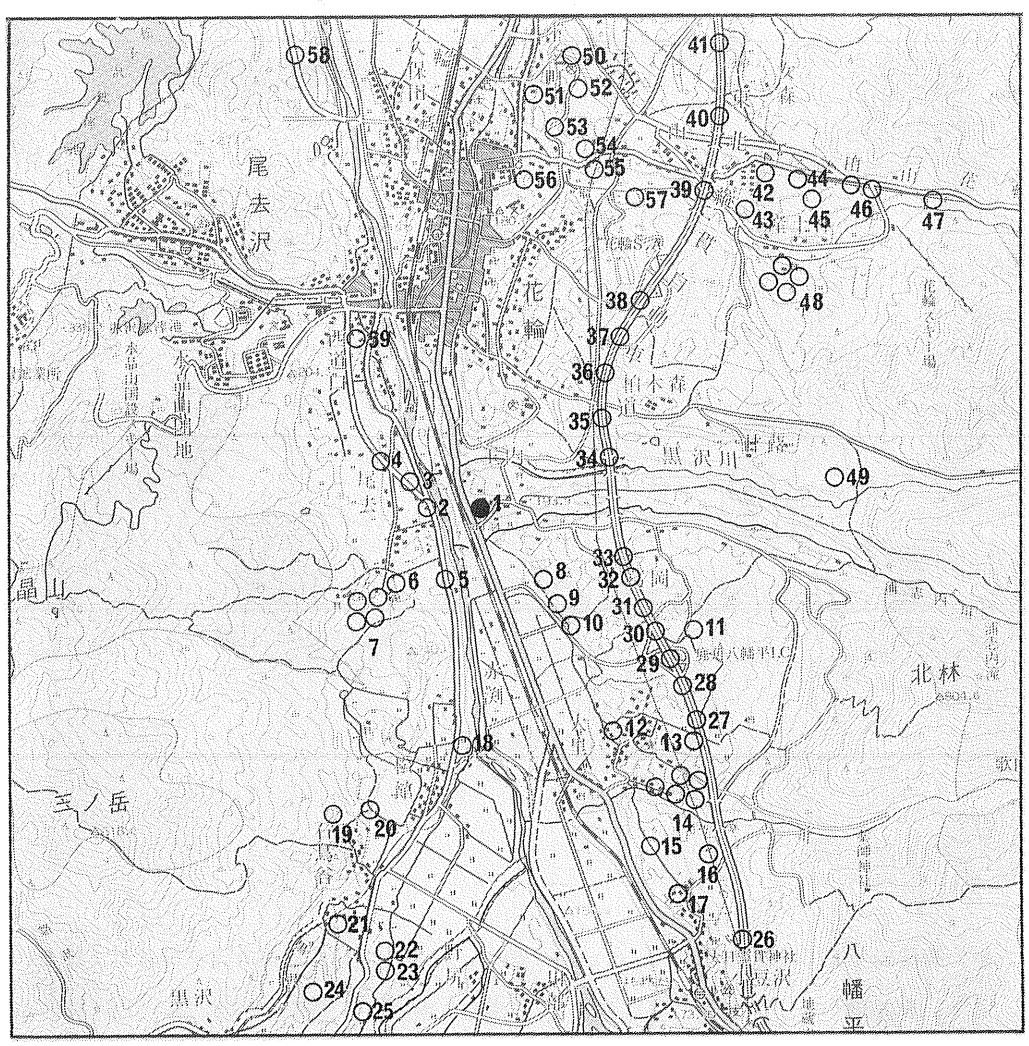
るが、隣接地の範囲確認調査を行っていないので、正確な遺跡の広がりは把握されていない。

また、調査地から、米代川の現流路までは120mしかなく、遺跡からは、米代川の流れを一望のもとに見ることができる。

# 第２節　歴史的環境

昭和36年、鹿角郡八幡平村字玉内(現鹿角市八幡平)浅石勇氏宅の改築工事の際に、縄文時代晩期前葉に属する多数の土器・石器と共に、日時計状組石（配石遺構）１基が発見された。この配石遺構は、単独・小規模ながら形の整ったもので、これが当時東北大学文学部史学科在学中で、八幡平村出身の阿部義平氏の注目するところとなり、「配石墓の成立」(註2)の中で詳しく報じられ、衆目を集めることとなった。この配石遺構は、発見された当時の姿のまま、浅石氏宅庭園の一隅に現存(註3)する（図版２）。

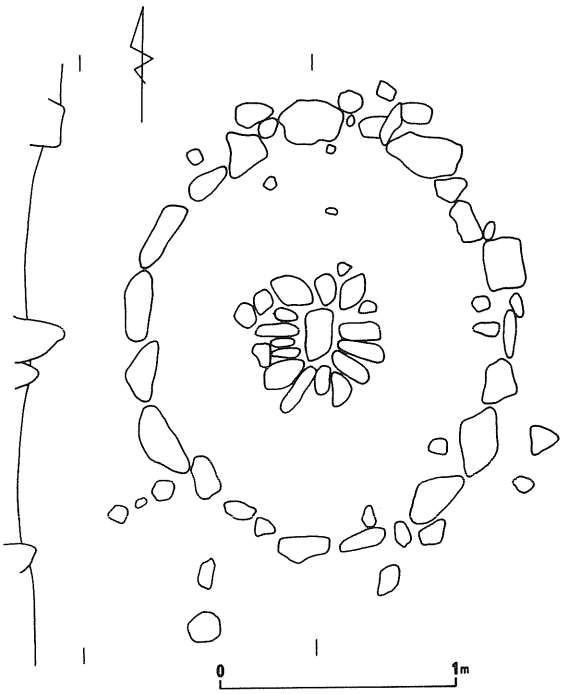
玉内遺跡周辺には、昭和54年から実施された東北縦貫自動車道建設事業に係る遺跡発掘調査があったこともあり、第４図のように多数の遺跡が分布する。この中では、猿ケ平Ⅰ・柏木森




第３図　玉内遺跡の位置と周辺の遺跡　（Ｓ＝１：50,000）

・明堂長根・案内Ⅱ遺跡から縄文時代後期末葉～晩期前葉の土器が出土している。これらの遺跡は玉内遺跡に近く、何らかの関連が考えられるところである。また、浦志内川を挟んで向かい側の台地には清水向遺跡があり、台地下からは晩期大洞Ｃ$_2$式の土器が採集されている。清水向遺跡は縄文時代前期の遺跡で、円筒下層式土器を多数出土し、秋田県内で最初に竪穴住居跡が完掘された遺跡として知られる。

米代川の対岸には、縄文晩期の東在家・尾去遺跡がある。東在家遺跡は、昭和46年十和田高校社会科同好会によって小規模な発掘調査が行なわれており、不規則な組石や浅い竪穴が大洞Ｃ$_2$式土器などと共に検出されている。また、マウンドを持つ古墳としては県内でも稀有な存在である、三光塚古墳(時期は明確でない)が玉内遺跡の真西に位置している。




**第４図　昭和36年発見の玉内遺跡日時計状組石**
（阿部「配石墓の成立」『考古学雑誌』54－１より）

註１　藤本幸雄「地形と地質」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』秋田県教育委員会　1981(昭和56年)

註２　阿部義平「配石墓の成立」『考古学雑誌』54巻１号　1968(昭和43年)

註３　阿部氏論文中の図及び当時の写真と、現在のそれとは、石の数等において若干異なっている。

第１表　玉内遺跡と周辺の遺跡一覧

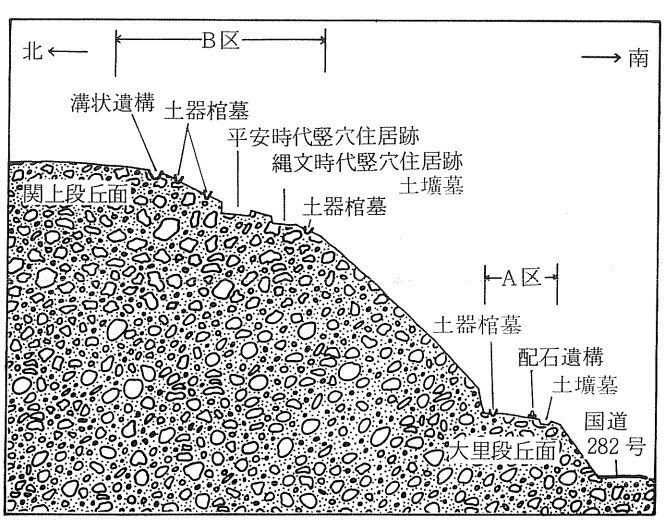
| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 玉内 | 縄文・平安・中世 | 16 | 下鷲の巣 | 縄文 | 31 | 北の林Ⅱ | 縄文・平安 | 46 | 赤坂Ａ | 縄文 |
| 2 | 三光塚１号 | 平安 | 17 | 小豆沢館 | 縄文・中世 | 32 | 上葛岡Ⅰ | 縄文 | 47 | 日向屋敷Ⅱ | 縄文 |
| 3 | 三光塚２号 | 平安 | 18 | 岩淵 | 縄文 | 33 | 上葛岡Ⅲ | 縄文 | 48 | 産土神Ａ・Ｂ・Ｃ | 縄文 |
| 4 | 六角平 | 縄文 | 19 | 後口田 | 平安 | 34 | 上葛岡Ⅳ | 縄文 | 49 | 甘蕗 | 縄文 |
| 5 | 尾去 | 縄文 | 20 | 石鳥谷 | 縄文 | 35 | 一本杉 | 縄文・平安・中世 | 50 | 天戸森 | 縄文 |
| 6 | 東在家 | 縄文 | 21 | 下モ和志賀 | 縄文(田舎館式) | 36 | 明堂長根 | 縄文 | 51 | 黒土館 | 中世(館) |
| 7 | 尾去Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ | 縄文(Ａ・Ｂ・Ｃ)館(Ｄ) | 22 | 瀬田石Ａ | 縄文 | 37 | 柏木森 | 縄文・平安 | 52 | 陣場 | 縄文 |
| 8 | 清水向 | 縄文 | 23 | 瀬田石Ｂ | 平安 | 38 | 中の崎 | 縄文・平安 | 53 | 日向屋敷 | 縄文 |
| 9 | 下葛岡Ａ | 縄文 | 24 | 田中 | 中世(館) | 39 | 孫右ェ門館 | 縄文・平安(館) | 54 | 御休堂 | 縄文 |
| 10 | 下葛岡Ｂ | 縄文 | 25 | 二ツ森 | 縄文 | 40 | 案内Ⅰ | 縄文・平安 | 55 | 白山堂 | 縄文 |
| 11 | 中ノ沢 | 縄文 | 26 | 堂の上 | 縄文 | 41 | 案内Ⅱ | 縄文 | 56 | 花輪館 | 中世 |
| 12 | 大黒館 | 中世 | 27 | 歌内 | 縄文・平安 | 42 | 東山Ａ | 縄文・弥生 | 57 | 孫右ェ門館 | 平安 |
| 13 | 大黒 | 縄文 | 28 | 鳥居平 | 縄文 | 43 | 産土神Ｄ | 縄文 | 58 | 堪忍沢 | 平安 |
| 14 | 鳥居平 | 縄文 | 29 | 飛鳥平 | 縄文・平安 | 44 | 東山Ｂ | 弥生 | 59 | 下平 | 縄文(田舎館式) |
| 15 | 下鷲の巣 | 縄文 | 30 | 北の林Ⅰ | 縄文・平安 | 45 | 赤坂Ｂ | 縄文 | | | |

# 第３章　発掘調査の概要

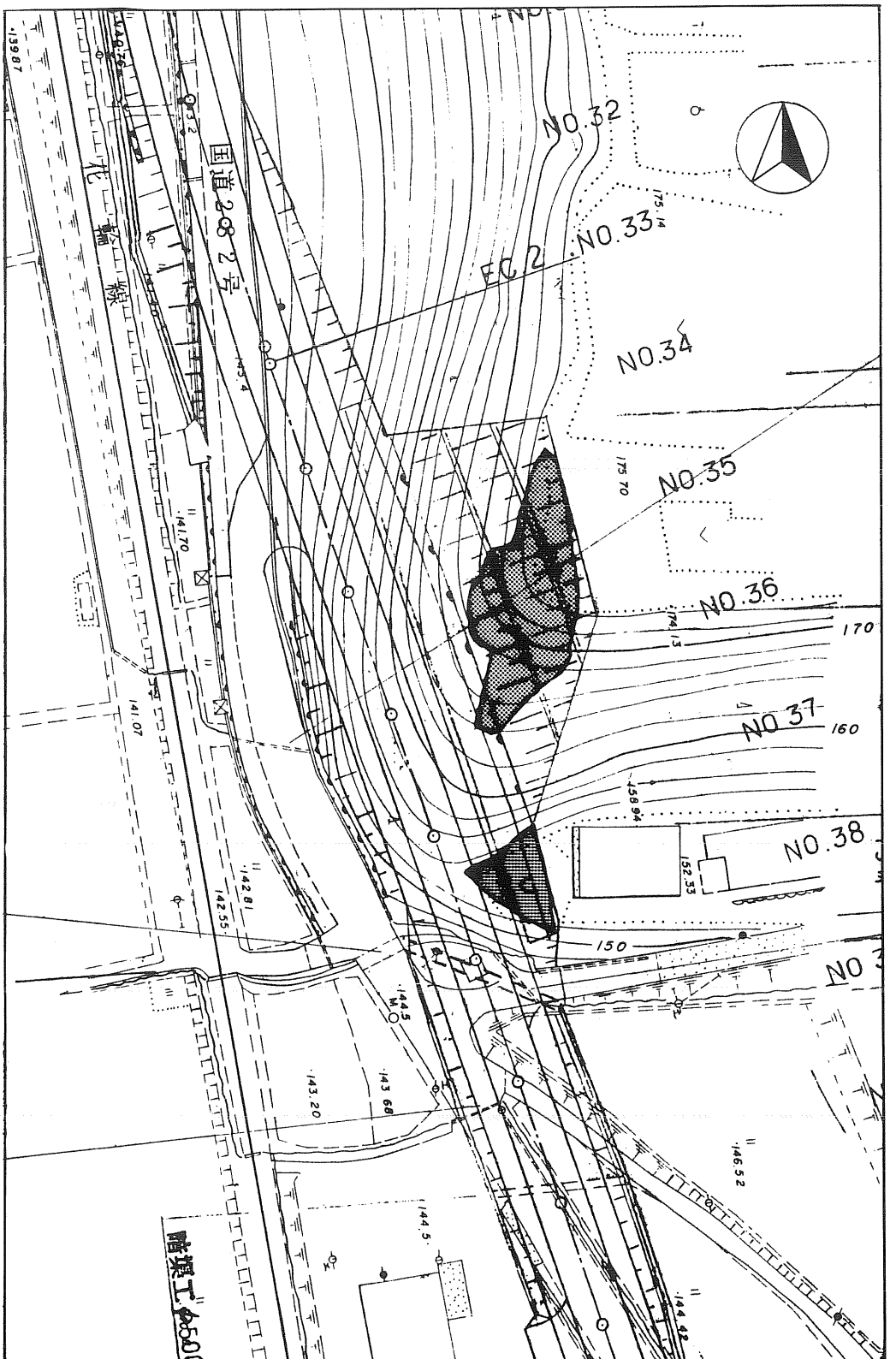
## 第１節　遺跡の概観

発掘調査に際しては、地形的な状況から標高約153mの大里段丘面をＡ地区、同175mの関上段丘面とその斜面をＢ地区として調査を行った。調査前の現況は、Ａ地区が庭園、Ｂ地区が杉を主とする山林及び雑草地であった。

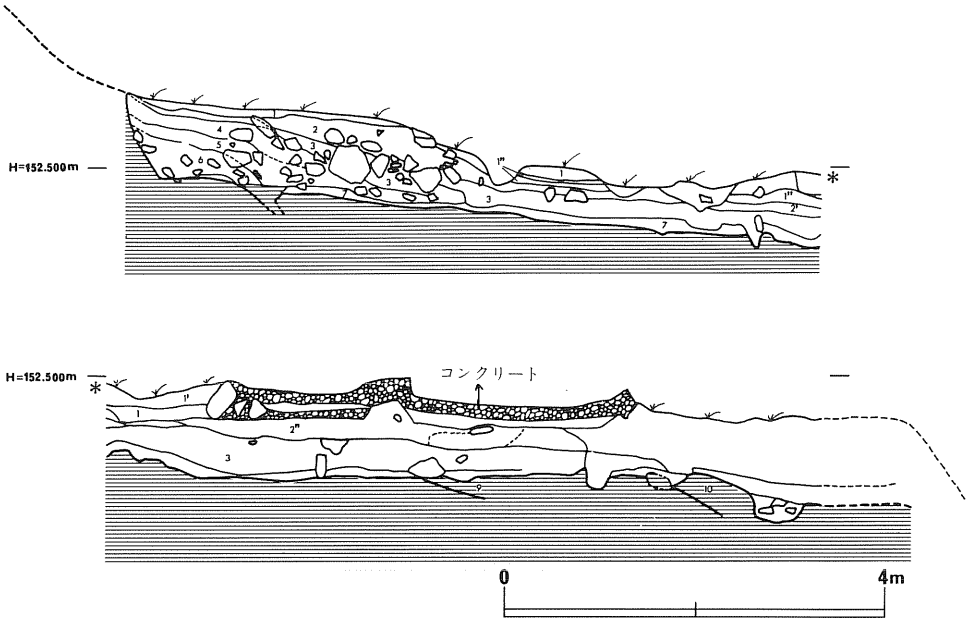
当初、Ａ地区は、庭木の植え付けや苑池の構築のために、遺物包含層及び遺構面の大部分が攪乱を受けているのではないかと予想されたが、実際には遺物包含層が厚く、後世の攪乱がそれ程及んでいないことが判明した。また、Ａ地区北端側は、庭園造成の際に関上段丘の崖面をかなり削り取ったような地形になっていたが、実際にはそれ程大きな改変は受けていなかった。Ａ地区東端部南北方向の基本層序は第７図に示した通りであるが、調査区東側から西に行くにつれ第２・３層の黒色土が厚くなる。第１層は、黒褐色を主体とする土で、庭園を造成する際に盛ったものである。１′・１″・１″層も基本的には同じものと思われるが、それぞれ小砂利や風化軽石粒・砂などを含むために分層されたものである。第２層は、黒褐～赤黒色の土である。大小の河原石を含み、調査区の西側ほどその量が多い。遺物の大部分はこの層から出土しており、当時の生活面も本層中に存在したものと考えられる。炭化物・風化軽石粒も若干含む。２′・２″層は色調が若干異なっているために分層されたものである。第３層も赤黒色の土であるが、明黄褐色の風化軽石粒が霜降状に含まれ、礫の含有量が２層よりも少ない。本層の上部まで遺物を含んでいる。第４・５・６層は黒褐～赤黒色を呈する土を主体とし、大小の礫・砂利を多く含む。斜面から崩れて来た土であろう。第７層は漸移層で黒褐色を呈する。細かい砂と風化軽石粒・ブロックを多く含む。第８・９・10層は地山土である。８層は黄褐～明




**第５図　現況地形南北縦断面概念図と遺構の位置**




第６図　工事計画図と発掘調査区




**第７図　Ａ地区土層図**

黄褐色を呈し、砂利・砂・風化した軽石の混土である。９層は全体として黄褐色を呈する地山段丘礫層である。10層は黄褐色の砂利層で、粘質土を含む。

Ｂ地区の表面地形は、関上段丘面(平坦面)から約25°の下り斜面となり、一旦、緩斜面を経て、再び約16°の斜面が続き、その下はＡ地区に向って35°～40°の急斜面となっている。このため、堆積土は各レベル、地点によってかなりの差がある。各地点の土層柱状図と、約16°の斜面の土層図を第39図に示した。第１層は、黒褐色の表土層である。軟くてボソボソしており、下部ほど微細な軽石を含む。第２層は、全体としてにぶい黄橙色を呈する軽石層である。この軽石は、粒子の径が0.5～10mmで断面は灰白色を呈する。いわゆる大湯浮石層と考えられ、この部分ではほとんどが二次堆積のものと思われる。本層は急な斜面にはほとんどなく、斜面途中の緩斜面に比較的厚く堆積している。第３層は黒～黒褐色土で、部分的に拳大の円礫を含むが、砂利などは少ない。縄文時代の遺物包含層で炭化物も若干含む。やはり急斜面にはあまり堆積せず、緩斜面が厚い。第４層は暗褐色土で、特に風化の進んだ軽石粒を含む漸移層である。第５層は、明黄褐色の地山土である。風化した軽石と砂(あるいは砂利)の混土であるが、砂がほとんど含まれない部分もある。柱状図の４層の下は、第５層である。

Ａ地区とＢ地区は、前述のように地形が全く異なっているため、検出された遺構の分布もかなり異なっている。Ａ地区からは縄文時代晩期の遺構ばかりが検出され、Ｂ地区からは縄文時代中期・晩期・平安時代・中世と各時代の遺構が検出されている。両者の検出遺構の時期で共通するのは縄文時代晩期だけである。Ａ地区では調査範囲が狭いということもあって、遺構の

際立った片寄りはないものの、Ｂ地区では、最も上の平坦面に遺構が少なく、斜面途中の緩やかな部分に比較的大きい規模の遺構がある。

土器・石器などの遺物は、Ａ地区では平坦面中央部から縁辺部にかけて多く出土し、その包含層も厚かった。これに対し、Ｂ地区では遺構埋土及び床面からわずかに遺物が出土する他は、散発的なものであった。

## 第２節　調査の方法

発掘調査は、調査区の地形からＡ地区、Ｂ地区に分けて行った。両調査区のほぼ中央部を通るような、座標北を指す基準線を設け、これをもとに４m四方のグリッド杭を打設した。調査区南端の基準点をMM50とし、各座標の交点には、東から西へMM・ＭＮ・ＭＯ……ＭＲ・ＭＳ・ＭＴとアルファベット、南から北へは、50・51・52・53……とアラビア数字を振り当てた。４m四方の各方眼区画の呼称は、このアルファベットとアラビア数字の組み合せによった。遺構平面図は、方眼杭を用いた遣り方測量で、基本的には20分の１、場合によって10分の１で作成した。

表土除去を含めて、全て人力とベルトコンベアーによって排土作業を行った。遺構の精査は、対称となる遺構によって４分法・２分法を用い、各種の写真は、基本的に、35mmモノクロ・カラースライド・ネガカラーを１セットとして撮影した。なお、調査区の西側は、急傾斜の崖面で、その直下には国道282号が走っており、地山土はシラス及び段丘礫層である。このため、落下物の防止のため必要な箇所に防護フェンスを設け、雨による土砂崩れ防止のために、調査対象地ではあっても発掘できなかった部分がある。

遺構番号は遺構確認順にＡ地区01・02……27、Ｂ地区101・102……133と、通し番号で付したが、後で遺構でないと判明したものについては、欠番にしている。

## 第３節　調査経過

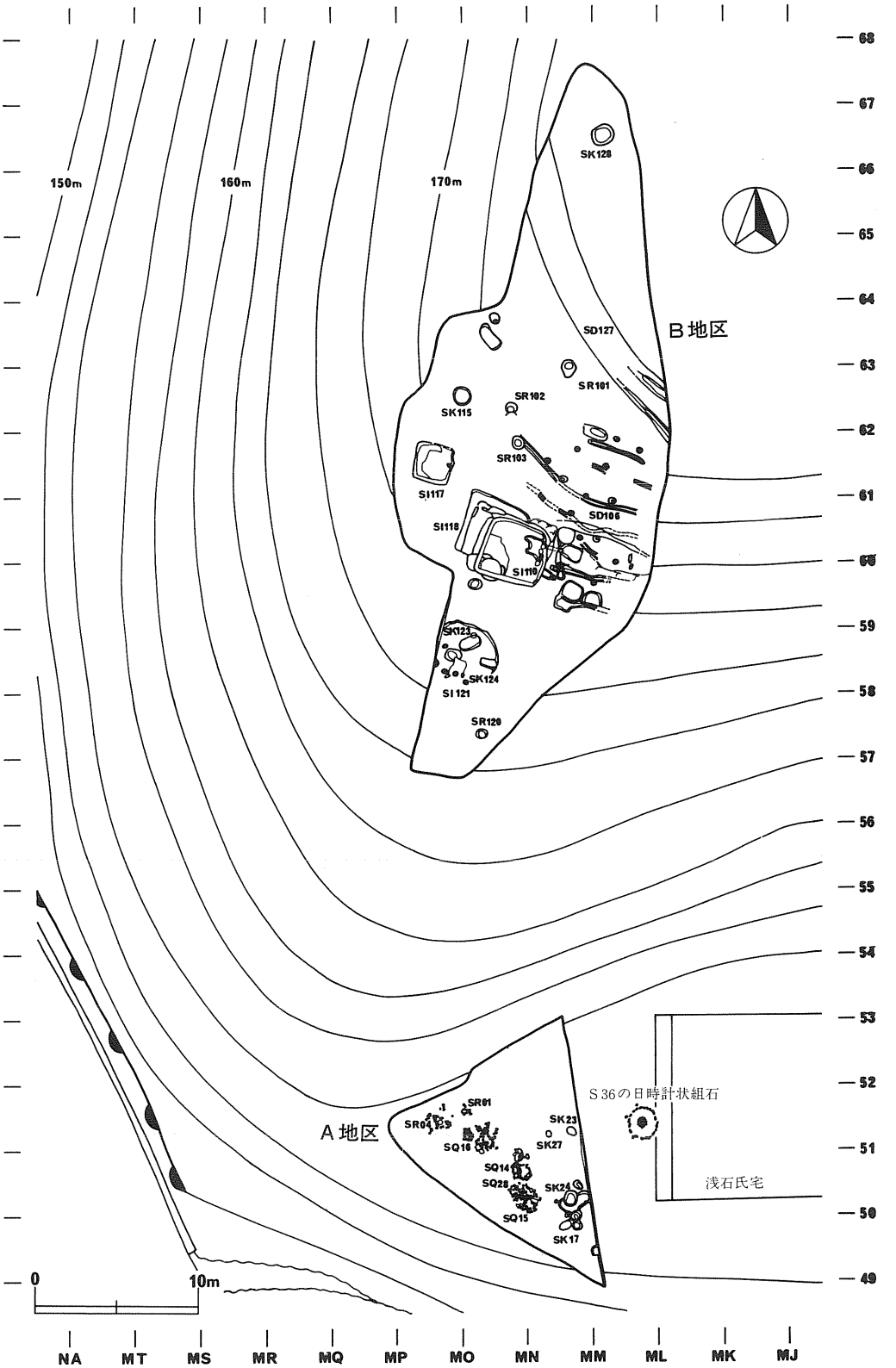
発掘調査は７月20日から開始した。調査対象地は、標高約153m前後の平坦面と、標高約166m～175mの斜面であるため、便宜上、前者をＡ地区、後者をＢ地区として調査を進めることとした。Ａ地区は、調査に入る直前まで浅石宅の庭園であったために相当の攪乱を受けているものと予想されたが、調査の結果では、遺物包含層の上部が削平を受けているくらいであった。Ｂ地区は、前年の範囲確認調査では斜面の途中の緩斜面から土師器を中心に遺物が採集されているものの、最上面平坦部からの流れ込みなどによるものであろうと予想していた。

調査は基本的に、粗掘・遺構検出・遺構精査・遺構の写真撮影・実測等を併行して行った。

Ａ地区では、７月30日までに３基の縄文時代晩期の土器棺墓（ＳＲ01・ＳＲ02・ＳＲ04）を検出した。いずれも現表面から20～30cmと浅いところから検出されたものである。しかもその位置が平坦面でも急斜面に近いところであった。このため、Ａ地区の平坦面は少なくとも縄文時代晩期以降から現況に近い形であったことが判明した。この土器棺墓が検出された面とほぼ同レベルあるいはそれ以下では、大量の河原石（拳大～ひとかかえ以上もあるような円礫）が集散しており、見方によってはいくつもの配石[註1]がありそうにも見える。しかしながら配石とする個々の単位の特定が困難で、その周囲あるいはその下での掘り込みのプランも確認できない。また、礫と礫の間からは、縄文時代晩期を中心とする土器が出土した。破片が大部分であるが、完形のままの出土もある。全体として、単純な遺物の捨場とするには、石器及びフレークの数が極端に少ない。大量の河原石を掘り下げる度に精査をくり返し行ったが、土器棺墓以外にはＳＱ06などを検出したにすぎないまま９月８日に一応現状での写真実測を行った。この時点での河原石の状況が、第11図である。この後、再び掘り下げを開始して精査、遺構の検出に努めた。その結果、第２層中で２基の配石（ＳＱ16、14）を、地山よりも少し高い面で２基の配石（ＳＱ15、28）を検出した。このうちＳＱ14は、小型ながらも立石とそれを取り囲んで放射状に配列された石を持つ、いわゆる日時計状組石であることがわかった。全体を地山近くまで掘り下げたところで、ＳＫ17をはじめとする土坑群を調査区南東側で検出した。これら配石・土坑の精査を進めたところ、ＳＱ14の下部からは石槨状の配石が検出され、ＳＱ28埋土下部からは土製耳飾が出土した。また、ＳＫ17、23からはベンガラが検出されたため、ＳＱ14～15・28や土坑群は、配石墓・土壙墓であると判断された。

Ｂ地区の調査も、７月25日から開始した。上位面から、下位の斜面側に粗掘を進めたが、排土の運搬が大変なために８月19日にはベルトコンベアーを導入した。Ｂ地区で初めて遺構を検出したのは、８月20日のＳＤ127である。その後、約25°の斜面からは縄文時代晩期の土器棺墓、中世に属するであろう幅がせまく浅い溝状遺構など、平坦に近い緩斜面からは平安時代の竪穴住居跡や土坑など、約16°の斜面からは縄文時代中期の竪穴住居跡や同晩期の土器棺墓・土壙墓などが、相次いで検出された。

この間、７月から９月にかけては雨の日が多く、土砂崩れの可能性についても注意を払わなければならないなど、斜面での発掘調査のむつかしさと、縄文－平安時代遺跡の立地について再考させられた調査であった。10月２日には機材等の運搬を全て終え、玉内遺跡の調査を終了した。




第8図　玉内遺跡遺構・グリッド配置図

# 第４章　調査の記録

調査地は、標高約175mの段丘の端部及びその崖斜面と、この崖面下部に棚状に分布する標高約153mの段丘面である。後者をＡ地区、前者をＢ地区として発掘調査したので、この後の説明は、両者を分けて行う。

## 第１節　Ａ地区

### １．検出遺構と遺物

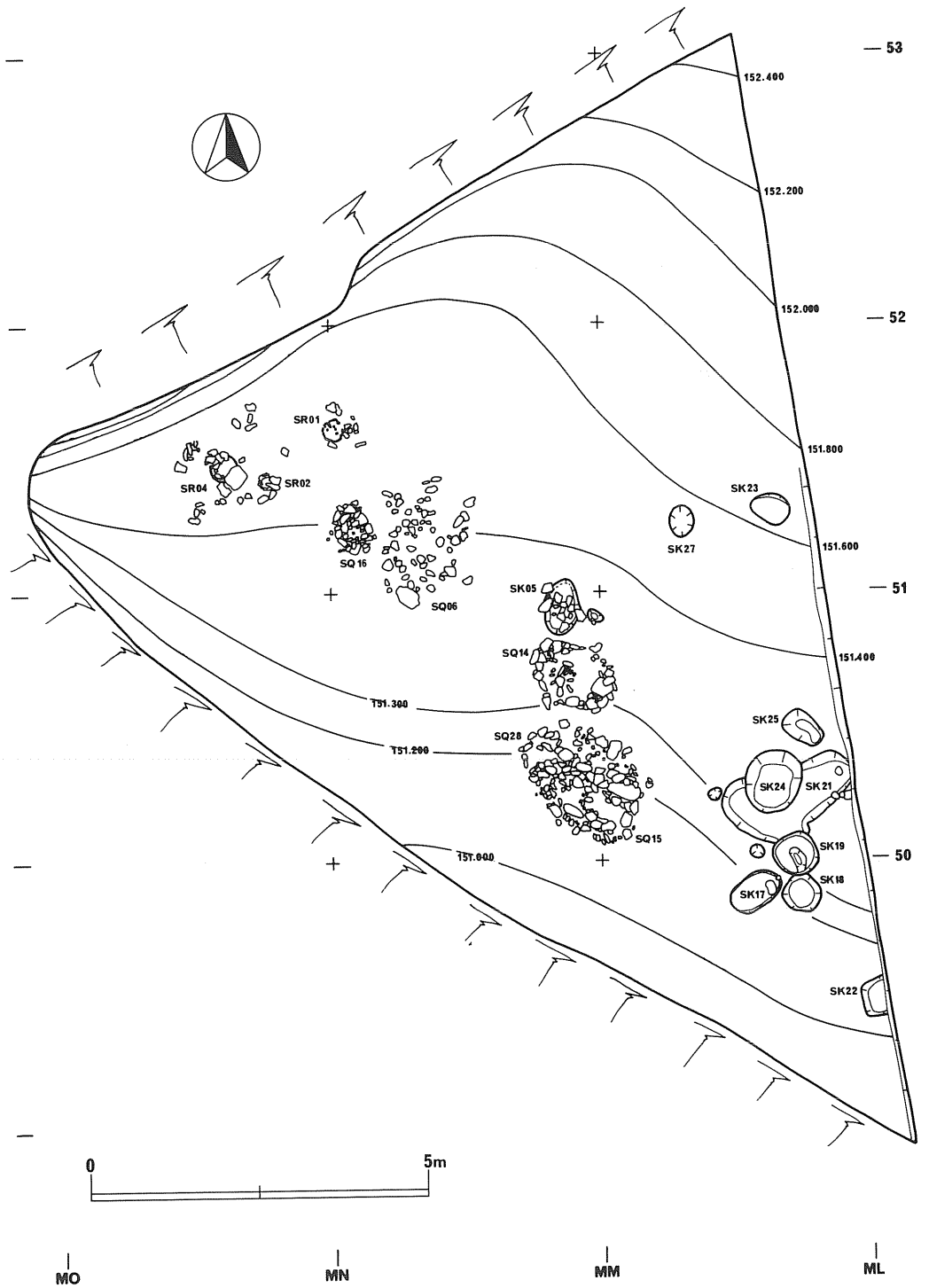
Ａ地区は、昭和36年に日時計状組石を持つ配石遺構が発見された棚状平坦面（大里段丘面）と同一面の西端部にあたる。調査区の東端は、昭和36年に発見された配石遺構の西方約４ｍである。

縄文時代晩期前葉と考えられる配石墓４基、配石遺構１基、土壙墓11基、土器棺墓３基が約100m²の狭い調査区内から検出された。これらの遺構は、狭い調査区の中にあってもその分布が若干偏っている。土器棺墓は調査区西端部（平坦な段丘面のうちでも最も西の縁に当る）、配石墓・配石遺構は中央部、土壙墓は東端部から主に検出された。また、これらの遺構の確認面も、それぞれに異なっている。土器棺墓は、第２層遺物包含層の最上部であり、配石墓・配石遺構は、第２層中・下位部である。これに対して土壙墓は、そのほとんどが地山面の直上で確認されている。本来的には、配石墓・配石遺構・土壙墓とも、第２層上・中位面で検出されるべき遺構と思われるが、第３章第３節で述べたような理由によって、それができなかった。さらに、掘り下げる途中で、確認できなかった土壙墓（特に地山面まで掘り込まれていない土壙墓）もいくつかは存在した可能性もある。各遺構の埋土及び底面などから出土した遺物は少ない。検出された遺構に確実に副葬されたと考えられるような遺物は２・３点にすぎないし、埋土中から出土した土器も、小破片にすぎず、図示できるものはごくわずかである。また、河原石の中に火熱を受けたものも若干見られたが、調査区内で焼土は検出されなかった。

以下、配石墓、配石遺構、土壙墓、土器棺墓の順で説明する。

#### （１）　配石墓

玉内遺跡における「配石墓」は、当時の人々が遺体を埋葬するために壙を掘った後、河原石などの石を棺状あるいは楕円形に配して埋葬施設とした遺構をさす。また、そのような埋葬施設の上に墓標的な役割を持つ配石などが一体のものとして存在する場合には、それをも含むこととする。ＳＱ14・15・28・16の４基が配石墓である。




第9図　A地区遺構配置図

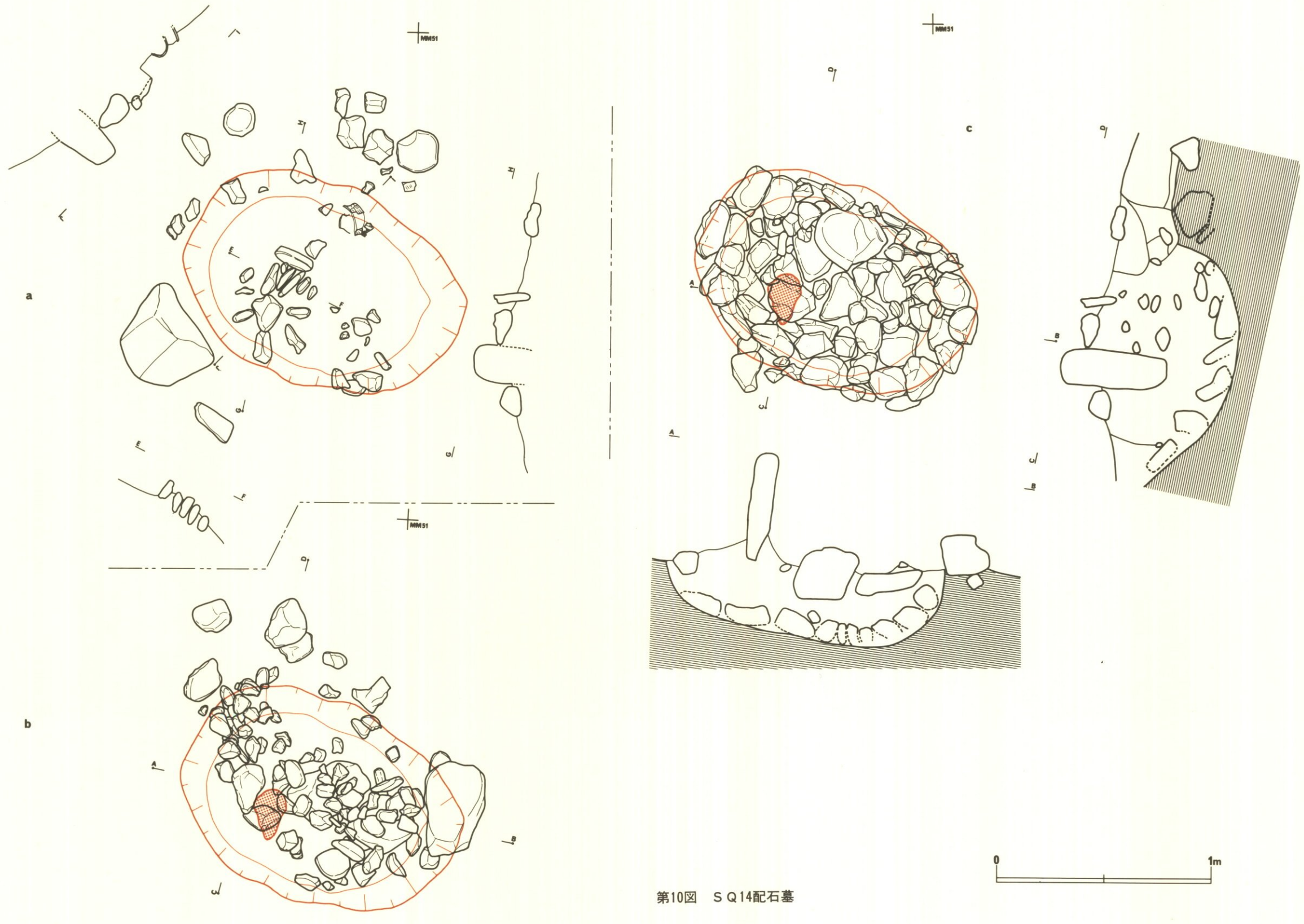
① ＳＱ14　配石墓(第10図、図版３・４・５)

調査区のほぼ中央部、第２層遺物包含層を約30cm掘り下げたところで、確認した。実はこの直前に、空中写真による河原石の平面分布図作成のために、写真撮影を行ったのであるが、この時すでに、立石とこれを３分の１周ほど囲むように配置された数個の河原石が映っている。しかしながら、同じ面でこの周囲には大小の河原石が多数あるなどして、その時点では確認できなかったものである。写真撮影後、人為的な配置でないと判断される河原石を、注意深く取り除き、いわゆる日時計状の配石遺構(以下、これを「ＳＱ14の上部」とよぶ)として確認したのが第10図aである。しかし、この時すでに、放射状に配置された石のうち２～３個は、取り除いてしまっている。写真撮影、平面図・エレベーション図の作成後、立石のみを残して、半截する形でさらに掘り下げたところ、約40cm下あたりから比較的小さな礫の集合が見られるようになった。この面で平面的に拡げたところ、東端に大きな石を置く形で長径140cm、短径90cmの範囲に集石のあることがわかった(第10図b)。これらの石の実測などをした後に、さらに掘り下げてみると、第10図cに見るような配石(以下、これを「ＳＱ14の下部」とよぶ)が出現したのである。この下部配石は、楕円形を呈する土壙の底面から一部壁面にかけて、ほとんど隙間なく敷き詰められたものであった。

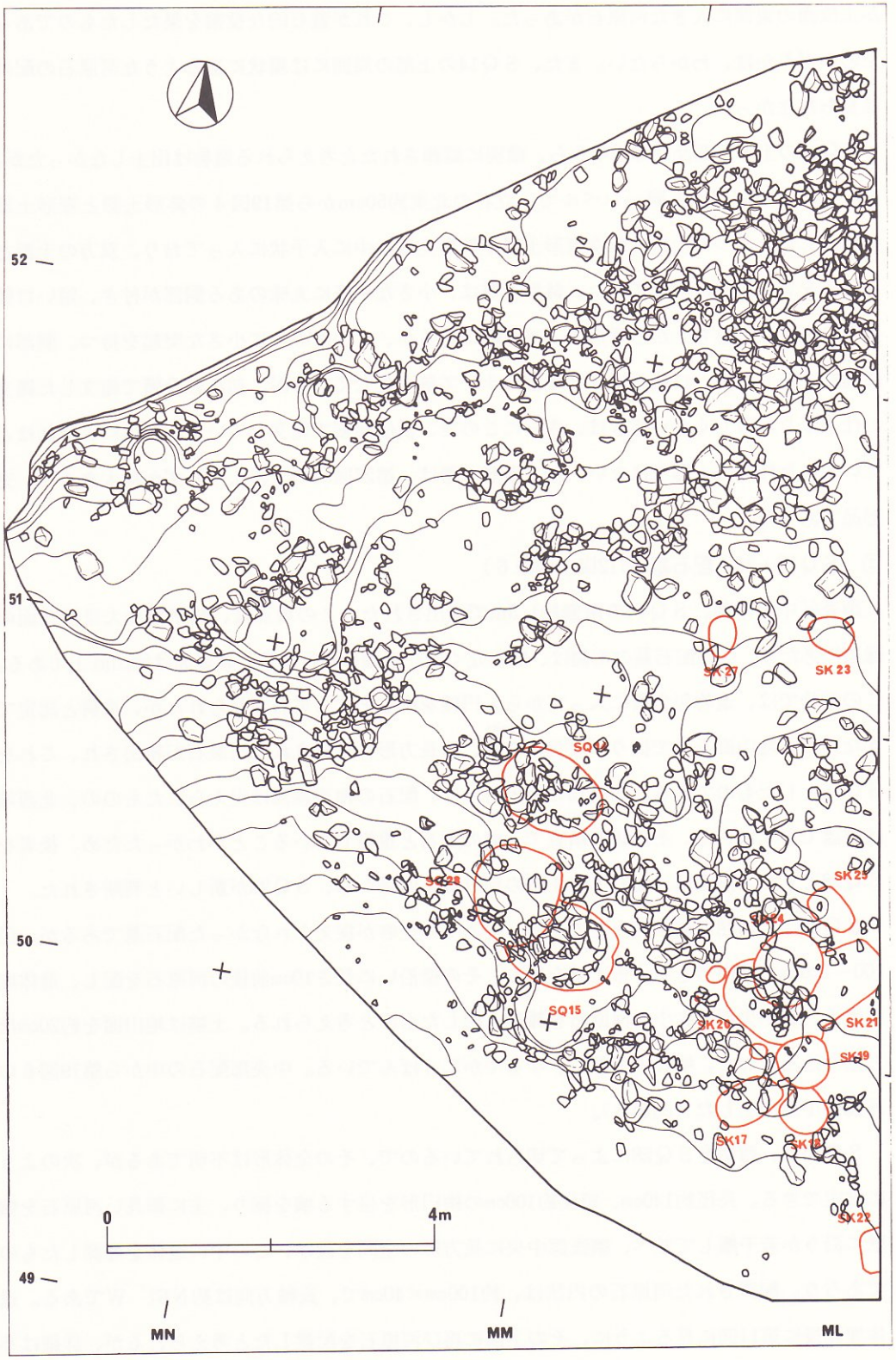
ＳＱ14の上部の平面形は、中央部に横断面形が不整台形で長さ50cmの細長い河原石をほぼ垂直に立て、その周囲に12個(本来は14～15個であったと思われる)の河原石を放射状に配置している。放射状に配置された河原石は、長さ７～16cm・幅７～10cm・厚さ３～７cmのもので、側面を上にして立てられている。放射状に配置された河原石の外縁を結ぶ線は、ほぼ円形を呈する。円の直径は、40～45cmである。この円の北北東側に接して、長さ20cmの偏平な河原石が、ちょうどこの円の半径に直交する形で立てられている。また、中央の立石と周囲の河原石の頂部のレベル差は、５～15cmほどしかなく、確認面では、立石がこれを取り囲む石よりも極端に突き出ている状況にはない。

ＳＱ14の下部は、第10図cのように、百数個の河原石を壙底から側壁下部にかけて、ほとんどすき間なく敷き並べたものである。その平面形は、長径約140cm、短径約90cmで、長軸方向はＮ62°Ｗである。河原石は、その長径が８～30cmと大小さまざまで、形も偏平なものから球に近いものまである。比較的大きな河原石を敷いて、隙間があくと、そこには小さめの石を充塡するという形をとっている。従って、敷き並べられた河原石の上面には凹凸が少なく、全体的になだらかで、中央部がゆるやかにくぼむ。これらの河原石を取り除くと、その下にはほぼ同形の土壙があった。この土壙の掘り込みは、わずかに段丘礫層まで達しており、やはり中央部がゆるやかにくぼんでいる。

ＳＱ14の上・下部の間には、人為的と思われる集石などは見られなかったが、下部よりわず




第10図　ＳＱ14配石墓




**第11図　A地区遺物包含層上～中位の河原石分布状況**
（橙色の線は配石墓下部の堀り込みと土壙墓）

か上位面の東部に大きな河原石があった。しかし、これが蓋石的な役割を果たしたものであったのかどうかは、わからない。また、ＳＱ14の上部の周囲には環状に巡るような河原石の配列は見られなかった。

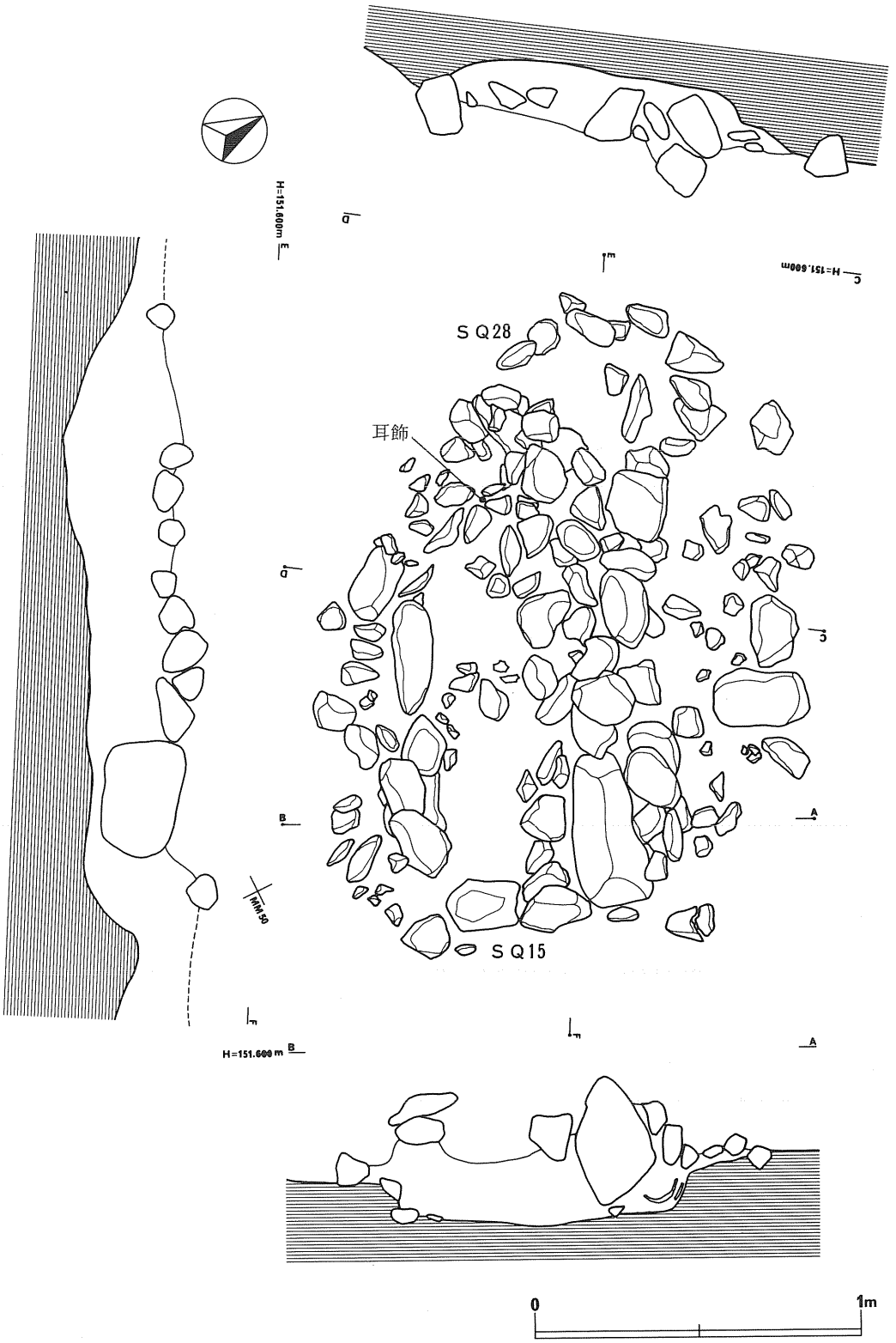
ＳＱ14の上・下部及び埋土中から、確実に副葬されたと考えられる遺物は出土しなかったが、ＳＱ14の上部確認面と同一レベルで、立石の北東約50cmから第19図４の鉢形土器と壺形土器が出土した。２つの土器は無文壺形土器が鉢形土器の中に入子状に入っており、双方の土器ともに口を立石方向に向けていた。鉢形土器は、小さな平底に丸味のある胴部が付き、短い口頸部がほぼ垂直に立ち上がる器形で、平口縁であるが、１ケ所のみに小さな突起を持つ。胴部に斜縄文を施した後、口頸部はユビで横にナデて無文化しているが、初めの段階で施文した縄文の仕上がりが芳しくない部分は、さらにこの後、横位回転で施文している。全体に、それほどていねいな作りの土器ではない。無文壺形土器は、第27図51の土器よりわずかに大きくて、完形品であった。

②　ＳＱ15・28　**配石墓**(第12図・図版６)

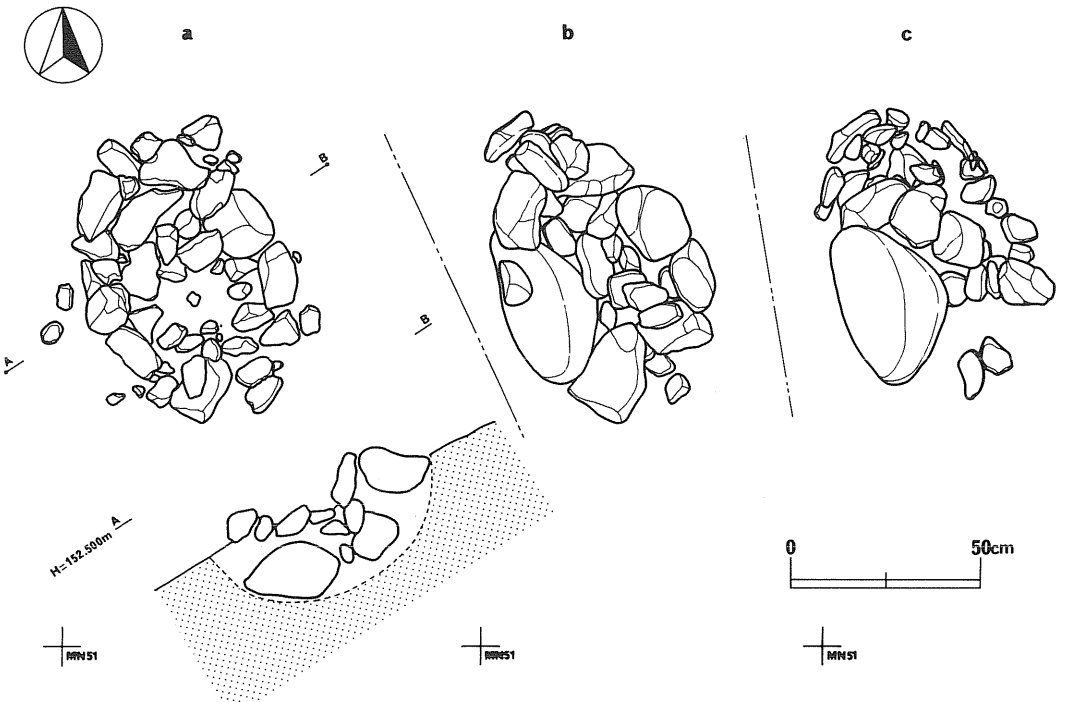
調査区中央南部、ＳＱ14の南側約1.5mで検出された。この地点は、略平坦な大里段丘面の縁辺にあたり、この配石墓の南側は、間もなく段丘崖面に移行する。確認面は地山直上である。この部分では、遺物包含層に入ってから、円礫を中心とする集石が見られたが、遺構と認定できないまま地山直上まで掘り下げたところ(註5)、略長方形に配置された河原石が検出され、これをＳＱ15としたものである。ＳＱ15の検出時には、配石の南東端部は捉えられたものの、北西端は確認できずにいた。その後の精査で、他の配石と重複していることがわかったため、後者をＳＱ28とした。両者は、配石下の土壙の切り合い関係から、ＳＱ28が新しいと判断された。

ＳＱ28は、周囲の河原石などのため、仲々その全容が捉えられなかった配石墓であるが、径100～120cmの略円形を呈する土壙を掘り、その壁沿いに長さ10cm前後の河原石を配し、遺体埋葬後に、壙中央部に大小の河原石を雑然と配したものと考えられる。土壙は地山面を約20cmほど掘り込んでおり、壙底中央部が、ゆるやかにくぼんでいる。中央部配石の中から第19図６の耳飾が１点出土した（図版６)。

ＳＱ15は、西側をＳＱ28によって切られているので、その全体形は不明であるが、次のように推定できる。長径約140cm、短径約100cmの楕円形を呈する壙を掘り、主に細長い河原石を壙壁に沿うか若干離して並べ、壙底部中央に長方形の空間を設け、この中に遺体を埋葬したものであろう。配置された河原石の内法は、約100cm×40cmで、長軸方向は約Ｎ67°Ｗである。遺体埋葬後に第11図に見るように、その上部に再び河原石を配置したと考えられるが、詳細は不明である。なお、ＳＱ28・15ともに、立石はなく、壙底面にも敷石などはなかった。ＳＱ15の壙底面は、略平坦である。




第12図　ＳＱ15・28配石墓




第13図　ＳＱ16配石墓

ＳＱ15の埋土中からは、第19図５・８の土器がいずれも破片で出土している。５は、散在していた破片を集めて接合したものである。無文の壺形土器であるが、口縁部を欠いている。

③　ＳＱ16　配石墓(第13図、図版７)

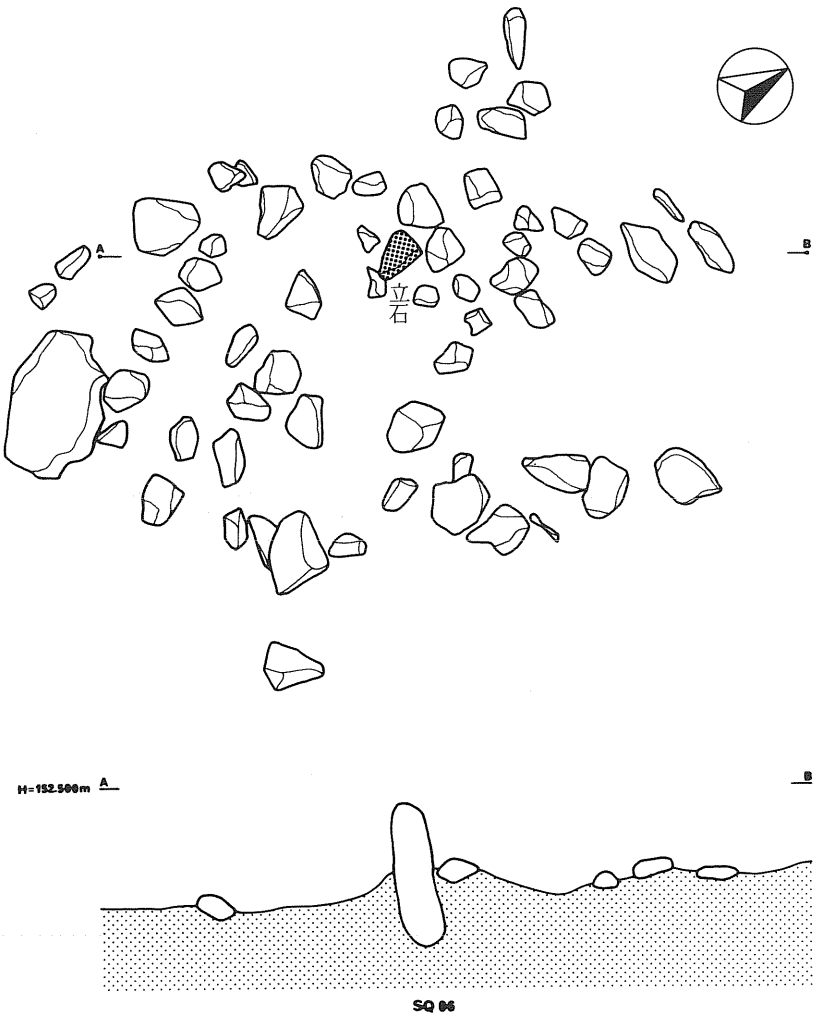
調査区西部、３基の土器棺墓群の近く、第２層中位で確認された配石墓である。長径約85cm、短径約55cmの楕円形を呈する平面プランの中に、大小の河原石を敷き並べあるいは積み重ねたものである。長軸方向は約Ｎ25°Ｗである。確認時(第13図a)には中央部に河原石はなく、少しくぼんでいた。第13図は、上部の石を取り除きながら、a→b→cの順で配置された石を記録したものである。aやcの状況からすれば、ＳＱ16は、小さな土壙を掘りその底面及び底部側壁に河原石を並べたものであろうことがわかる。しかしながら、壙底面が黒色土中であったためか、平・断面観察でも、掘り込みプランを確認することはできなかった。

（２）　配石遺構

ここでは「配石遺構」を、当時の人々がある目的をもって構築したと(我々が)判断し得る、石を主材とした構造物で、石囲炉・敷石住居・配石墓・柱の礎石などを除いたものをさすこととする。ＳＱ06の１基のみが検出された。

④　ＳＱ06　配石遺構(第14図)

調査区西部、ＳＱ16のすぐ東側第２層中位で確認された立石のみの遺構である。ＳＱ06とＳ

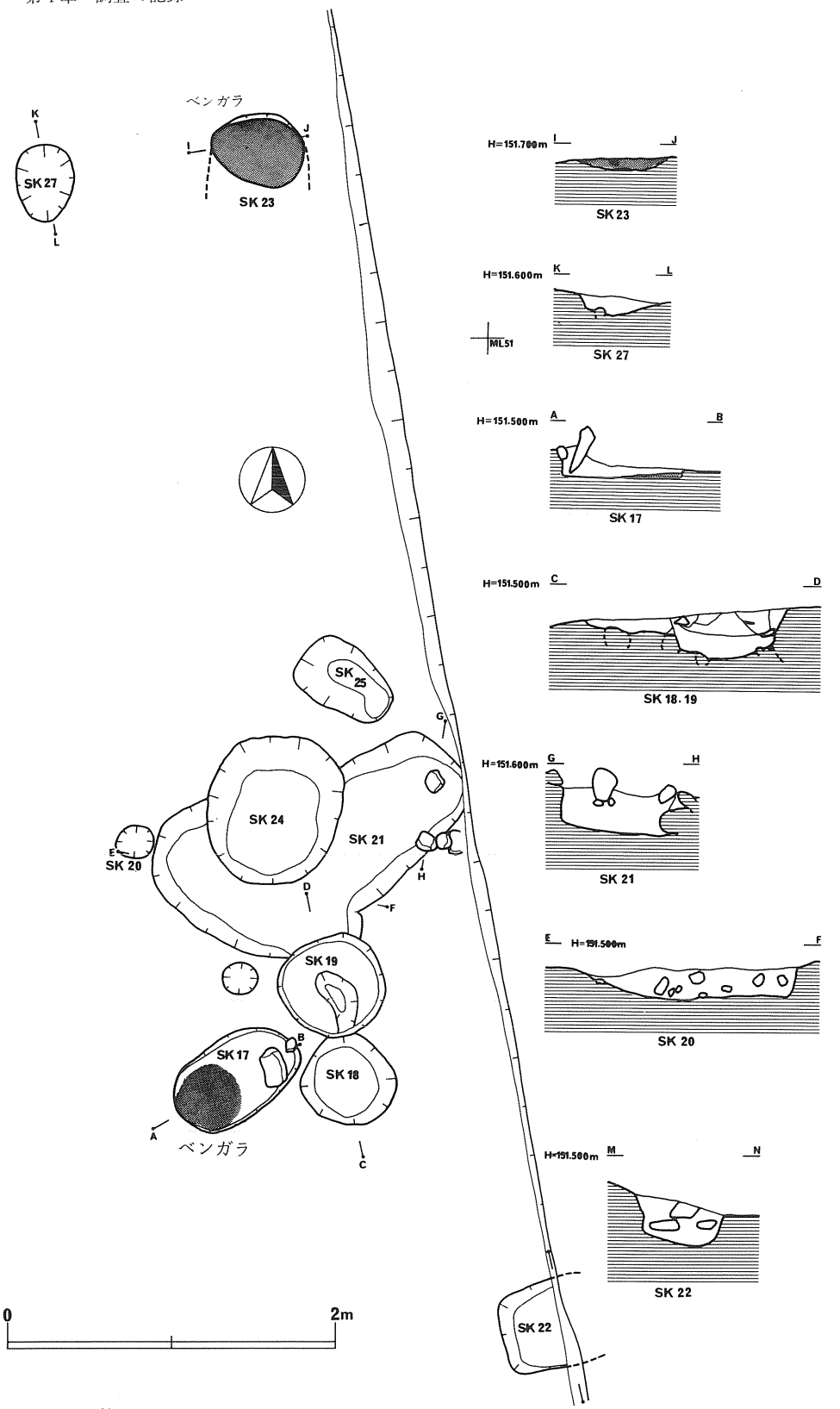



第14図　ＳＱ06配石遺構

Ｑ14の立石以外には、調査区内で、細長い石が立っていたものは他になかったので、これを配石遺構とした。ＳＱ16の面よりは１段低い。横断面形が略二等辺三角形(底辺９cm、高さ12cm)を呈し、長さが39cmの細長い礫がほぼ垂直に立っている。確認面及びこれより若干下位の周囲に存在する礫も含めた平面図が、第14図である。立石を北端近くにして、径10cm前後の河原石が、長径115cm、短径85cmのほぼ楕円形で立石を囲むようにして配置されたようにも見えるが、他遺跡の配石遺構と比べて、それらが人為的なものとは思われない。立石の下に掘り込みなどは検出されなかった。

### （３）　土壙墓

Ａ地区では、11基の土坑を検出したが、これらは、その形態や、坑底にベンガラの散布が見られるものがあることなどから、全て土壙墓として捉えることができる。平面形は、楕円形・




第15図ＳＫ17・18・19・20・21・24・25・22・23・27土壙墓

円形を呈するが、大部分の確認面は地山面直上であるため、壙底面のごく一部しか捉えることができなかったものもある。調査区中央部から東部にかけて位置するものがあるが、ほとんどの土壙墓は、調査区南東部(大里段丘の南縁)に集中し、切り合いも見られる。この部分では、土壙墓の周囲に径10cm前後、深さ数cm～10cmの小ピットが数個検出されているが、詳細は不明である。なお、土壙の深さの数値は、全て確認面からのものである。

① ＳＫ17　土壙墓(第15図、図版７)

調査区南東部にあり、ＳＫ18・19に隣接する。平面形は80cm×50cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ54°Ｅである。深さは、６～18cmであるが、本来数十センチメートルはあったものと考えられる。壙底面南西側にはベンガラの散布が認められ、反対側には偏平な河原石が立っていた。壙底面は平坦である。

② ＳＫ18　土壙墓(第15図、図版７)

調査区南東部にあり、ＳＫ19に北端わずかを切られている。平面形は径約60cmの円形を呈し、深さは８cmしか残っていない。壙底面は礫層に達しており、少し凹凸がある。

③ ＳＫ19　土壙墓(第15図、図版７)

ＳＫ18・20と重複しているが、この中では最も新しい。平面形は、径60～66cmの円形を呈し、深さは28cmである。埋土中に小さな礫を比較的多く含む。埋土中から第19図中の土器片が出土している。

④ ＳＫ20　土壙墓(第15図、図版７)

ＳＫ19・21・24と重複しており、19・24よりは古い。ＳＫ21との新旧関係は捉えることができなかった。長径約140cm、短径60～80cm、深さ約18cmで、平面形が楕円形を呈する。埋土中には、縄文土器の細片や炭化物が含まれ、小さめの礫が多く混入している。長軸方向はＮ65°Ｅである。

⑤ ＳＫ21　土壙墓(第15図、図版７)

西側をＳＫ24に切られ、ＳＫ20とも重複している。長径は推定で140cm、短径は70cm、深さ30cmで、平面形は楕円形あるいは小判形を呈する。長軸方向はＮ50°Ｅで、北東側に小さな立石がある。

⑥ ＳＫ24　土壙墓(第15図、図版７)

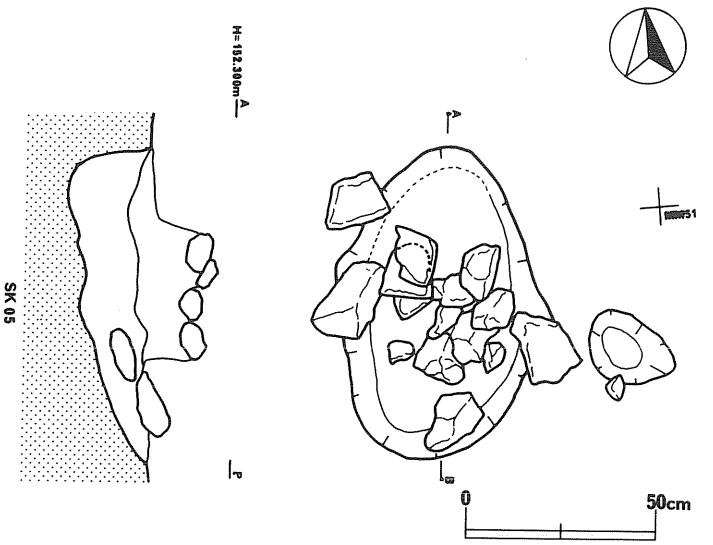
ＳＫ20・21を切っており、平面形が円形を呈する土壙墓である。径は80～90cm、深さは80～90cmと、この付近の土壙墓の中では最も深い。埋土中には大小の礫が多く入っていたが、それらは、特に配置されたという状況にはなかった。埋土中から縄文土器破片が出土しているが、第19図10はその中の１片である。

⑦ ＳＫ25　土壙墓(第15図)

ＳＫ21・24などの北側にある土壙墓である。平面形は長径60cm、短径40cmの楕円形を呈し深さは20cm、長軸方向はＮ54°Ｗである。

⑧　ＳＫ22　土壙墓(第15図)

調査区南東端部、大里段丘面の縁に位置する。東側半分ほどは調査区外であるが、平面形が楕円形か小判形を呈するものであろう。長径は不明で、短径は56cmである。埋土中に小礫が入っているが、特に配置されたものかどうか不明である。




第16図　ＳＫ05土壙墓

⑨　ＳＫ23　土壙墓(第15図)

ＳＫ27とともに、調査区中央東側に位置する。地山面直上でベンガラが散布していることから確認された。検出された部分は、ベンガラが散布している範囲のみで、全体のプランは不明であるが、長軸方向を略南北にし、平面形が楕円形を呈するものであろう。

⑩　ＳＫ27　土壙墓(第15図)

地山面直上で、図示した範囲内で黒色土の落ち込みが認められた。土壙墓の底面の一部であると考えられる。

⑪　ＳＫ05　土壙墓(第16図)

調査区中央部第２層中位の黒褐色土中に、地山に含まれている風化軽石粒の比較的多く混入した部分があり、これを精査したところ土壙であることを確認した。平面形は長径80cm、短径50cmの楕円形を呈し、深さは35cmである。埋土上面及び中位に図示したような礫があった。これらの礫は、周囲の礫が円礫であるのに対し亜角礫である。壙底面は、地山面まで達しておらず、多少の凹凸がある。埋土中から第19図11に示した土器片が出土している。

## (４)　土器棺墓

大型の粗製・半精製土器をほぼ垂直に埋設して、遺体(主に乳幼児か)を埋葬したと考えられる遺構がＡ地区で３基、Ｂ地区で４基検出されている。土器を棺とした墓と考えられる。Ａ地区では、調査区西端部(大里段丘の西端でもある)の第２層上面で、３基集中して検出された。土器棺内からは、３基とも人骨、副葬遺物が出土しなかった。また、土器を埋設するための掘

り方は、平面観察では捉えることができなかった。

① ＳＲ01　土器棺墓(第17図、図版８)

略平坦な大里段丘が、関上段丘崖に移行するライン際で検出された。第２層赤黒色土を掘り込んで、第18図３の粗製深鉢形土器を略正立させているが、平面・断面観察でも掘方ラインを明確に捉えることができなかった。断面図は、埋設されている土器の左側にある河原石を、埋めもどした時に置かれたものと考え、掘方推定ラインを入れたものである。棺内の埋土は、軟くしまりのない黒褐色土である。

第18図３が、棺に使用された土器である。復原できた器高は40cm、底径9.2cm、最大径34.3cmであるが、器高はあと数cmプラスされるものと推定される。器外面と内面の一部に煤状炭化物が付着し、体部下半が二次的火熱を受け脆くなっている。煮沸用土器の転用である。

② ＳＲ02　土器棺墓(第17図、図版８)

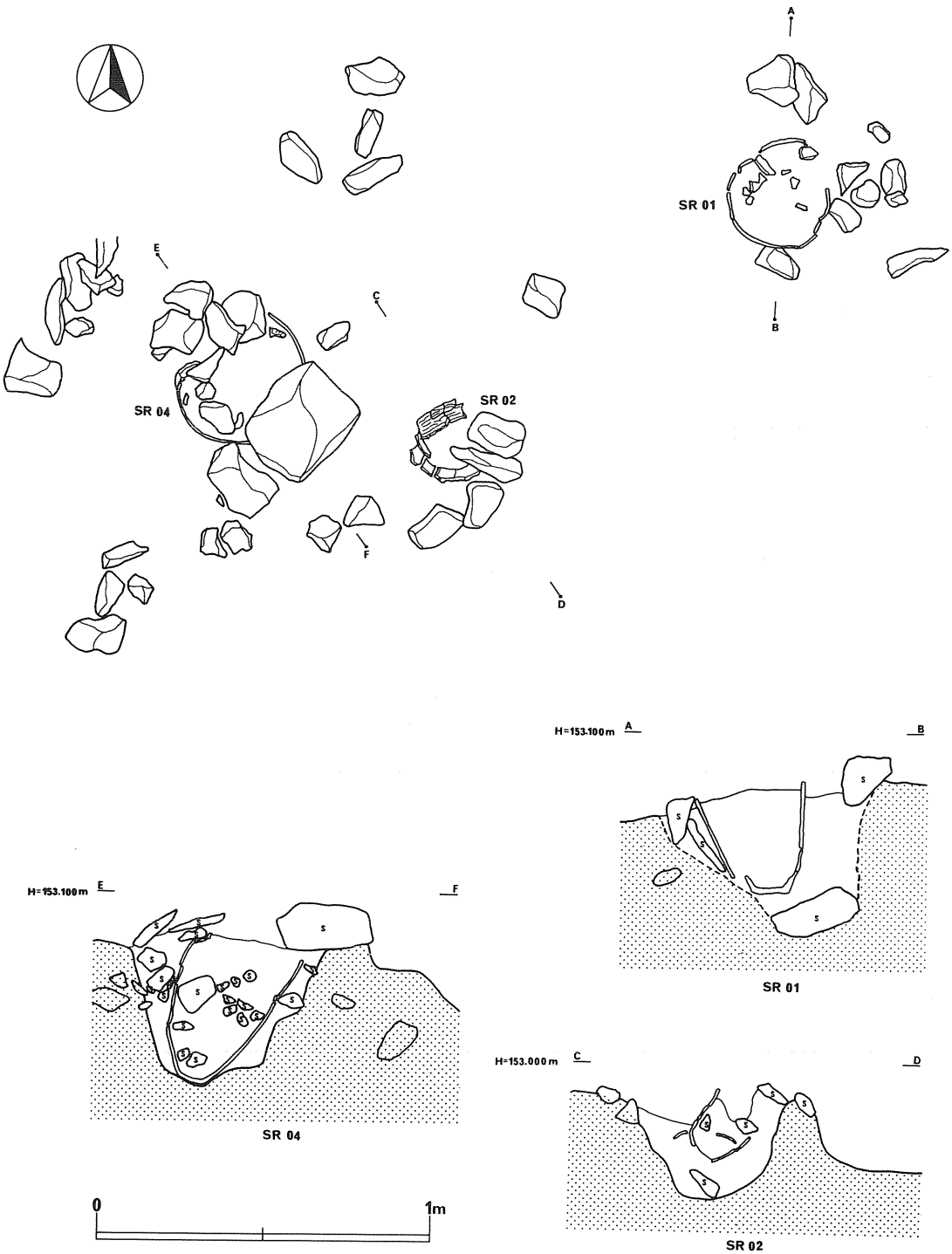
ＳＲ01の南東約100cm、ＳＲ04の東約40cmで、両者の確認レベルと同レベルで検出された。第２層上部から径約40cmの穴を掘り、若干埋めもどした後、深鉢形土器を埋設したものであろう。この埋設土器は、検出時には、口を南側に傾けていた。埋土は、軟らかくしまりのない黒色土である。埋土中位で、この土器の一部の破片を、あたかも蓋にしたかと思われるような状況が見られた。土器底部を欠くが、意識的に底部を除いたものか、割れてしまったのか、不明である。

第18図２が、埋設されていた土器である。小さめの底部からゆるやかに外反して立ち上り、断面くの字状の頸部を経て、外反する口縁部に至る深鉢形土器である。口縁は大きさの異なる２種類の山形突起によって波状となっている。口頸部に上下を一条の沈線で画す文様帯があり、入組状三叉文が横位に７回ほど繰り返されている。斜縄文を地文としているが、体部はヘラケズリ、(ユビ)ナデによってほとんど見えない。内外面とも煤状炭化物が厚く付着しており、煮沸用土器の転用と見られる。

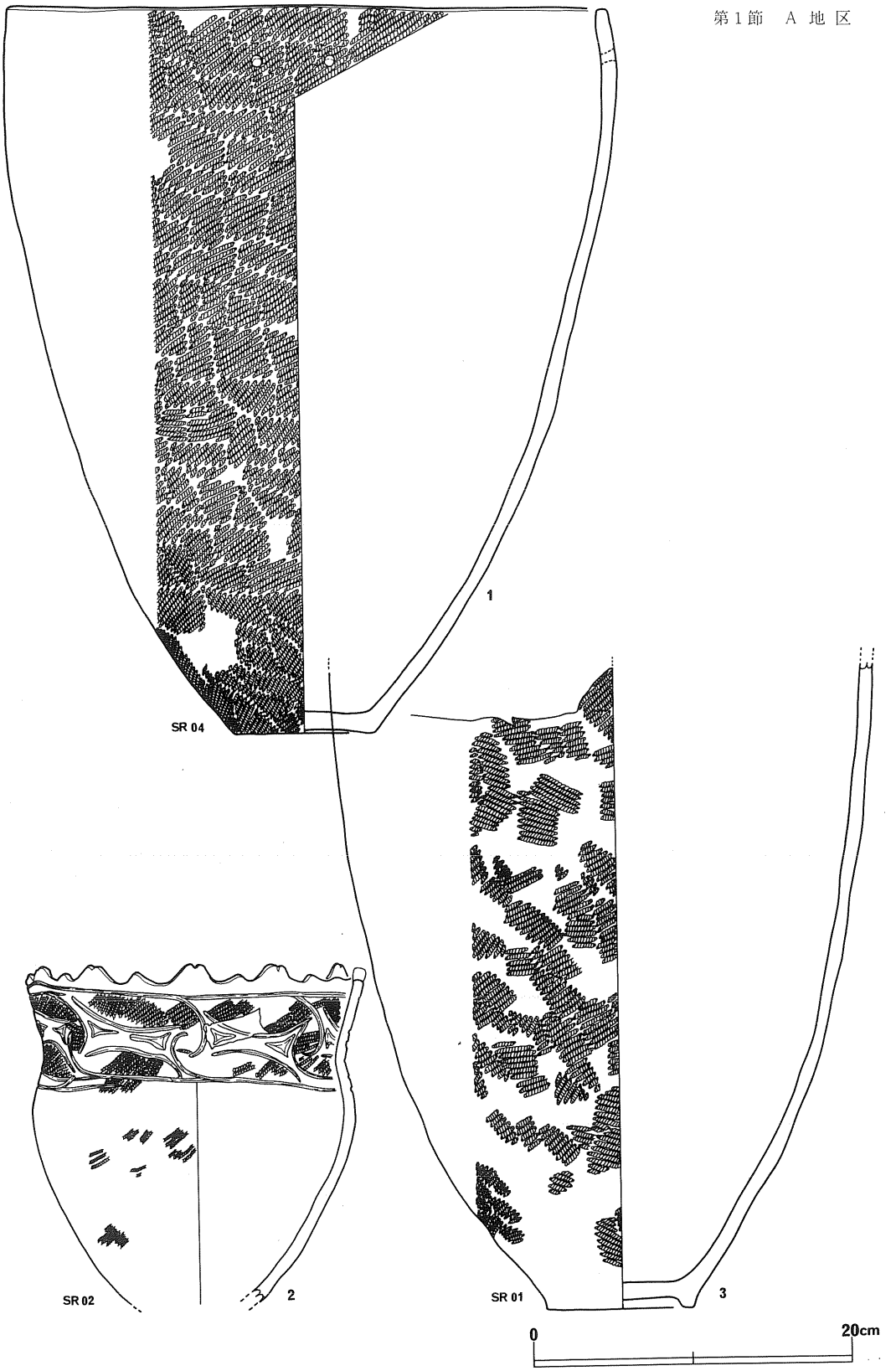
③ ＳＲ04　土器棺墓(第17図、図版８)

３基の土器棺墓の中では、最も西側にある。第２層上部から、口径60cm、底径30cm、深さ約45cmの穴を掘り、この中に、第18図１の粗製深鉢形土器を、口を若干南に傾けた状態で埋設している。埋設された土器の、北西側に数個の河原石、南東側に大きな河原石があるが、蓋的なものか。北西側の石によって土器口縁部が一部割れている。埋土は黒褐色土であるが、小中礫を多く含み、しまりがない。

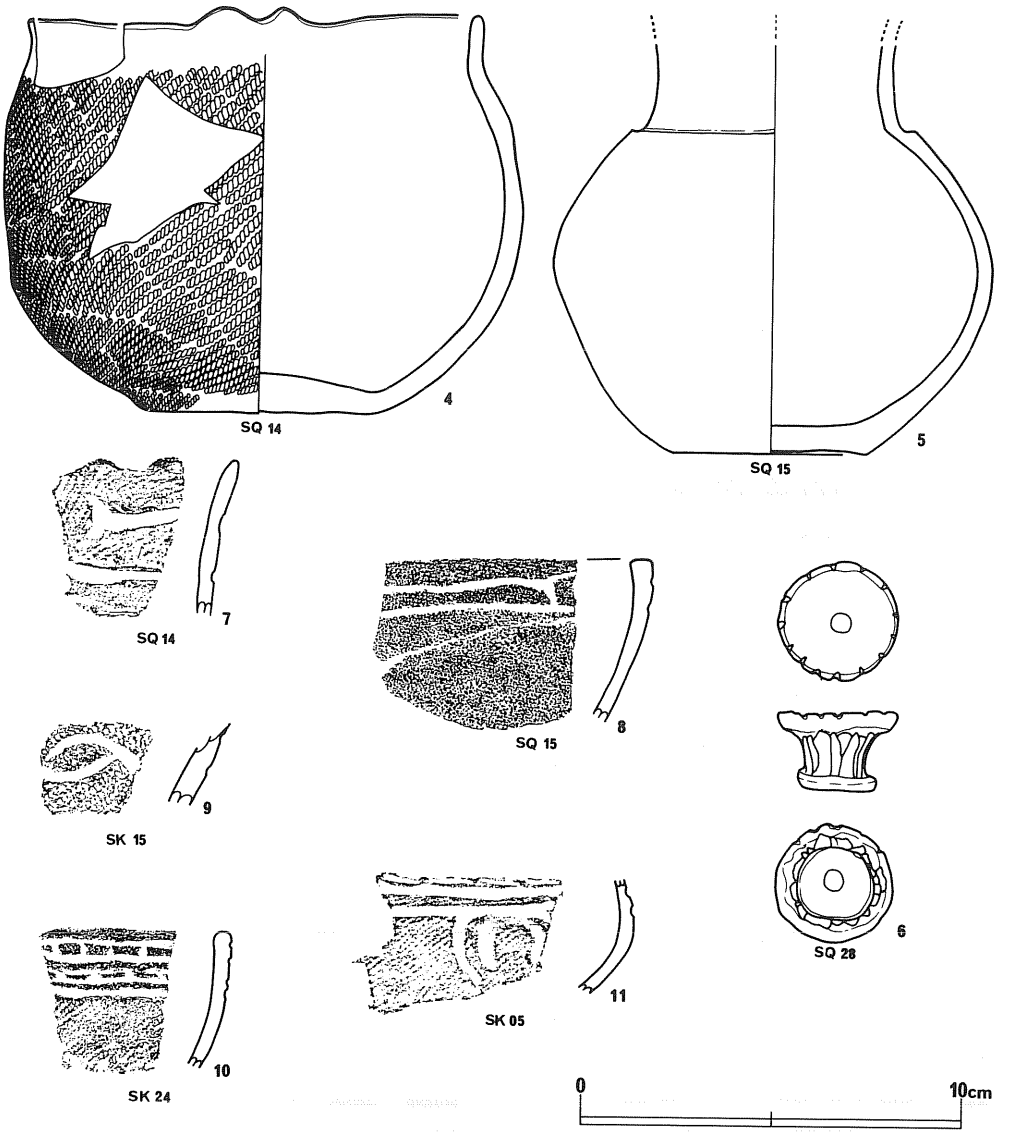
埋設された土器は、器高46cm、口径37cm、底径8.5cm、最大径38.5cmである。外面には全面ＬＲの斜縄文が施され、口縁下3.5cmに補修孔がある。内外面とも煤状炭化物が顕著に認められ、煮沸用土器の転用であることがわかる。




第17図　ＳＲ01・02・04土器棺墓




第18図　ＳＲ01・02・04土器棺




第19図　Ａ地区遺構内出土遺物

２．遺構外出土遺物

Ａ地区からは、第２層・第３層上部から縄文時代の土器・石器が出土している。これら遺物は、大量に散布している河原石と一緒に出土しており、場所によってその疎密がある。多く出土したのは、大里段丘の縁辺側であり、関上段丘の崖面側からはごく少量しかない。出土総量は、接合・復原前の土器がコンテナで12箱、石器・剝片が0.5箱である。なお、遺物包含層の厚さは30～100cmほどであるが、土層を細く分け、層位毎に遺物を採り上げるということは行っていない。

## (1) 土器

土器は、縄文時代中期・後期・晩期に属するが、大半は後期末葉～晩期前葉のものである。大部分の土器は、小さな破片での出土であるが、中には、完形品のものや、それが土圧等で割れた状況を示すものもある。接合・復原作業を行った結果、図上で復原したり、体部下半を欠くが概ねその形のわかるものは71個体に及ぶ。

### ① 中期の土器(第34図78～80)

破片のみで約10点出土している。78は前葉、79は中葉、80は後葉に属するものと考えられる。80は、B区SⅠ121が該期の竪穴住居跡であり、斜面から転げ落ちて来たものかもしれない。

### ② 後期中葉の土器(第20図12・13、第34図81・82)

深鉢形土器(81・82)、鉢形土器(13)、注口土器(12)があるが、図示できなかったものも含めて、その量は少ない。12は、小さな底部から急な屈曲部をもって外傾する体部が上半ですぼまり、「く」の字状に折れ曲り、大きく外反する口頸部に至る注口土器である。口縁部と底部を欠く。体部上半に太くて短い注口が付いている。図上で復原できた土器であり、文様構成の詳細は不明であるが、a 口頸部文様帯、b 体部上半文様帯、c 体部下半文様帯、d 体部下半～下端文様帯が、1条ずつの沈線で画されている。aは上下に刻目帯を有すると思われ、その間は無文、bは磨消縄文帯、cは地文の上に斜格子目状の沈線、dは無文である。接合しない体部上半の破片で、突起の剝落した部分をもつものがあり、その位置に1～3個の突起が付されたものであろう。

### ③ 後期後葉の土器(第20図14～16、第21図17、第34図83～87)

深鉢形土器(16・83～87)、鉢形土器(14)、注口土器(17)がある。深鉢形土器は、体部上半から頸部で小さく屈曲し、口頸部が外傾する器形のものが多い。文様では、瘤状小突起、竹管による刺突列、刻目帯などが施されている。14は、外形して立ち上がった体部が、上半で内傾し直立気味の短い口頸部に至る鉢形土器である。体部上半で上下2個1対の小孔を4ケ所に有する。17は極小の注口土器で、注口部裏側に人の顔にも見える3個の瘤状小突起を有している。

### ④ 後期最終末の土器(第21図20～22、第34図88～96、図版10)

深鉢形土器(88～96)、注口土器(20～22)がある。深鉢形土器は、口頸部が屈曲して外傾するもの(88・90・93・95)、外反するもの(94・96)、直立するもの(91・92)があり、口唇部に小突起を持つ。主文様は入組状三叉文で、刻目帯や瘤状小突起の付されるものもある。注口土器は、ほとんどが無文で、21・22ではわずかに口縁やその上端に三叉文が施されている。口縁は、平口縁のもの(20)と、突起のあるもの(21・22)がある。

玉内遺跡A地区から出土した土器では、縄文時代晩期前葉のものが量・器種ともに最も多い。

これらの土器は、文様のモチーフ・文様構成・器形などの上から大きくは３期に分けることができる。そこで、ここではこれらを晩期前葉第１期・第２期・第３期としてその概略を説明する。

⑤　**晩期前葉第１期の土器**(18・22～27図・35図97～106・108～110・121～127・36図128～130・141・150・151、図版10・11・13)

第１期の器種構成としては、深鉢形土器、鉢形土器、台付鉢形土器・浅鉢形土器、台付浅鉢形土器、注口土器、壺形土器の他、無文の小型土器がある。

深鉢形土器は、土器棺墓(ＳＲ02、ＳＲ01)に使用されたようなものである。

鉢形土器は、体部上半に屈曲部を持たず、口縁部が少し内弯ないし直立するもの(24図、25図35・36、35図108・121～126、36図128～130)と、頸部のくびれるもの(35図97～110)がある。口縁は、壺形土器、一部の浅鉢形土器、台付浅鉢形土器を除き共通で、低い山形突起がめぐり、中には、１ケ所のみにそれの見られるものもある。

台付鉢形土器は、大型で頸部がくびれ口縁部が大きく外反ないし外傾するもの(22図、23図26・27)と、中～小型で頸部のくびれを持つもの(23図30)と、持たないもの(23図28・29)がある。台部はいずれの場合にも、体部にくらべて小さめであると考えられる。

浅鉢形土器(25図37・38)は、低い体部から屈曲部を持って口縁部が大きく外反する形である。37の口唇には１ケ所のみに装飾性の強い３個１組の突起が付き、38は平口縁である。

台付浅鉢形土器(25図39)は、台付鉢の体部中央から上半が取り除かれたような器形を呈し、平口縁である。

注口土器(26図40・35図127)は、完形品がなく、全体の形状は不明であるが、断面形が算盤珠状の体部にやや長い頸部が付き、内弯する口縁部ののるものである。口縁部のみか、口縁部と注口部にだけ三叉文や沈線が施される。

壺形土器は、球形の体部に、短い口頸部が屈曲を持って外反するもの(26図41・43、27図51・52)と、長胴のカメのような体部に大きく外傾する短い口頸部の付くもの(27図50)がある。

26図44～49の無文土器は、ミニチュア風のものも多いが、44を除き、内外面ともにていねいなミガキが施され、特に46などは、赤褐～黒褐色を呈し、茶器を想わせる優品である。

装飾・施文のあり方では、口頸部・体部上半にのみ入組三叉文・玉抱き三叉文が平行沈線とともに、時には磨消縄文手法を用いながら施文されるものと、それが体部中・下半にまで及ぶものがある。22図23は、沈線による入組部に円形の刺突が施され、23図29の体部文様は極めて浅いラフな沈線による磨消縄文手法をとっているが、下描きのまま仕上げてしまった感じである。この土器の口唇には、１個だけ大きな突起が付されている。27図52は朱塗り土器である。

⑥　**晩期前葉第２期の土器**(第28～31図、35図107・111・112・114、36図135・138・143～147、

図版11・12)

第2期の器種構成としては、鉢形土器・台付鉢形土器・浅鉢形土器・台付浅鉢形土器・注口土器・壺形土器がある。深鉢形土器も主に粗製のものがあるが、図示できなかった。

鉢形土器は、体部上半に屈曲部を持たず口縁部が少し内弯ないし直立するもの(28図53・54、36図135・138)と、頸部のくびれるもの(28図55、35図107・111・112・114)があるが、1期の鉢に比べると両種類とも器高が低く口頸部も短い傾向にある。

台付鉢形土器(28図56～59、36図150)は、1期に比べ体部が低く、概して小ぶりである。台部は外側に強くふんばる形のものとなっている。

浅鉢形土器は、頸部にくびれを持たないもの(29図60)と、体部上半に屈曲部を持ち口縁部が大きく外反・外傾するもの(29図61、36図143～147)と内弯するもの(36図144)がある。

台付浅鉢形土器(29図62～64)は、上半にふくらみを持つ台部に、口縁部が大きく外反する類の浅鉢形土器をのせた形となる。

注口土器は、この期のものが最も多い。算盤珠を横に半割したような体部から、内傾する頸部に至り、急激な屈曲をもって内弯する口縁部の付くもの(30図66、31図67・68)と、頸部から口縁部に屈曲を持たずに達するもの(30図65)がある。前者が多いようである。

壺形土器は、略球形の体部から内傾して少し長めの頸部を経、外反する口縁部に至るもの(31図69)である。

装飾・施文については、1期で盛行した入組三叉文がより組織的・連続的な用いられ方となった結果、浮彫的な効果となって現れている。また、平行沈線間を刻目で充塡することが多くなる。口縁部や口唇の装飾は第1期に比べて、鉢形土器などでは突起が小さく低くなりその間隔も密になる反面、注口土器などでは1ケ所のみに華麗で浮彫的な装飾が施されることが多い。29図64・31図69は朱塗り土器である。

⑦　**晩期前葉第3期の土器**(32・33図、35図113・115～120、36図131～137・139～142・148・149、図版11・12)

第3期の器種構成は、浅鉢形土器と台付浅鉢形土器を欠く他は1・2期と同様の器種構成であるが、土器の全体量としては1・2期よりも減少傾向にある。

深鉢形土器は、膨らみの少ない体部から、上半で内傾して短かい口頸部に至る器形のもの(32図71)と、外形気味に立ち上がった体部が、内弯ないし直立気味に口縁部に至る器形のもの(36図139・140)がある。

鉢形土器は、体部上半で屈曲するもの(32図73、33図75、35図113・115～120)と、屈曲部を持たずに内弯ないし直立する口縁部に至るもの(32図72、33図74・76、36図131～134・136・137・142)とがある。前者の口頸部は第2期よりもさらに幅がせまくなる。73・75については、

台付鉢形土器である可能性もある。

注口土器(33図77)は、２期のものに比べて体部がさらに低くなり、代って頸部が長い器形となる。従って、注口部も低い位置にあることから、１・２期の注口土器と、器全体として同じ容量を持っていても、実際の有効内容量はかなり少ないものとなっている。

壺形土器(32図70)は、ややずんぐりした体部に、短く外反する口縁部の付くものである。

口縁部の装飾は、１・２期に比べて控え目で、さらに低く小さな突起が連続的に付される。主文様は羊歯状文で、体部にＸ字文・Ｃ字文・雲形文などの施されるものもある。文様帯、特に口縁部文様帯の幅がせまくなる傾向にある。

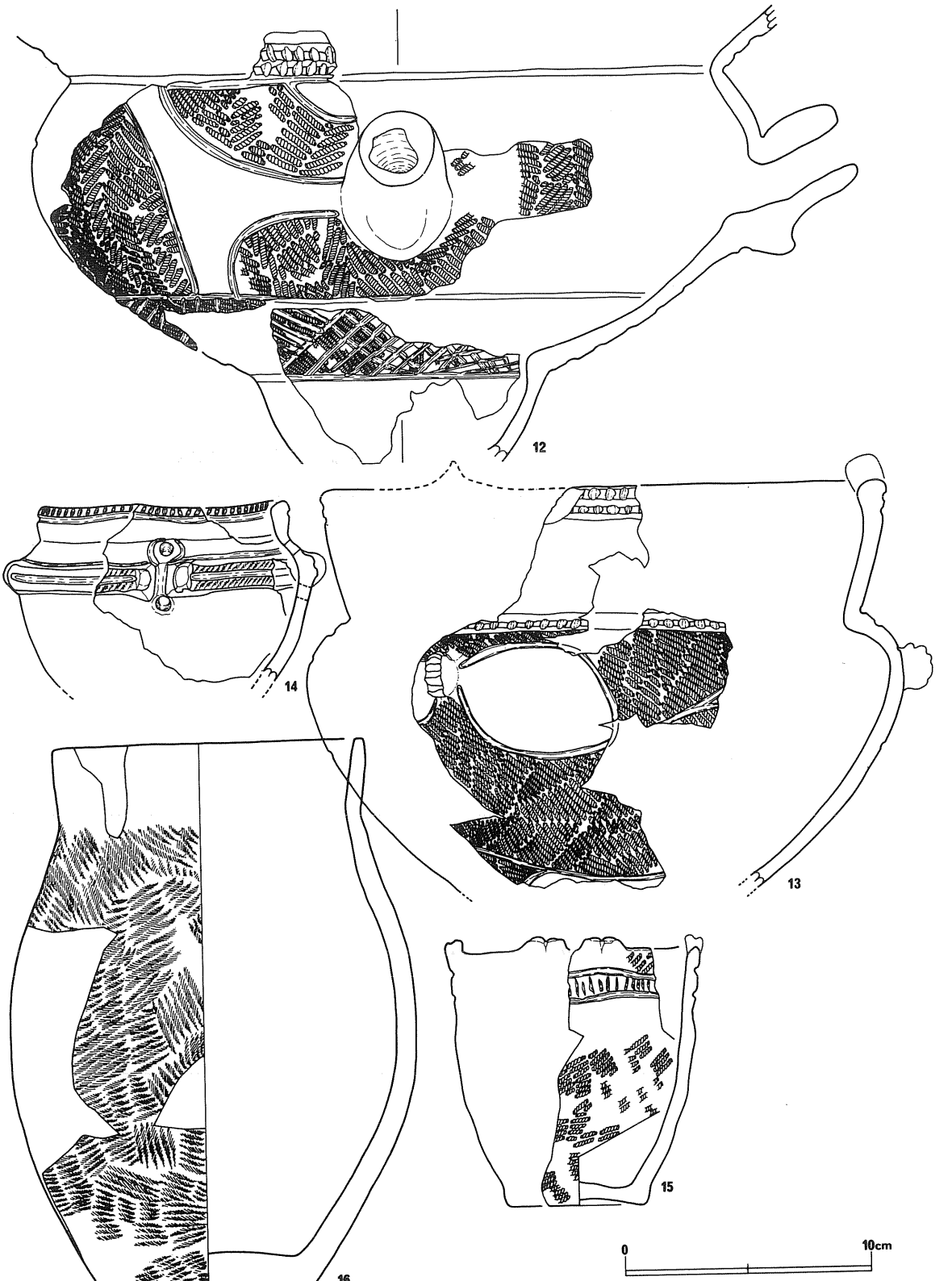
⑧　**中空土製品**(第37図)

中空土製品の一部破片が、６片に分かれ出土している。これらの破片の出土地点は、MM51グリッド杭やや南側を中心とする径３ｍ前後の範囲と考えられるが、レベルはまちまちで、一括で捨てられたとか、完形品が後で攪乱にあったという感はない。

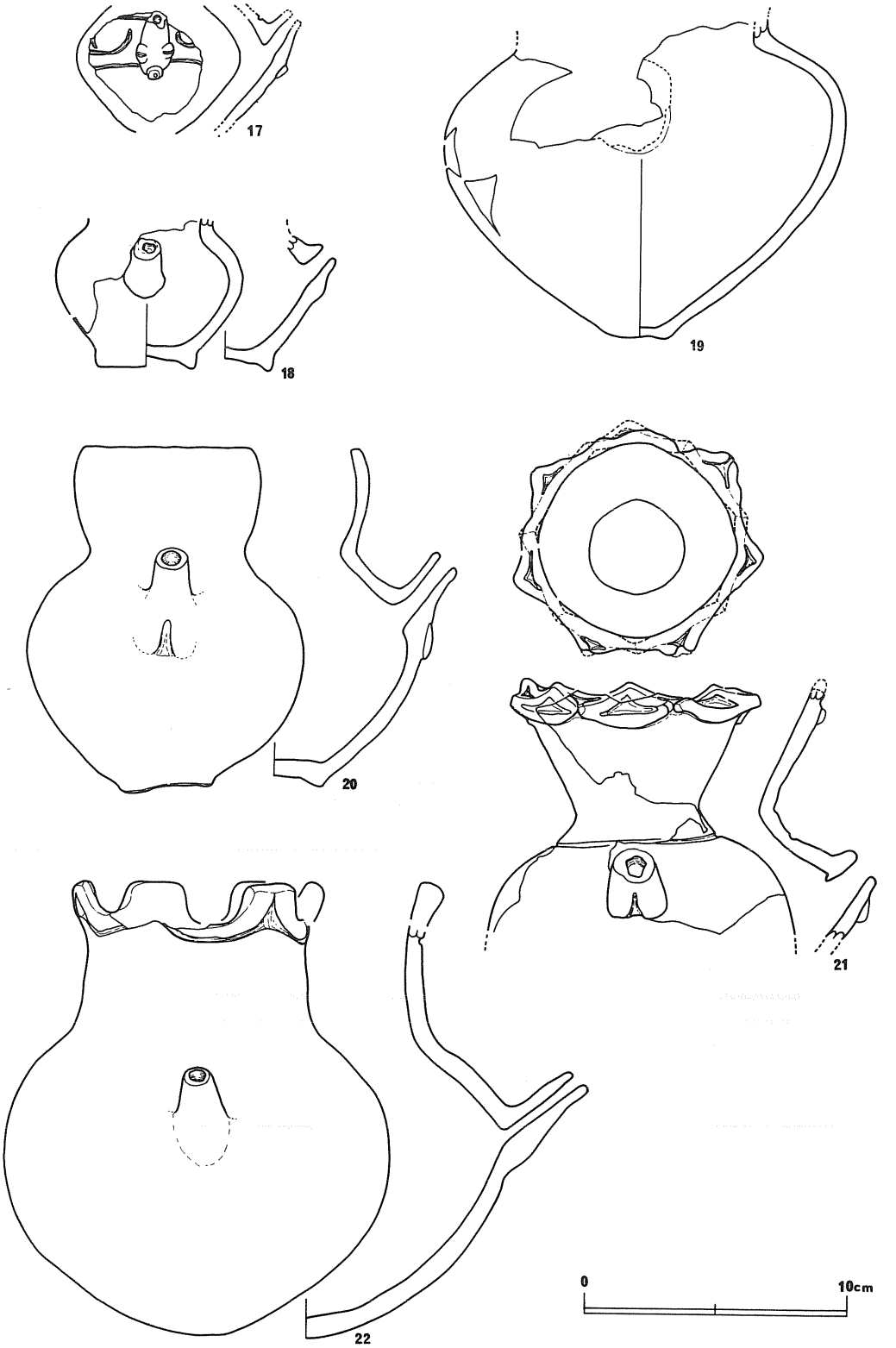
本土製品は、少ない破片を図上で復原したものである。平面形は、上部側の幅がやや膨らむ長楕円形を呈する。いずれも推定で、高さ30mm、長さ182mm、幅71mmである。文様構成から152aを表面、152bを裏面と判断した。中央部横断面形は、片側の膨らみが大きいレンズ状を呈し、表面側の膨らみが大きく、裏面はゆるいカーブを描く。この土製品の製作に当たっては、破片の割れ口から、表面側と裏面側の縁辺部分８～10mm幅が平らにされ、重ね合わされたものであることがわかる。表面の文様構成は、横位・略横位に走る沈線によって横に３分割され（Ａ１・Ａ２・Ａ３）、長軸線を中心にした左右対称の文様が描かれている。Ａ１は三叉状の沈刻を中心に両側に入組風の渦文、Ａ２は不明である。Ａ３は、中軸線に沿う２本の沈線、その両側に入組風あるいは山形状の曲沈線が描かれている。中軸線の下方から上方に向かうにつれて広がる２本の沈線間には、細かい刺突列が充填されているが、沈線間が広がるにつれ、１・３・５と刺突列数を増やしている。また、２本の沈線の下端には、長径14～16mm、短径８～10mmの孔が１個穿たれている。この孔は表面側から中方向に穿たれたと考えられるが、表面孔上側は粘土貼付によって７～９mmの土堤状の高まりとなっている。裏面は、沈線及び三叉文、中心に刺突のある円形文などが描かれているが、破片が少なく、全体の構成は不明である。なお、両側辺は曲面をなしているが、表面側の沈線だけが側辺にまで達しており、裏面側の沈線は側縁手前で終っている。表裏面ともてねいなヘラミガキが施され、朱塗りである。胎土・焼成ともに良好である。縄文時代晩期前葉の中空土製品と考えられる。

（２）　**石器・石製品**(第38図)

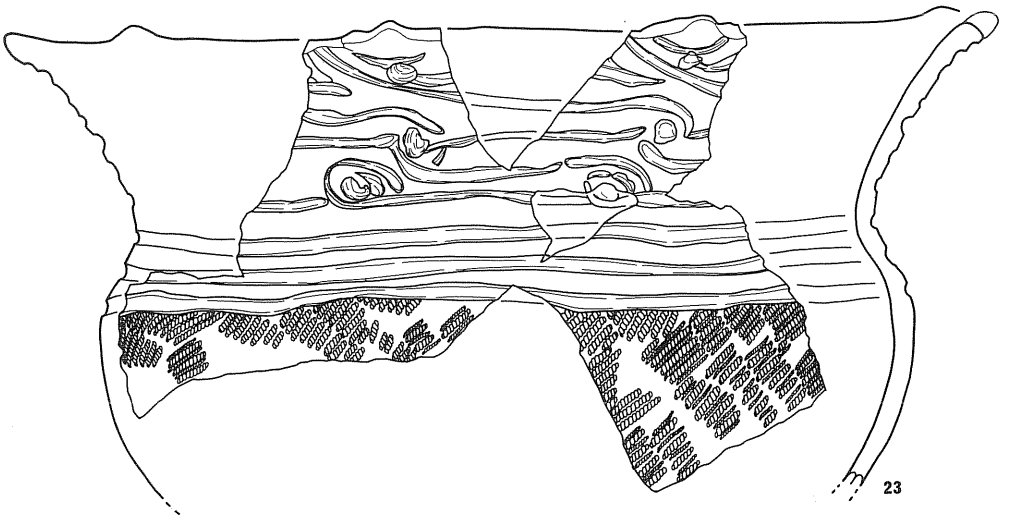
Ａ地区から出土した石器・石製品は剝片を加えても、土器の量に比較して少ない。図示し得た石器16点、石製品３点の計19点にすぎない。剝片石器としては石鏃４点、石匙２点、削器類

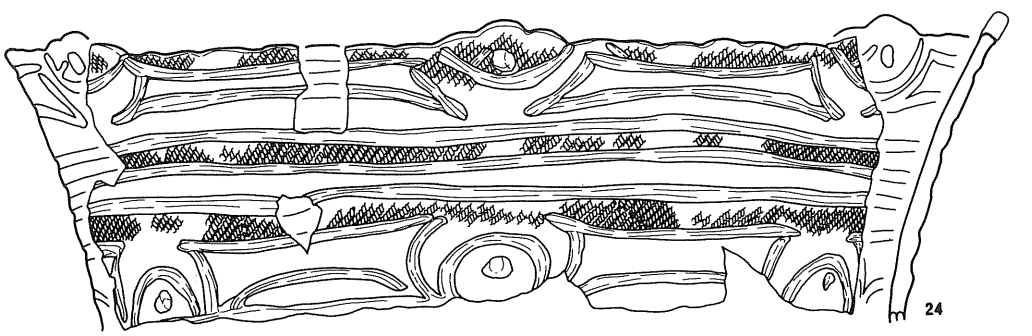


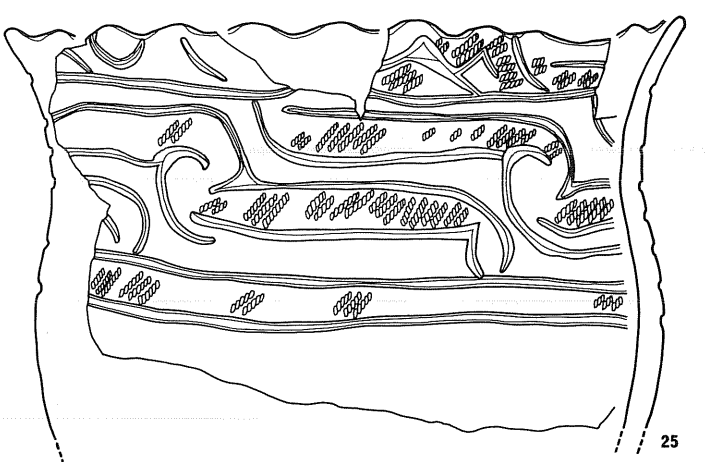

第20図　A地区遺構外出土土器(1)
縄文後期中葉～後葉（注口・鉢形土器）

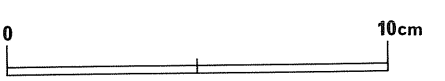



第21図　Ａ地区遺構外出土土器(2)
縄文後期末葉（注口土器）

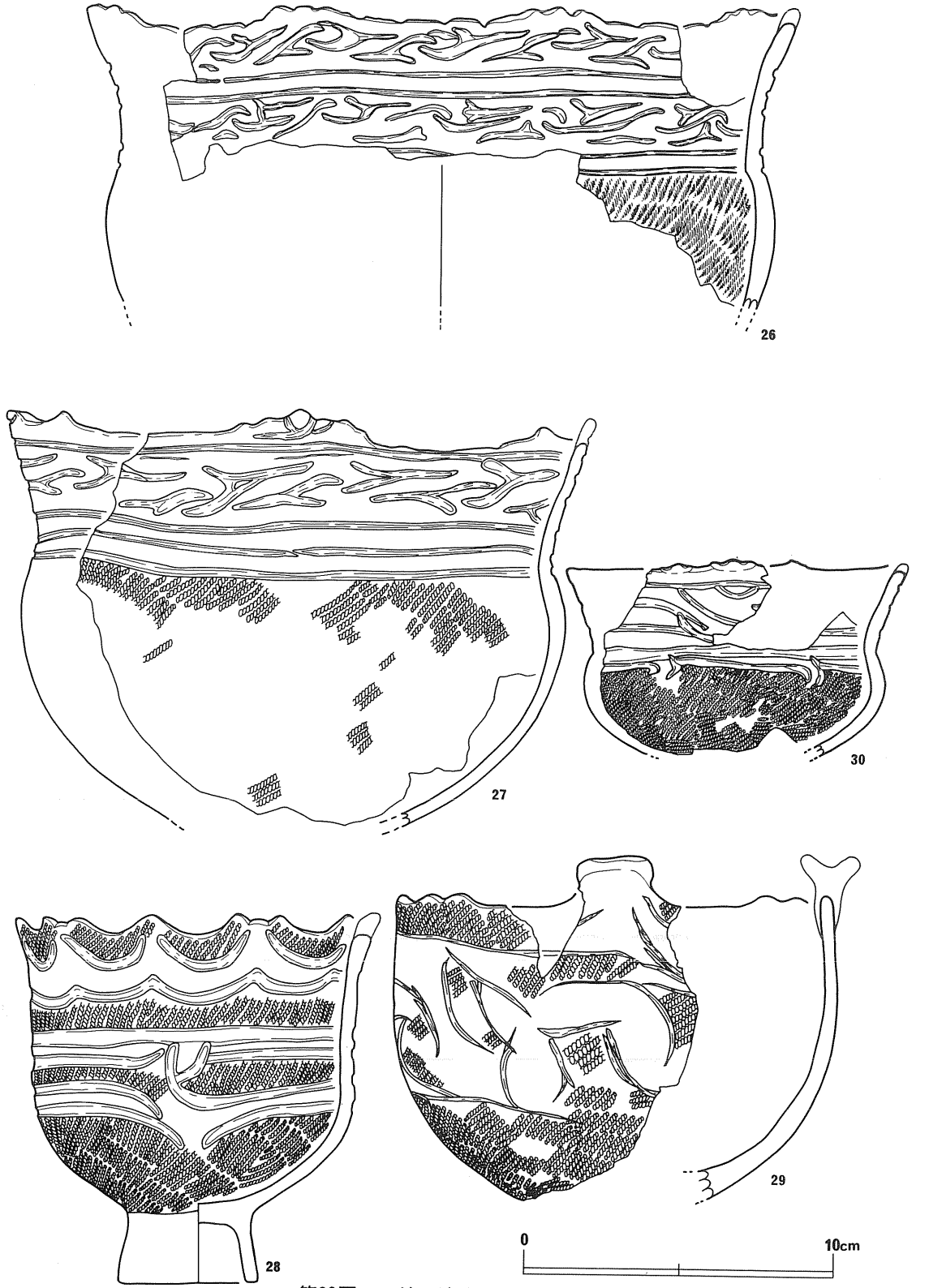


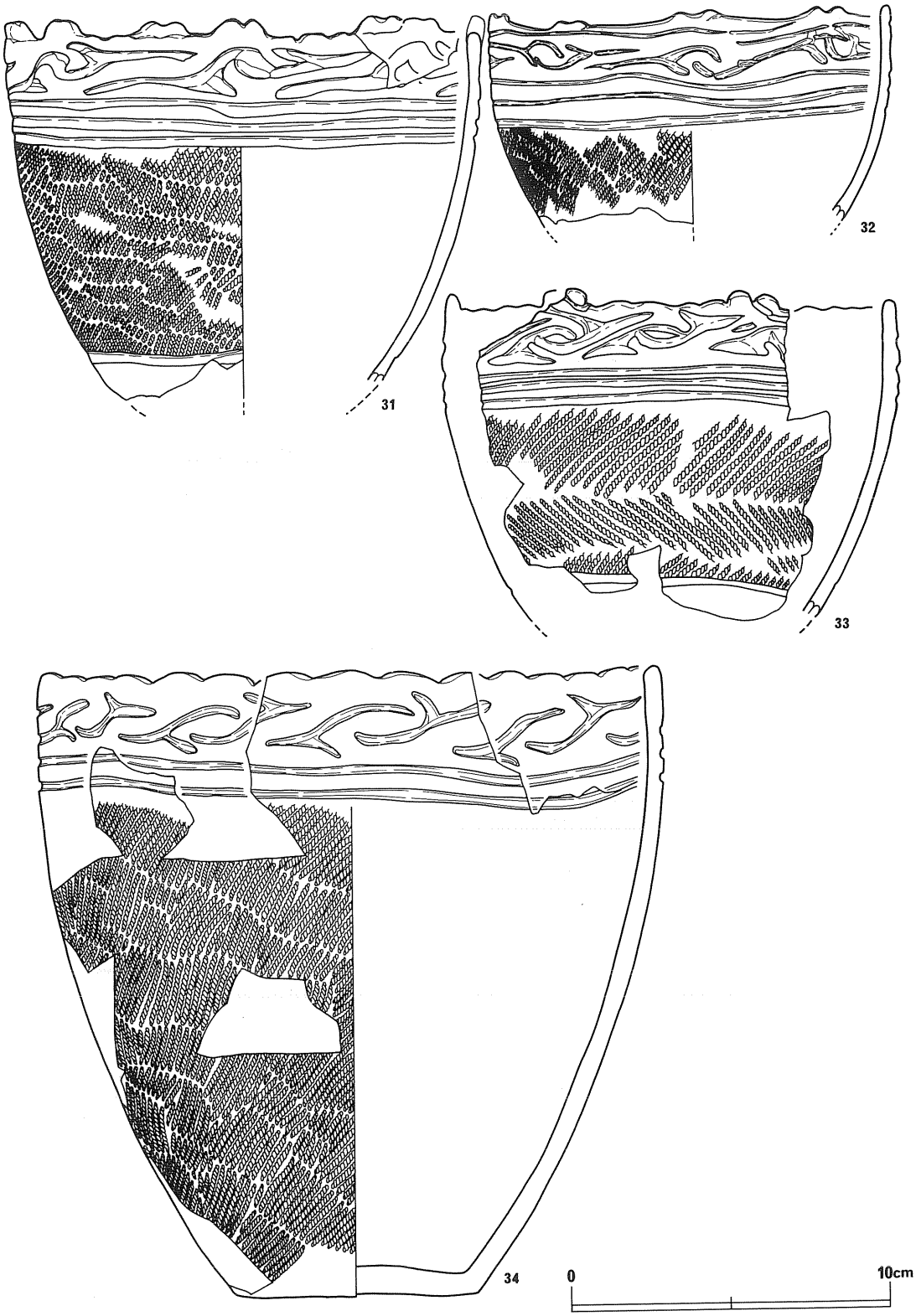



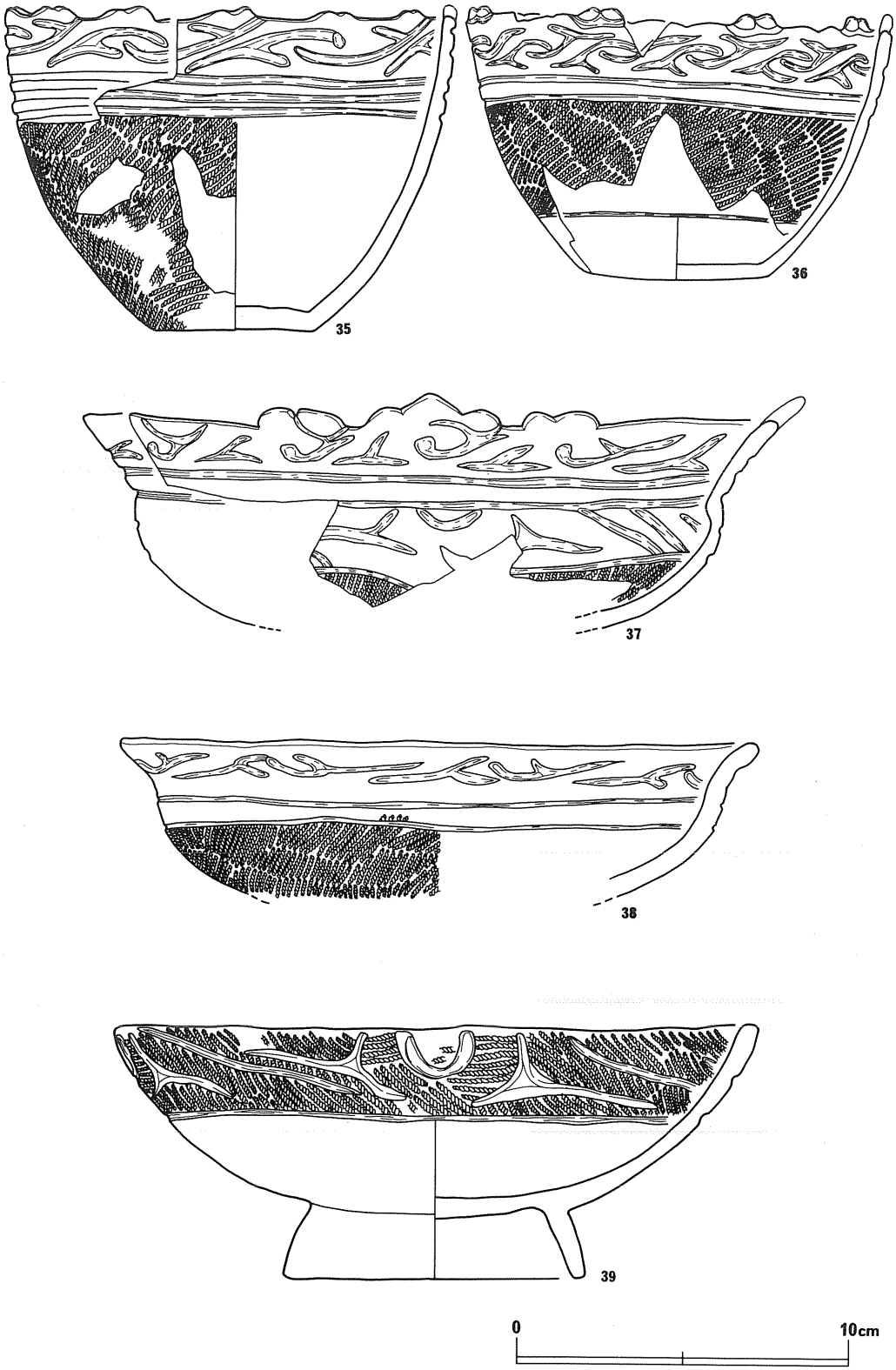

第22図　Ａ地区遺構外出土土器(3)
縄文晩期前葉第１期の土器(1)



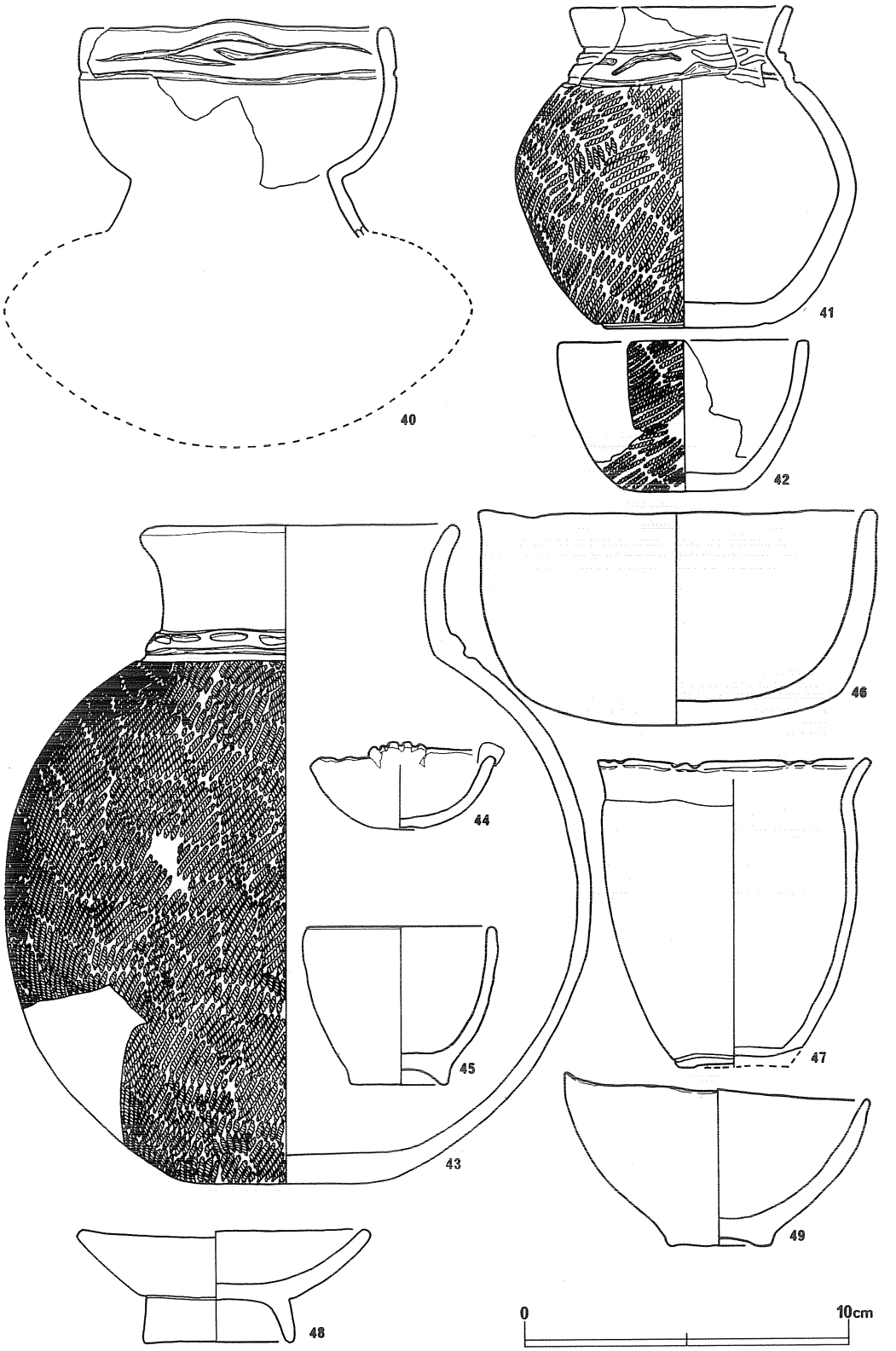

第23図　Ａ地区遺構外出土土器(4)
縄文晩期前葉第１期の土器(2)



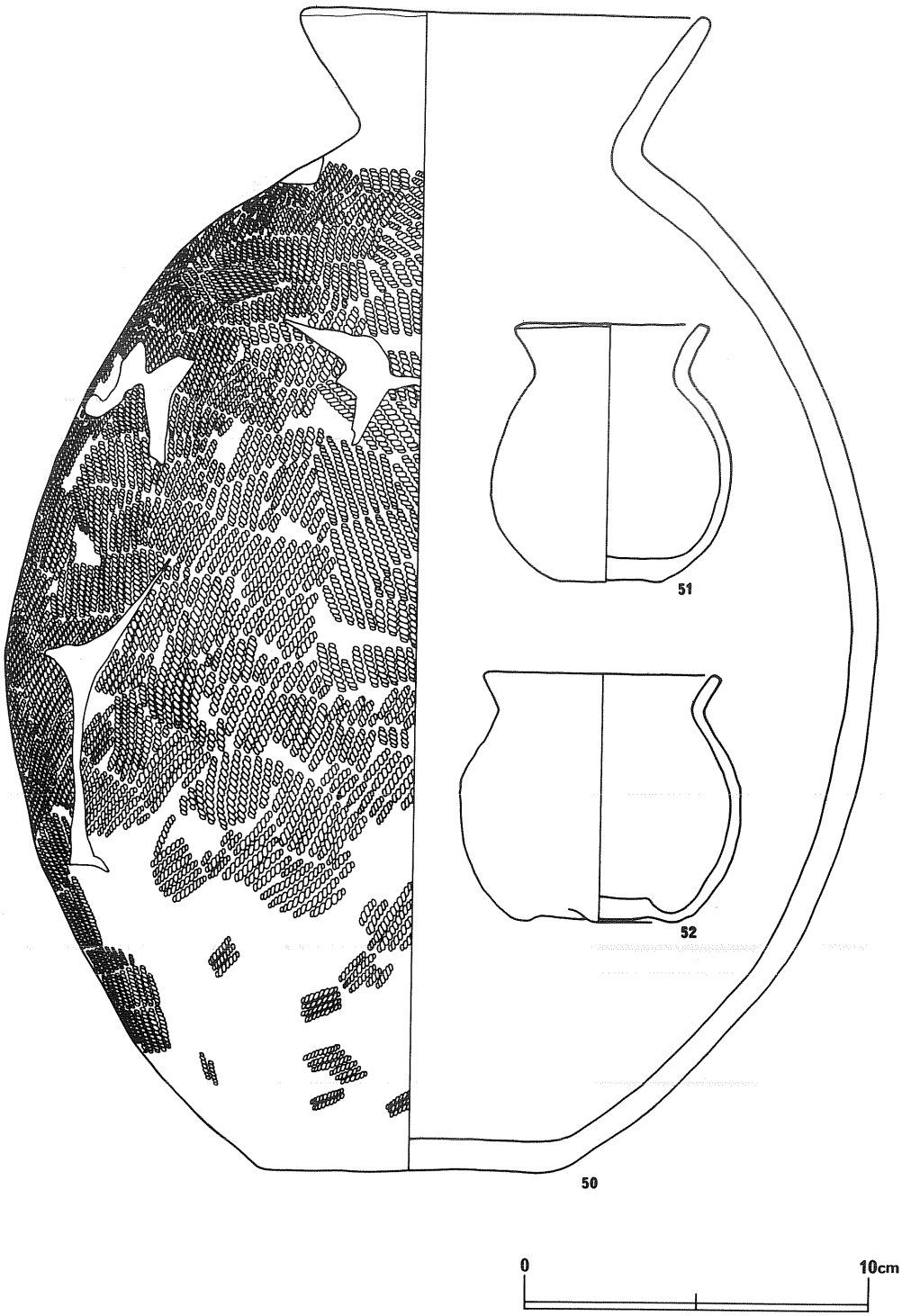

第24図　A地区遺構外出土土器(5)
縄文晩期前葉第1期の土器(3)



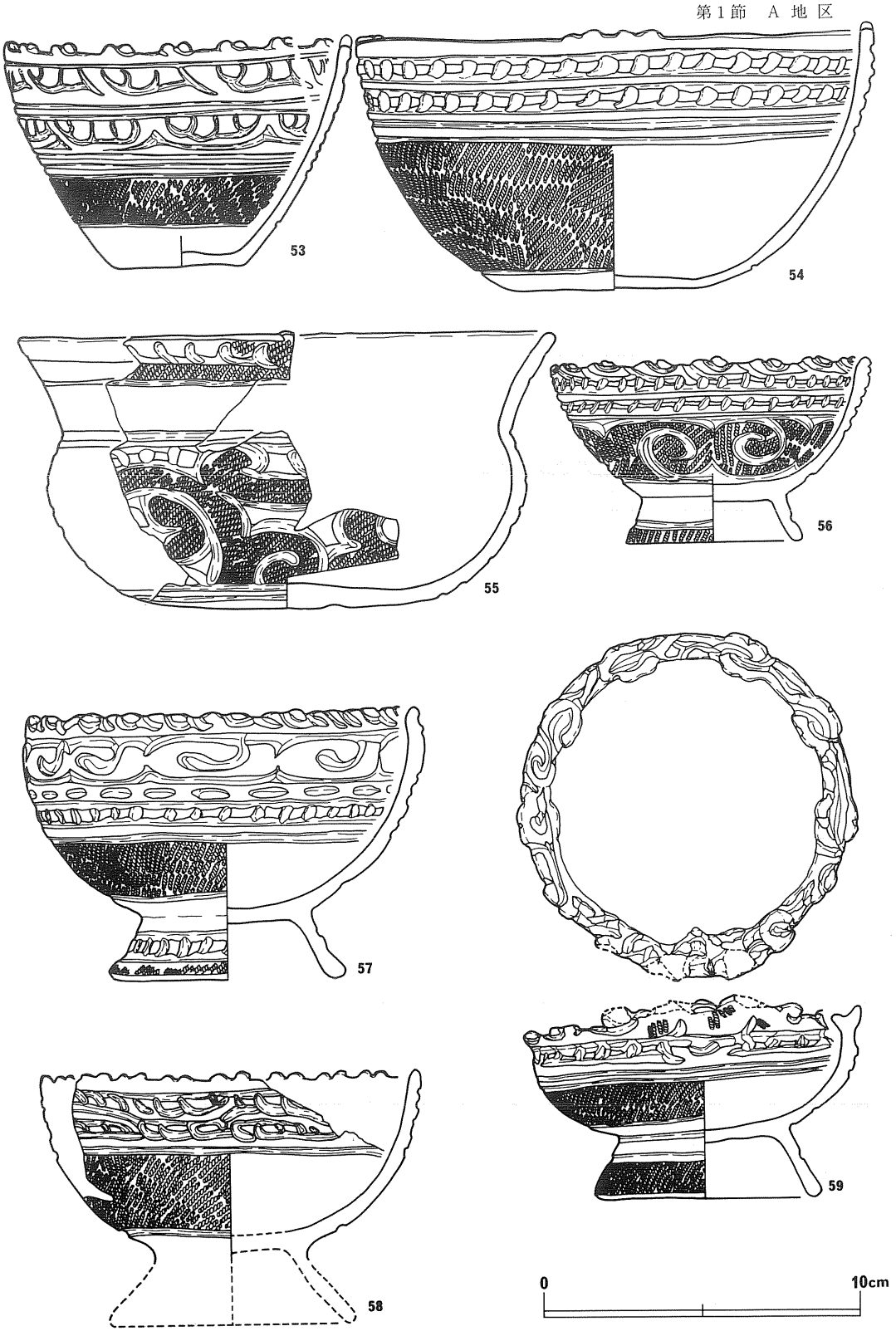

第25図　Ａ地区遺構外出土土器(6)
縄文晩期前葉第１期の土器(4)



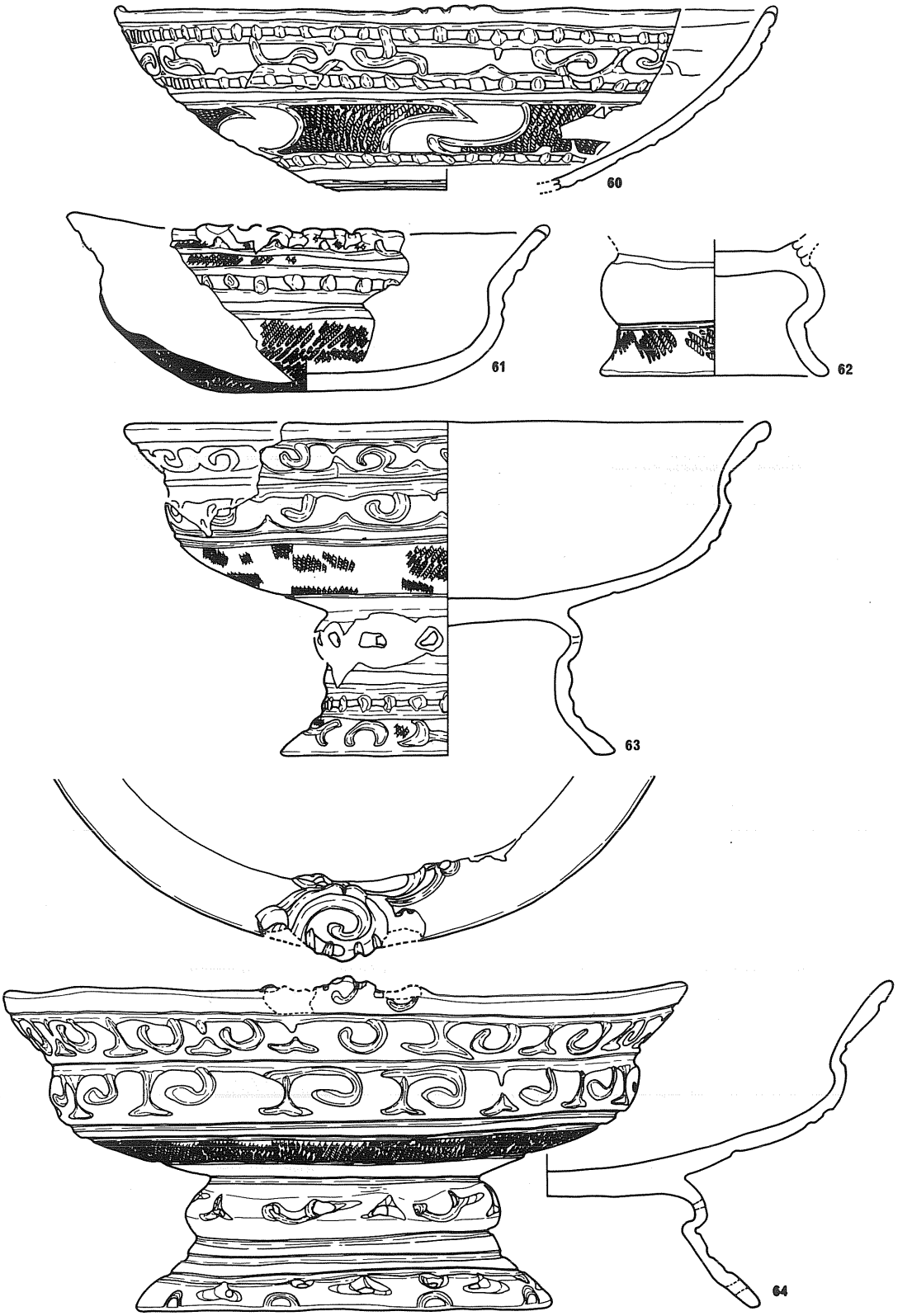

第26図　A地区遺構外出土土器(7)
縄文晩期前葉第1期の土器(5)



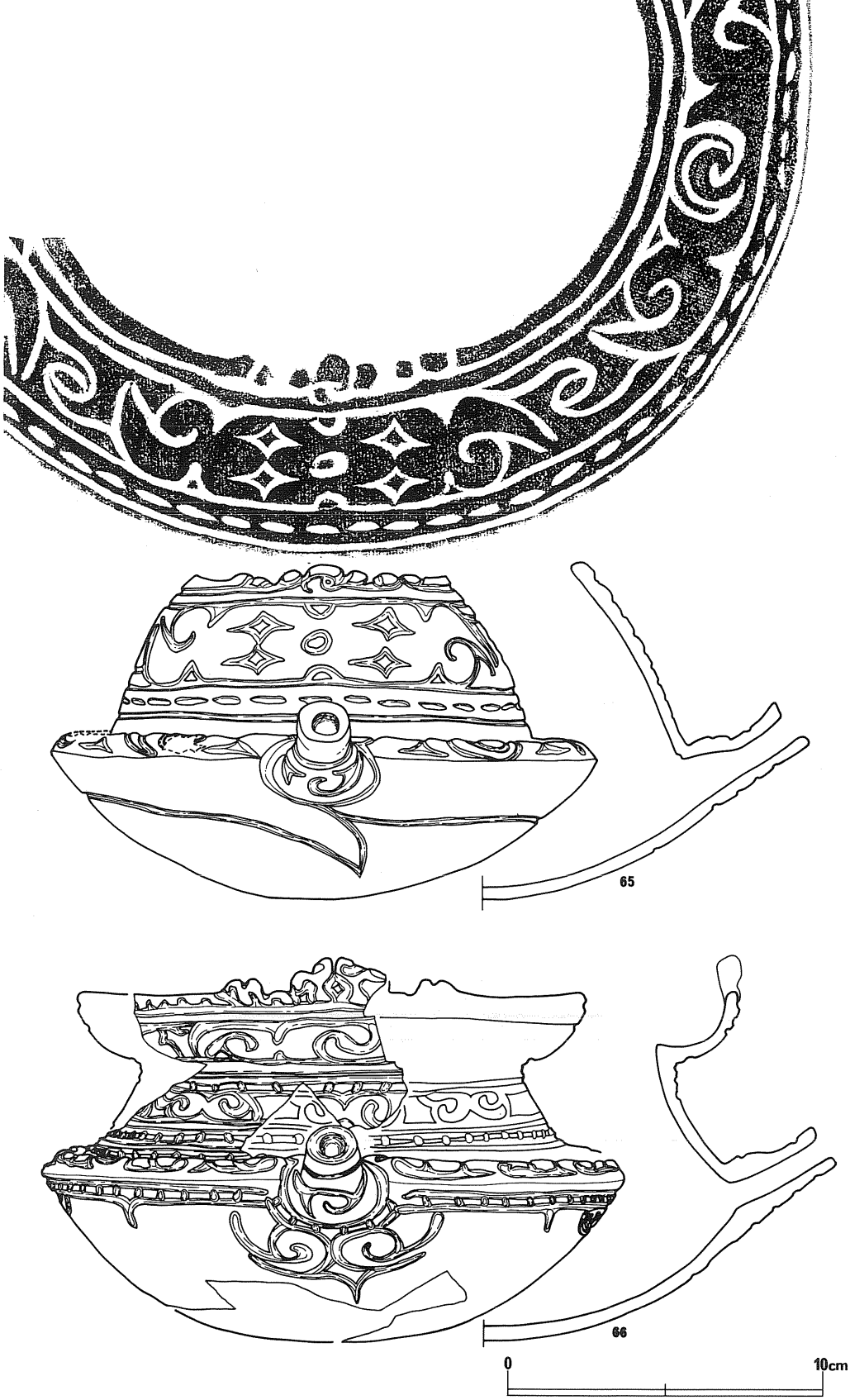

第27図　Ａ地区遺構外出土土器(8)
縄文晩期前葉第１期の土器(6)



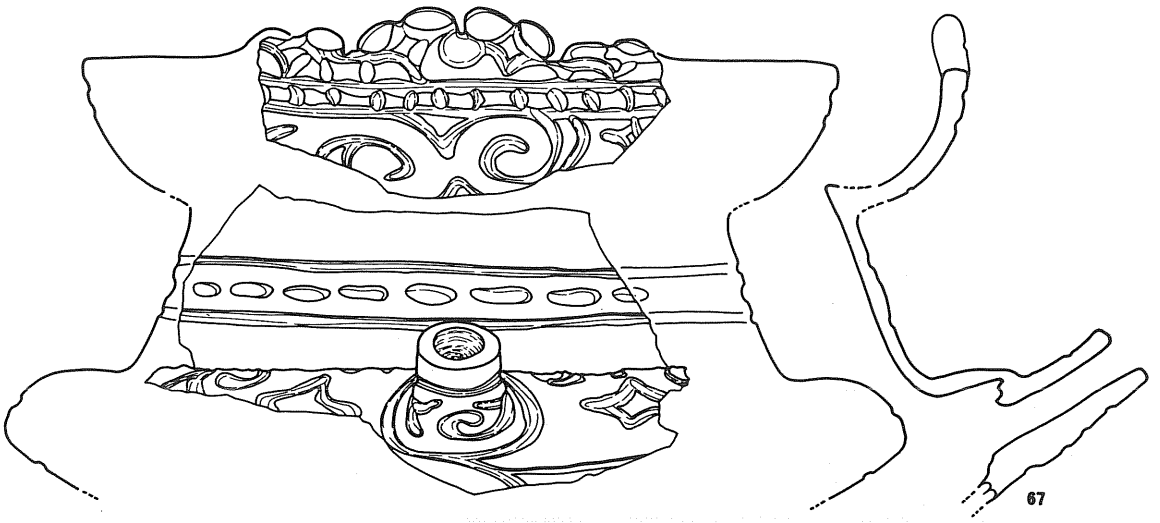

第28図　A地区遺構外出土土器(9)
縄文晩期前葉第2期の土器(1)

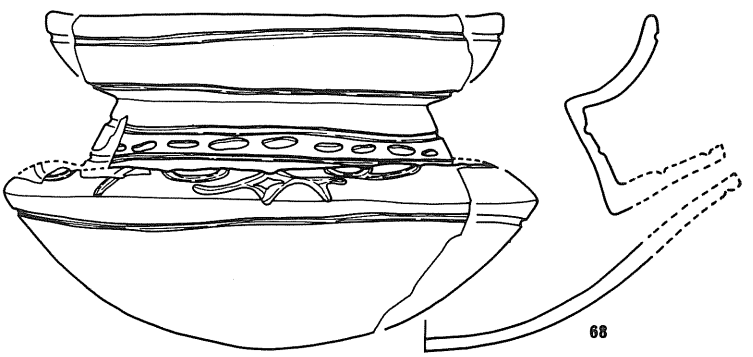


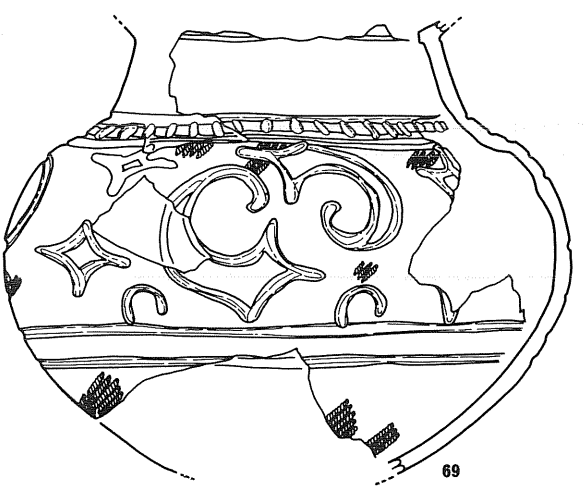

第29図　A地区遺構外出土土器(10)
縄文晩期前葉第2期の土器(2)

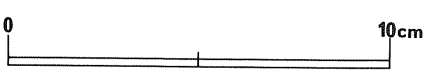



第30図　A地区遺構外出土土器(11)
縄文晩期前葉第2期の土器(3)

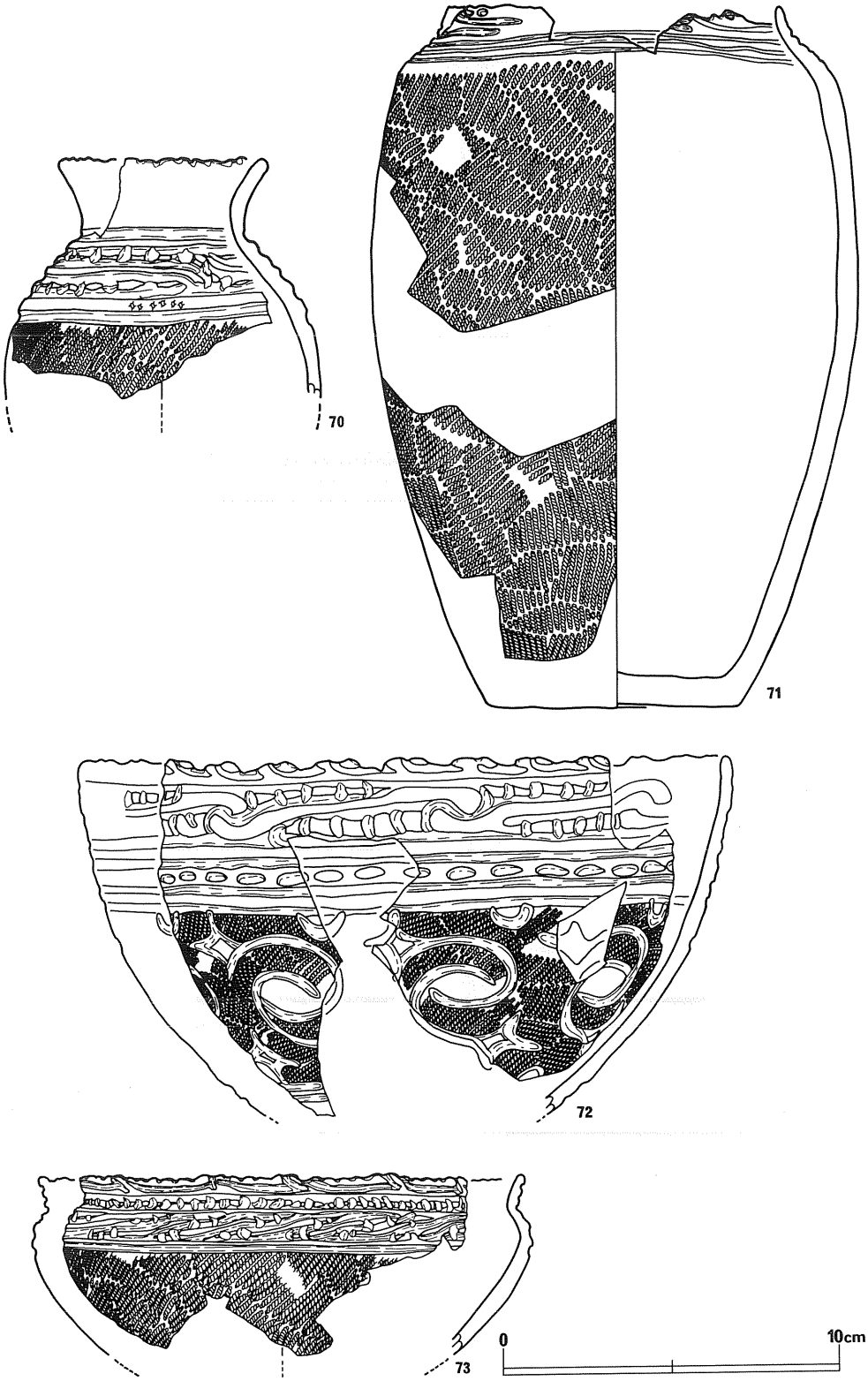


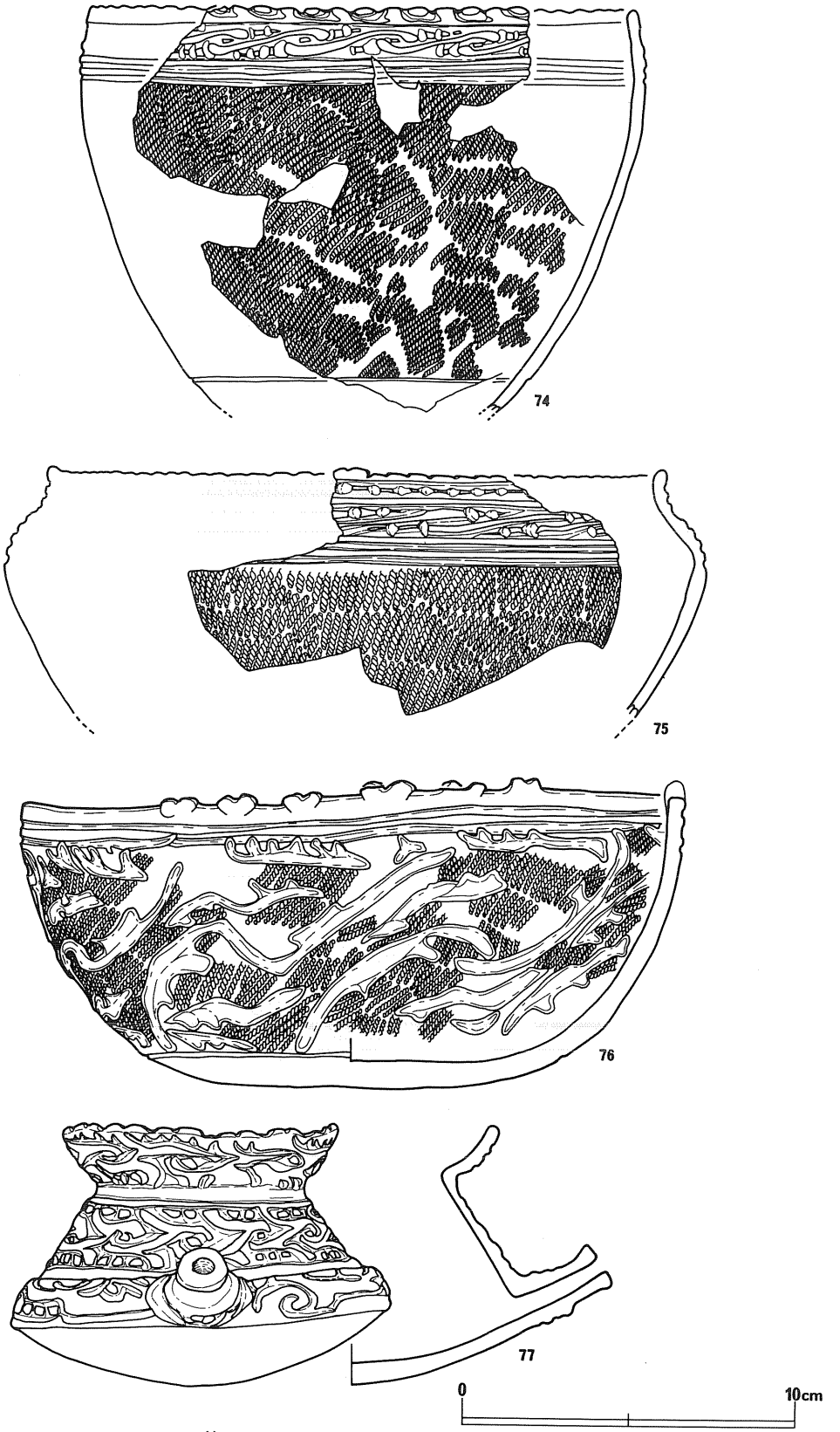



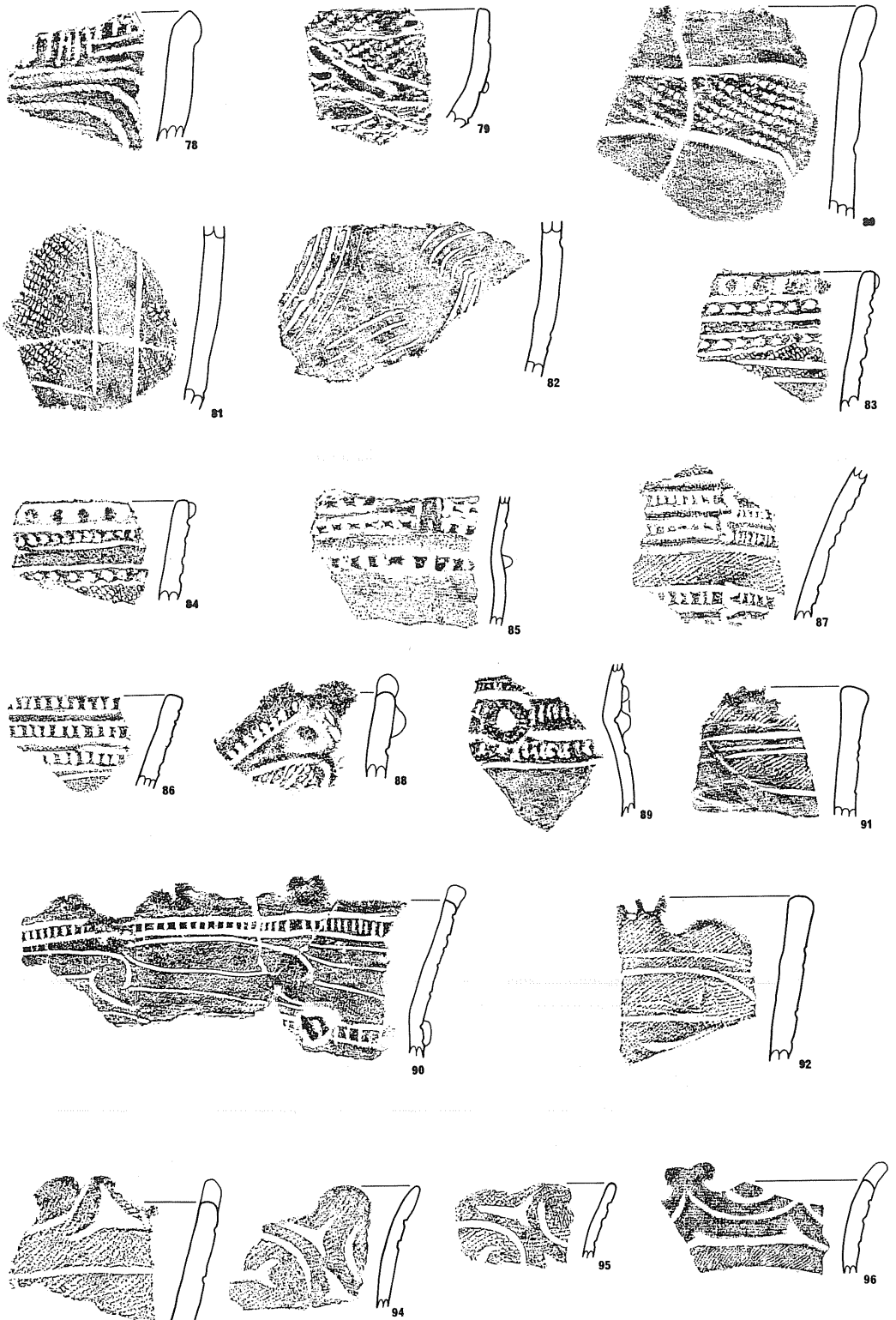

第31図　Ａ地区遺構外出土土器(12)
縄文晩期前葉第２期の土器(4)




第32図　A地区遺構外出土土器(13)
縄文晩期前葉第3期の土器(1)

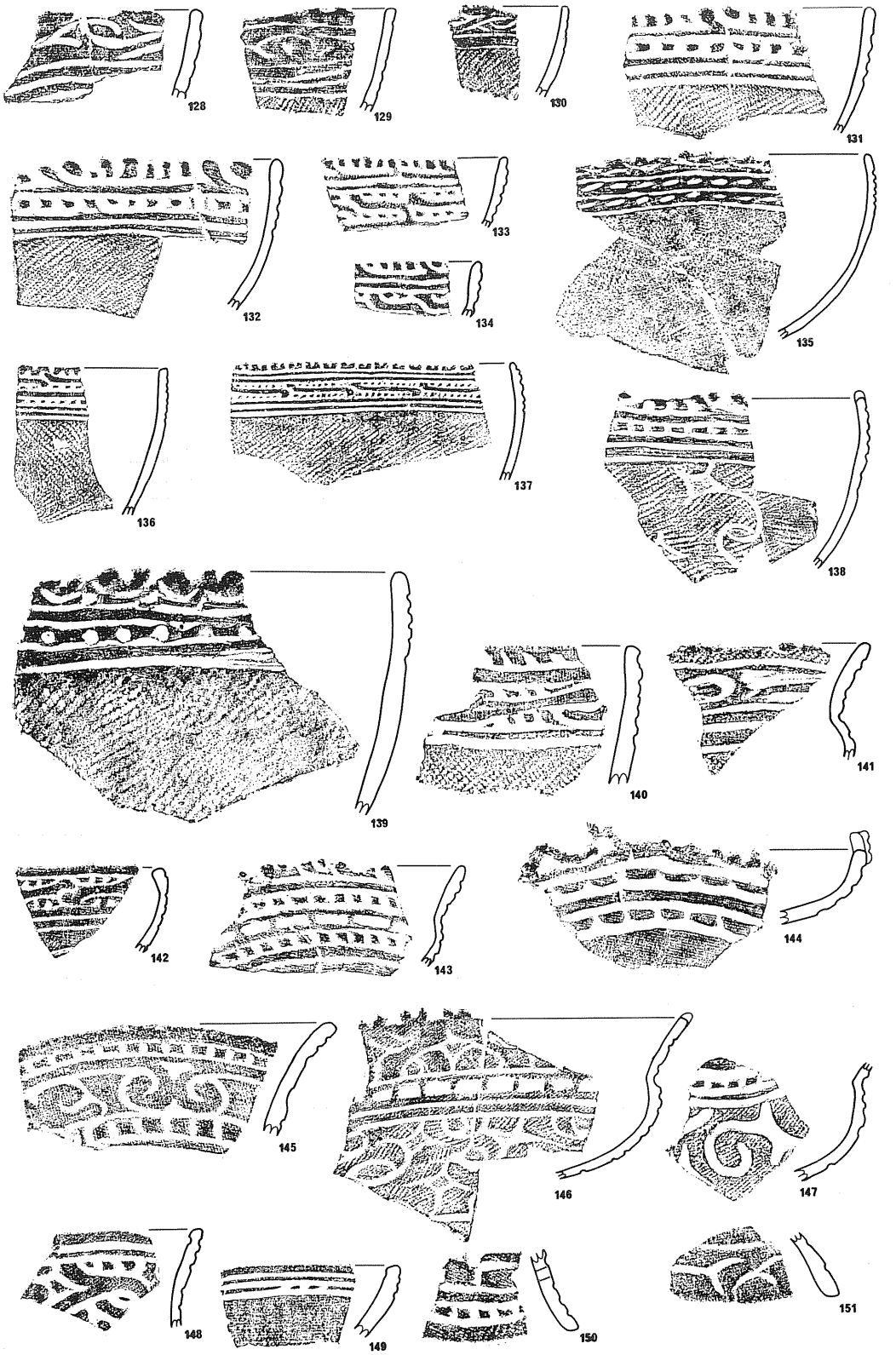



第33図　A地区遺構外出土土器(14)
縄文晩期前葉第3期の土器(2)

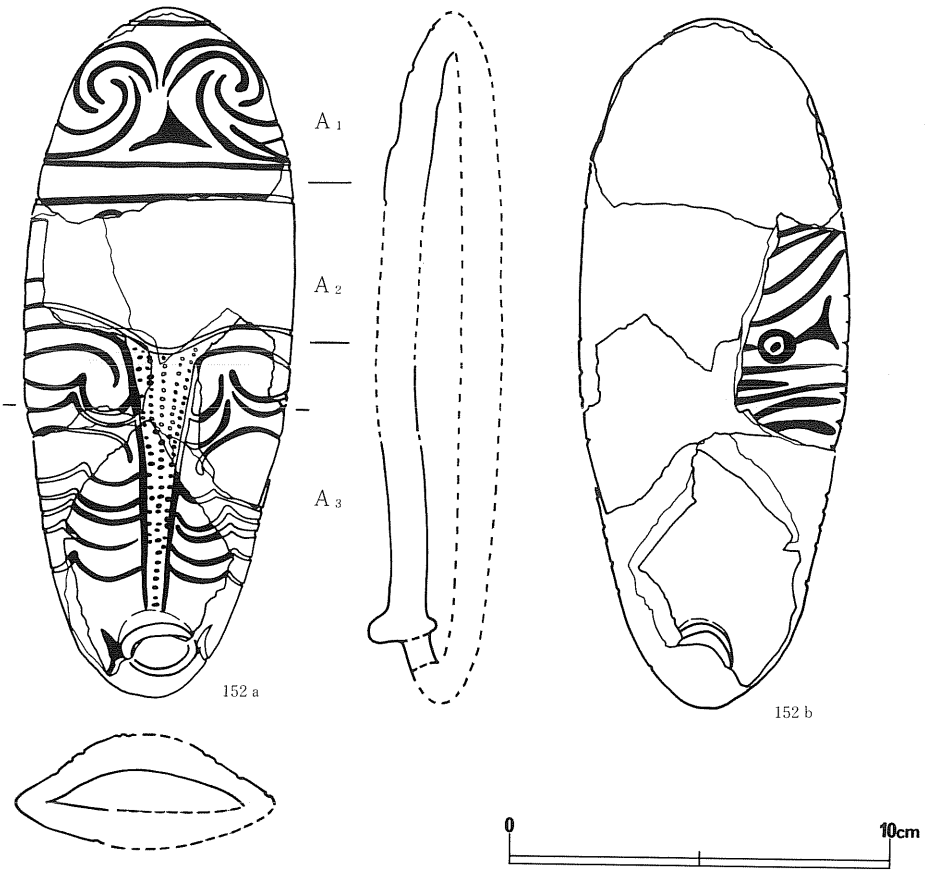



第34図　A地区遺構外出土土器(15)
縄文中・後期土器拓影

第35図　Ａ地区遺構外出土土器(16)
縄文晩期前葉土器拓影(1)




第36図　A地区遺構外出土土器(17)
縄文晩期前葉土器拓影(2)



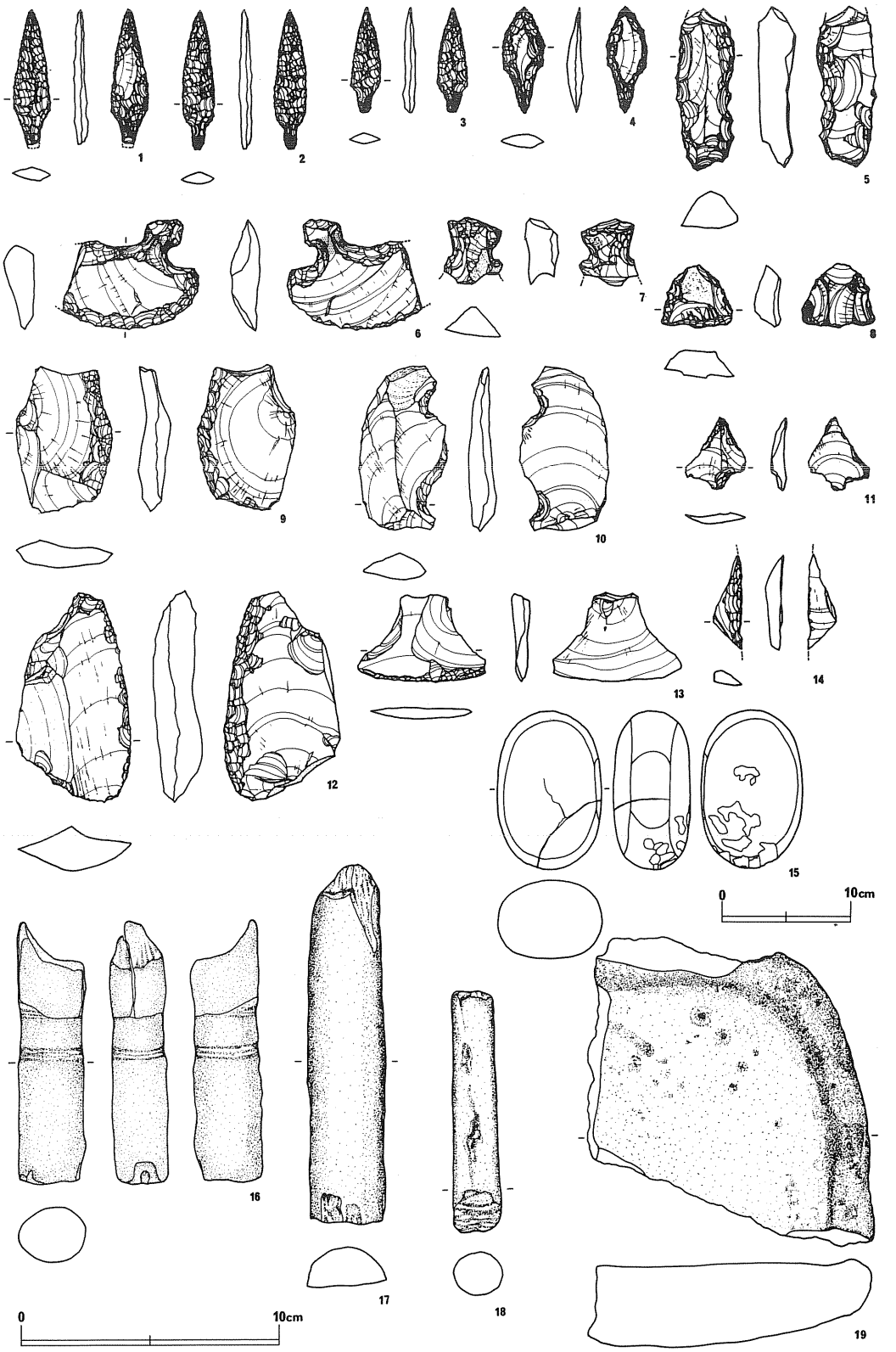

**第37図　Ａ地区遺構外出土土製品・中空土製品**

８点で、礫石器は磨石１点、石皿１点である。

石鏃（１～４）は、いずれも茎を有するもので１を除いて完形品である（１も調査中に基端を欠損したのかもしれない）。基部には４を除いてアスファルトの付着が見られる。石匙６はつまみ部にアスファルトの付着があり、７はつまみ部の破片である。５・８～14は大小の剝片の１～２側辺に細かな剝離を加えた削器類である。11は石鏃の未成品かもしれない。15は花崗岩の円礫の全面を磨いた磨石である。19は凝灰岩製の石皿の破片で、使用面はよく擦られている。

４点出土している石鏃は、全体の形状が美しく、整形も丁寧である。出土地点などをおさえていないが、土壙墓や配石墓などに副葬されたものであったかもしれない。

16～18は磨製の石棒の破片である。16にはくびれ部がある。




第38図　A地区遺構外出土石器・石製品

# 第２節　Ｂ地区

## １．検出遺構と遺物

Ｂ地区は、標高約175mの関上段丘面の南東端部及びその斜面が調査対象区である。このため多くの遺構・遺物の存在を予想することはできなかったが、縄文・平安時代を中心に計34基の遺構の検出を見、縄文時代前期～中世末までの遺物が出土した。検出された遺構の内訳は以下のとおりである。

縄文時代　：　竪穴住居跡２軒・土壙墓２基・土器棺墓４基・土坑５基

平安時代　：　竪穴住居跡５軒・土坑６基

中 世 か　：　溝状遺構８条

その他時代不明　：　土坑２基

以下、上記の遺構を各時代別に説明する。

### （１）　縄文時代

縄文時代の遺構は、南北に長い調査区のほぼ全面から検出されている。

#### ①　竪穴住居跡

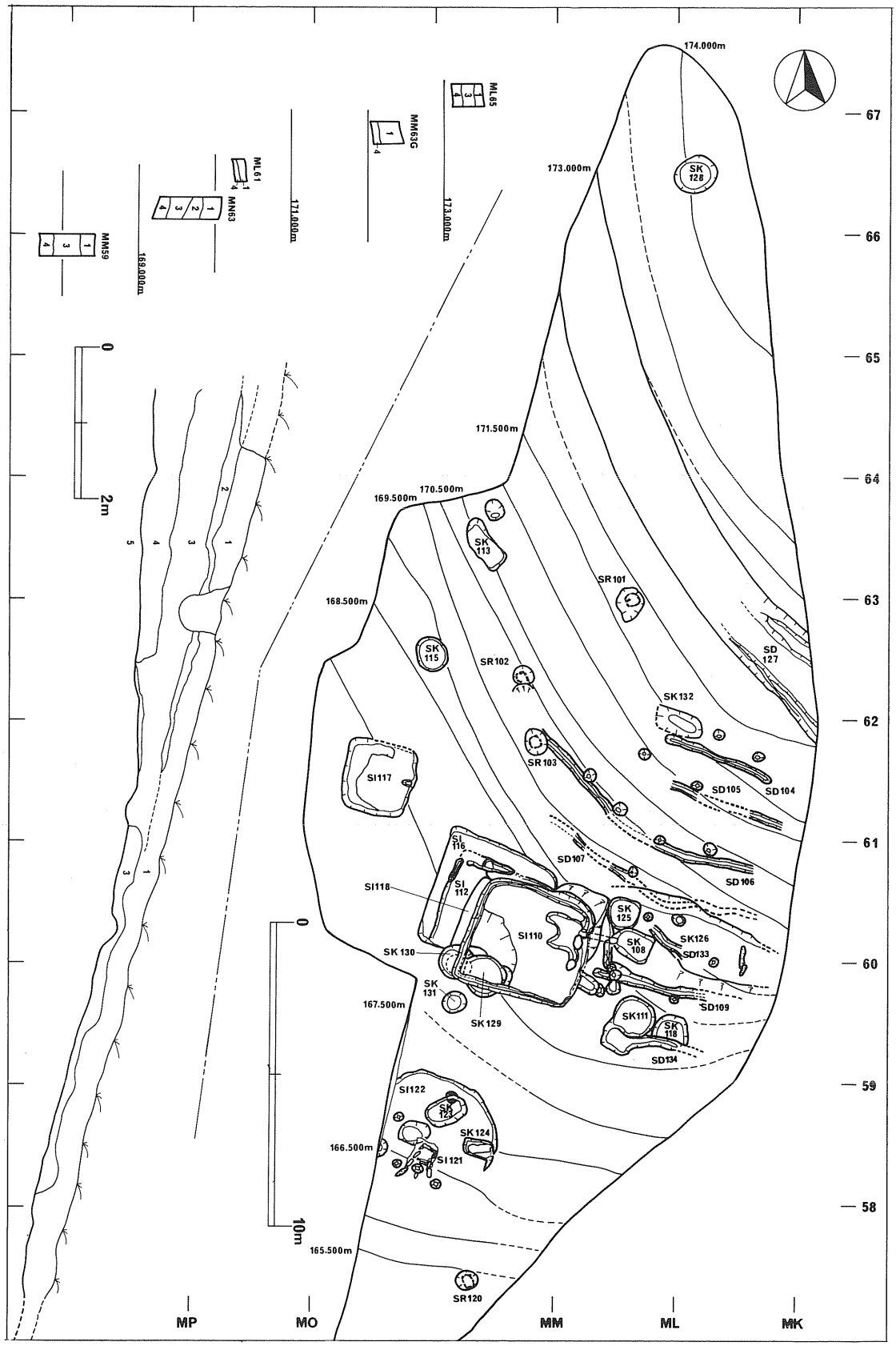
調査区の南部、段丘崖の中位緩斜面で２軒重複して検出されている。

**ＳＩ121・122　竪穴住居跡**(40図、図版14)

緩斜面に構築されているため、南側半分の壁は検出できず、推定線を引いた。掘込面は第３層中位のようである。ＳＩ122は、位置を若干東にずらして構築されたＳＩ121によって大半が切られているため、平面プラン等は一部しか確認することができなかったが、概略ＳＩ121と同様のものであったと推定される。

ＳＩ121は、平面形が直径約380cmの円形を呈する竪穴住居跡である。壁は北側で50cmほどあるが、南側は確認できない。北側では、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は、略平坦で南西部分を除いて堅くしまっている。床面の北西部分が厚さ３cm前後の貼床部分でかたいのに対して、南西部分では、貼床が顕著でなく、やや堅さに欠ける。平面形が、先端の尖らない「Ａ」字形の石囲炉が中央南側にあり、細長くて偏平な河原石の側面を上にして立てている。中央部寄りの方形に囲まれた部分の中及び、河原石の内側が良く焼けている。石囲炉の北側には、床面から５～10cmほど浮いた状態の焼土があったものの、床面は焼けておらず、埋設された土器もなかった。径25cm前後の柱穴は５個検出されたが、配置・深さなどからして$P_1$・$P_2$・$P_4$の３本が主柱穴と考えられる。石囲炉の北西側にある掘り込みは、ＳＩ121の前にあった掘り込みで詳細は不明である。

床面及び石囲炉中からは遺物が出土せず、埋土中から48図157～160の土器片が出土した。




第39図　B地区遺構・グリット配置図，土層断面図

159・160は163と同一の個体で後期末葉の壺形土器体部上半～頸部破片であるが、161はＳＩ122の埋土中から出土したものである。159・160の出土した部分は、ＳＫ123の埋土であった可能性がある。従って、本住居跡の正確な時期は不明であるが、住居跡や石囲炉の形態などから、中期末葉に属するものと考えられる。

② 土壙墓

ＳＩ121竪穴住居跡の埋土及び床面を掘り込んで２基の土壙墓が構築されているが、確認面はＳＩ121床面である。これら２基の土壙墓からは、副葬品が出土せず、明確な時期は不明であるが、ＳＫ123の埋土中から第48図162・163の土器片が出土している。あるいは、これが土壙墓の時期を示すものかもしれない。

ＳＫ123　土壙墓(第40図、図版15)

ＳＩ121竪穴住居跡中央北側の埋土と床面を掘り込んで構築された土壙墓である。確認面での平面形は、長径130cm、短径70cmの小判形を呈する。ＳＩ121床面からの深さは約10cmと浅いが、土層断面図で見ると、50cm前後の深さを有していたと考えられる。副葬遺物は出土しなかったが、壙底南西側でベンガラの散布が見られた。長軸方向はＮ61°Ｅである。162は、前期前葉の深鉢形土器体部下半の破片で、胎土に繊維を含む。器表面に条痕文と思われる施文があるが明確ではない。163は、159・160と同一個体の破片で、後期末葉の壺形土器体部破片である。

ＳＫ124　土壙墓(第40図、図版15)

ＳＩ121竪穴住居跡中央東側の埋土及び床面を掘り込んで構築された土壙墓である。確認面での平面形は、長径90cm、短径50cmの長方形を呈する。住居跡の床面は５cm程度しか掘り込んでいないが、土層断面の観察では、30cm以上の深さがあったものである。床面は平坦でしまりがある。副葬遺物は出土しなかったが、床面全面にベンガラの散布が認められた。長軸方向はＮ73°Ｗである。

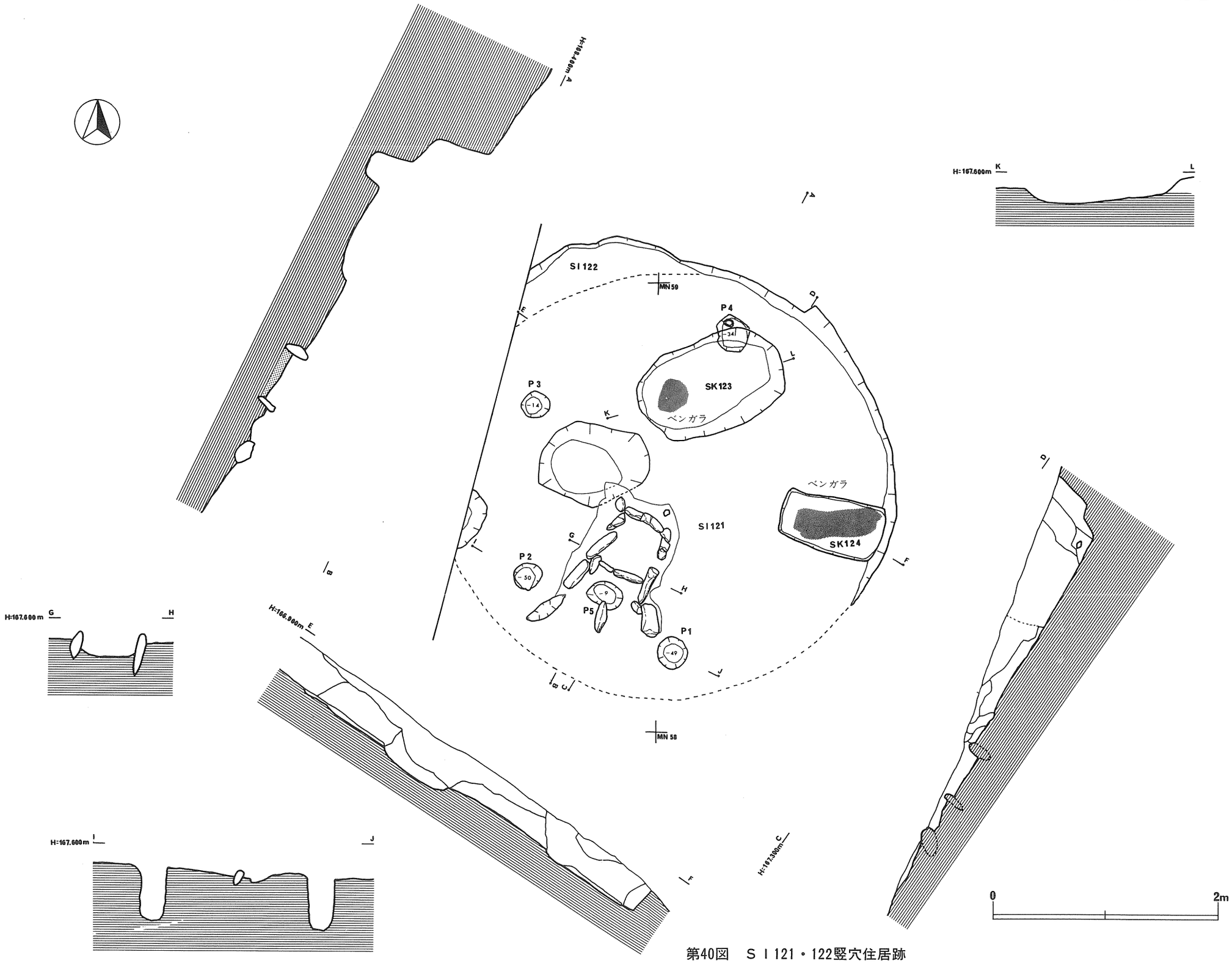
③ 土坑

縄文時代に属するであろうと考えられる土坑が、５基検出されている。２基はフラスコ状土坑、他は円形の土坑である。

ＳＫ129・130　フラスコ状土坑(第41図、図版15)

平安時代の竪穴住居跡ＳＩ110床面の南西隅部は、厚さ約35cmほどの貼床がされていた。この貼床部を除去したところ、２基の土坑が現れ、精査の結果、重複のあるフラスコ状土坑であることがわかった。断面図に示されている通り、浅いＳＫ129が、深いＳＫ130の埋土の一部を掘り込んで構築されている。

ＳＫ129の平面形は、確認時で径115～130cm、坑底面で径130～140cmの略円形を呈し、約30




第40図　ＳＩ121・122竪穴住居跡
ＳＫ123・124土壙墓

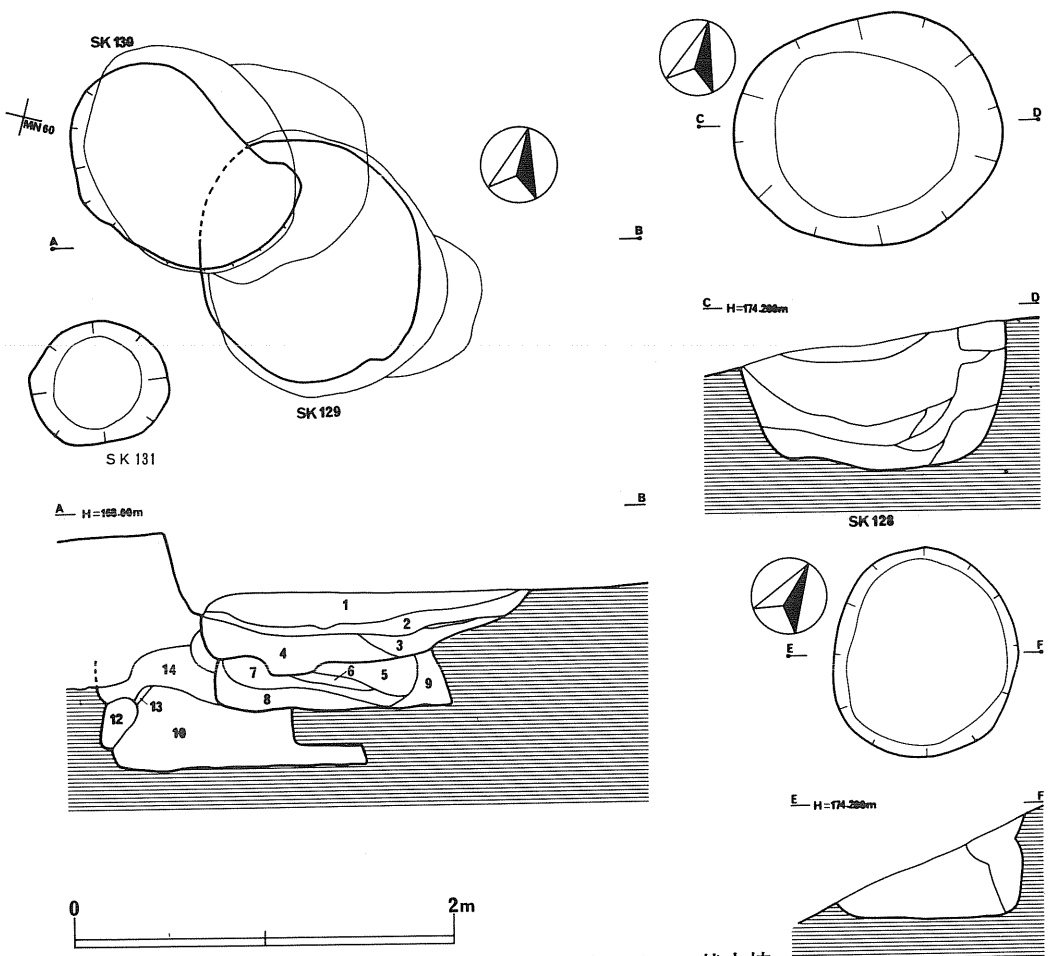
cmの深さでしか残存していなかった。坑底面東端で東側に張り出しを持つ。この張り出しは、幅約75cm、高さ13～5cmで、奥行きは15cmほどある。埋土中から48図165が出土している。前期前葉の土器である。

S K130の平面形は、確認レベルで長径120cm、短径85cmの略楕円形を呈し、坑底面では長径130cm、短径100cmである。深さは、75cm以上あったものと思われる。やはり坑底面東側に、幅約100cm、高さ10cm、奥行き約40cmの張り出し部を持つ。埋土中から48図164が出土している。前期前葉の撚糸文が施された土器である。

両土坑の坑底面から時期を決定づける遺物は出土しなかった。S K131を含めすぐ南側には、中期末葉と考えられる竪穴住居跡S I 121・122が存在し、埋土中から出土している前期前葉の土器をもって、これらの土坑の時期とすることはできない。

S K128　土坑(第41図、図版15)

関上段丘面から検出された唯一の遺構である。平面形は、確認面で120～140cm、坑底面で85




第41図　S K129・130フラスコ状土坑
S K115・123・131土坑

～95cmの略円形を呈する。深さは、約70cmである。埋土中及び坑底面から遺物は出土していないが、周辺から第51図190など前期前葉と考えられる土器が出土しているので、ほぼこの時期のものかと推定される。

ＳＫ115　土坑(第41図、図版)

ＳＲ102土器棺墓西方斜面で検出された土坑である。平面形は径100～110cmの略円形で、斜面にほぼ垂直に掘られている。埋土中などから遺物は出土していないが、形状や埋土・周囲の状況などから縄文時代の土坑と推定される。

ＳＫ131　土坑(第41図、図版)

ＳＫ129・130に隣接する形で検出された浅く小さい土坑である。平面形は、径65～70cmの円形を呈し、深さは35cmほどある。

④　土器棺墓

段丘崖の斜面から、４基の土器棺墓が検出されている。４基とも、後期最末葉か晩期前葉の粗製深鉢形土器を埋設したもので、ほぼ正立するか、斜面に対して正立している。３基(ＳＲ101・102・103)は崖面上部の約25°の斜面に、１基(ＳＲ120)は崖面中位に近い16～25°の斜面に位置している。いずれも、副葬遺物などは伴出しておらず、ベンガラも見られなかった。

ＳＲ101　土器棺墓(第42図、図版16)

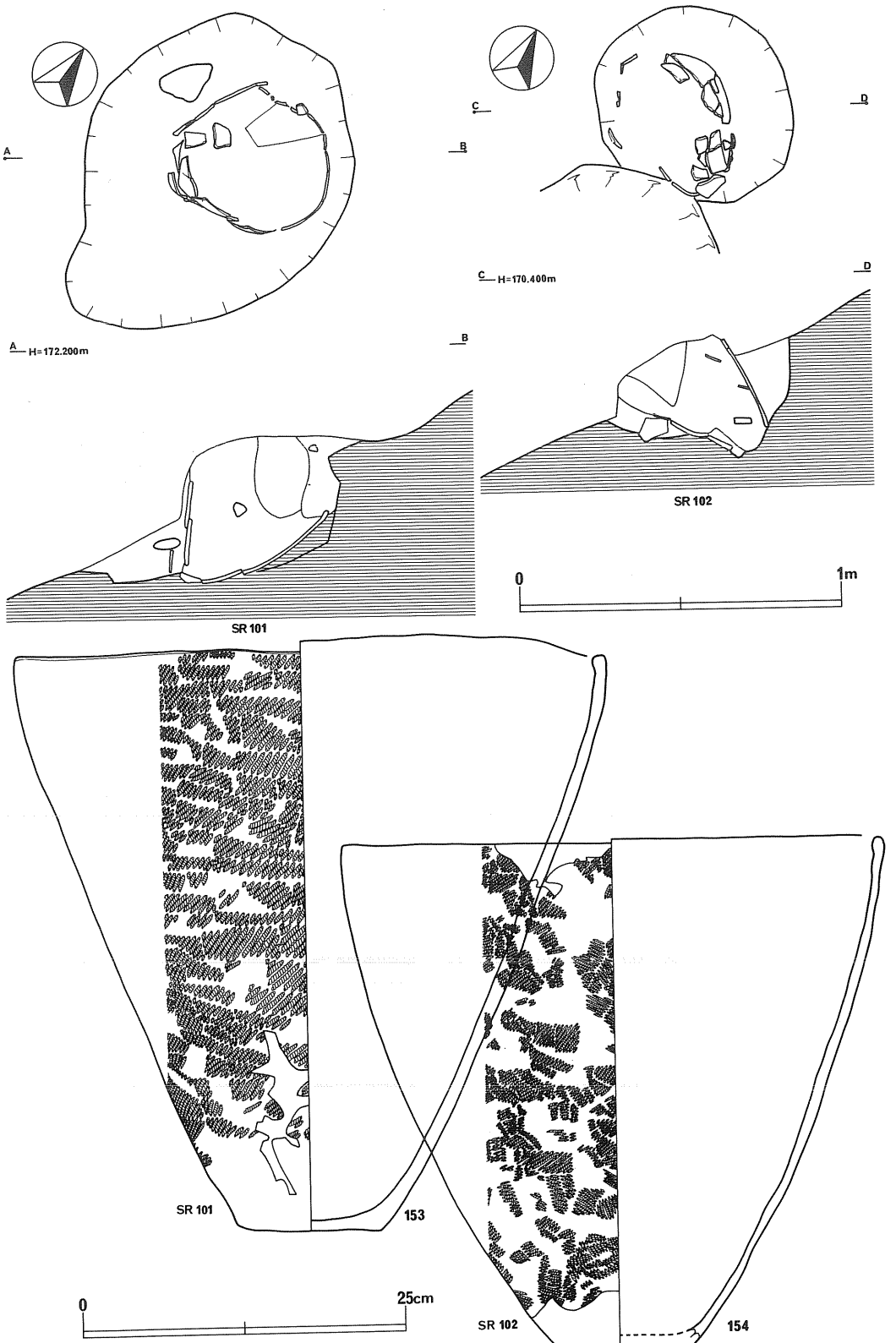
斜面の最も上位にある土器棺墓である。等高線が略南北に走る急斜面に長径110cm、短径85cm、深さ約40cmの不整楕円形の穴を掘り、42図153の粗製深鉢形土器を東側の坑壁に沿うように立てて埋設したものと考えられる。土器の西側部分はほぼ正立しているのに対し、反対側は割れたか穴の底面に横たわっている。土器棺内の埋土は、暗褐～黒褐色土で少量の炭化物を含み、軟らかくてしまりがない。

土器棺(第42図153)は、器全体の大きさに比べると小さい底部から外傾する体部が立ち上がり、内弯気味の口縁部に至る粗製深鉢形土器で、口径45.5cm、底径11cm、高さ45.5cmである。口縁端部内側が若干肥厚している。器外面には斜縄文が施され、体部下半を除く外面と、内面体部下半には煤状炭化物が付着している。

ＳＲ102　土器棺墓(第42図)

ＳＲ101と同じ斜面の下方約４mに位置する土器棺墓である。斜面に、径約60cm、深さ約40cmの穴を掘り、42図154の粗製深鉢形土器を埋設している。土器は、正立させたものが後で傾いたものか、口縁部側が斜面下方に少し傾いている。埋土は軟らかくしまりのない黒褐色土である。土器棺の南側一部が最近掘られた穴によって壊されている。

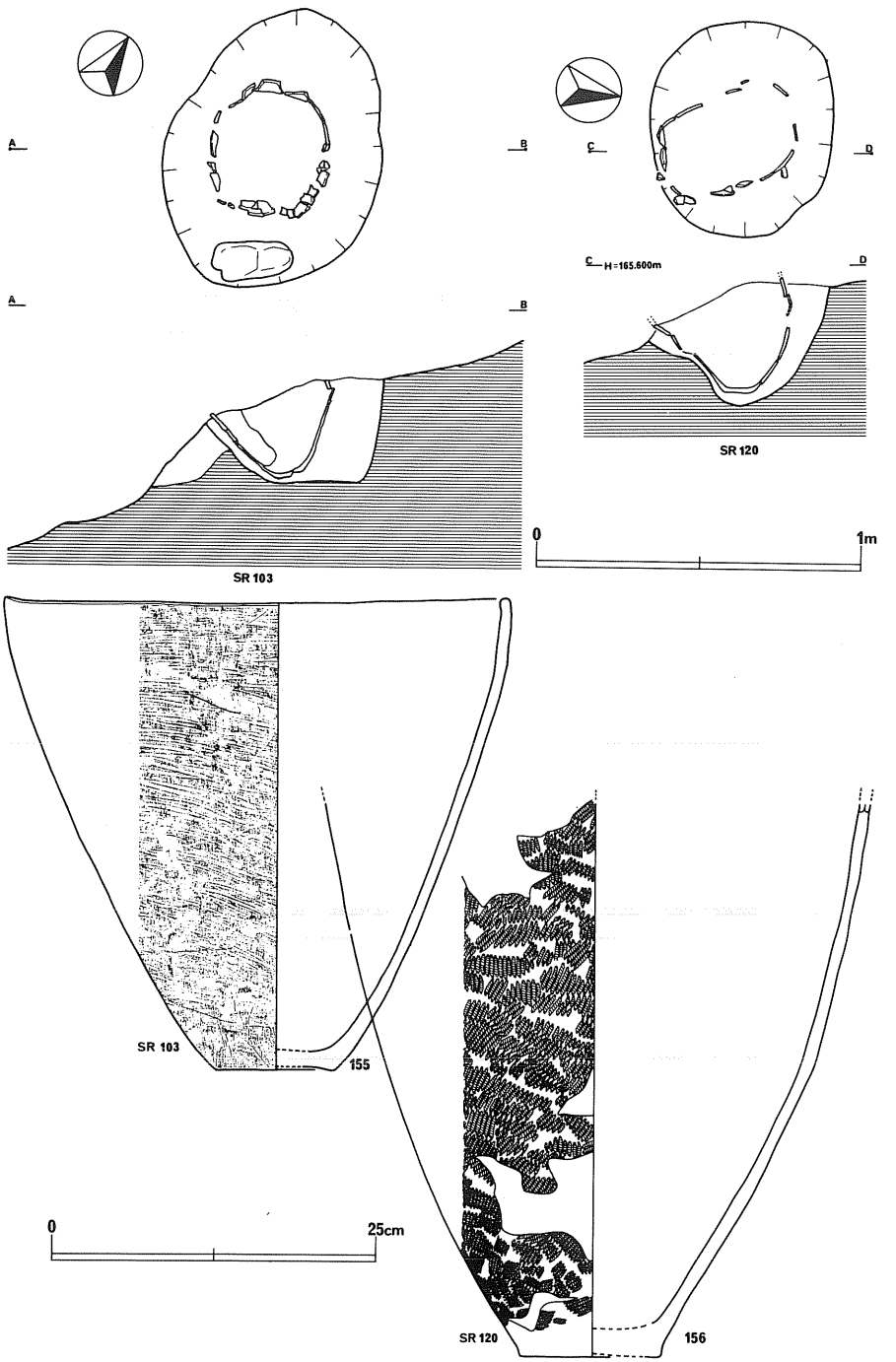
土器棺(第42図154)は、埋設される前から底部を欠損しているが、故意に底部を欠いたものか否か、不明である。底部から外傾して立ち上がった体部が、上半でやや内弯をはじめ、直立




第42図　ＳＲ101・102土器棺墓と土器棺

する口縁部に至る粗製深鉢形土器である。口縁端部内側が若干肥厚する。器外面には非常に細かい短節のＬＲ縄文が縦横に施文され、ＳＲ101の土器と同じような部位に煤状炭化物が付着している。口径41.7cm、推定底径10cm、推定高39.5cmである。

ＳＲ103　土器棺墓(第43図、図版16)




第43図　ＳＲ103・120土器棺墓と土器棺

斜面としてはＳＲ102とほぼ同位、ＳＲ102の南1.5mに位置する土器棺墓である。長径90cm、短径65cm、深さ約30cmの坑を掘り、43図155の土器を穴の北壁からやや離して埋設している。埋土の大部分は軟らかい黒褐色土で、一部に硬い黒色土が入っている。

土器棺(43図155)は、底部から外傾して立ち上がった体部が直立気味の口縁部に至る深鉢形土器である。底部の一部を欠くが、人為的なものではないと思われる。器外面には、先割れの箆状工具によるものか、横位から斜位(右下り)のヘラミガキが丁寧に施されているが、各条のミガキが内面のそれよりは深くて、あたかも条痕のように見えている。口径39cm、底径９cm、高さ37cmで、ＳＲ101の土器と同様な部位に煤状炭化物が付着している。

**ＳＲ120　土器棺墓**(第43図)

Ｂ地区では最も南、斜面中位で検出された土器棺墓である。径約60cm、深さ約40cmの穴を掘り、その中央部に43図156の粗製深鉢形土器を埋設したものである。埋土は、黒褐色土で、全体にやわらかくしまりのない土であるが、中にかたいブロック部分も認められる。

土器棺(43図156)は、口縁端まで復原できなかった。底部中央を略円形に欠くが、人為的である可能性が強い。底部から外傾して立ち上がる体部が、中央部でやや内弯し、直立する口縁部に至るものである。推定口径41.5cm、底径10.7cm、推定高45cmの粗製深鉢形土器で、外面には単節のＬＲ縄文が不定方向に施文されている。器内外面に、ＳＲ101の土器と同様な煤状炭化物の付着が見られる。

### (２)　平安時代

平安時代の遺構は、最上位の斜面が次の斜面に移行しようとする位置にあたる緩斜面に集中し、斜面の等高線に沿うような形で並ぶ。

#### ①　竪穴住居跡

竪穴住居跡は、５軒検出されているが、位置的には２ケ所に存在する。ＳＩ117は単独で存在しＳＩ110・112・116・118は住居の中心部を若干ずつ南東方向にずらして、ＳＩ118→116→112→110の順で建てられたものである。

**ＳＩ118　竪穴住居跡**(第44図、図版16・17)

Ｂ区のほぼ中央部、緩斜面に構築された竪穴住居跡で、ＳＩ110・112・116・118の中で最も古い。この部分は、約25°の斜面が緩斜面に移る部分にあたるため、北～東辺の一部は地山土を掘り込んで床面としているが、他の部分は、第２～３層の黒色土にあたるため、一度、黒色土を10～15cmほど掘り込み他所から地山土を運び込んで埋め、平坦面を作出し床面としている。平面プランは、東西375cm、南北380cmの方形を呈するものと推定されるが、東辺・南辺の一部はＳＩ116・112・110に切られて不明である。壁高は、北辺で60～30cmほどである。床面は、平坦でかたく、よくしまっている。柱穴は検出されなかった。壁溝は、北辺で痕跡が見える程

度である。埋土中から48図166・170の前期前葉の深鉢形土器口縁部に綾絡文などが施された土器が出土している。住居跡を人為的に埋めた時に混入したものであろう。170は、無節の不整撚糸文を横位回転している。

**ＳＩ116　竪穴住居跡**(第44図、図版16・17)

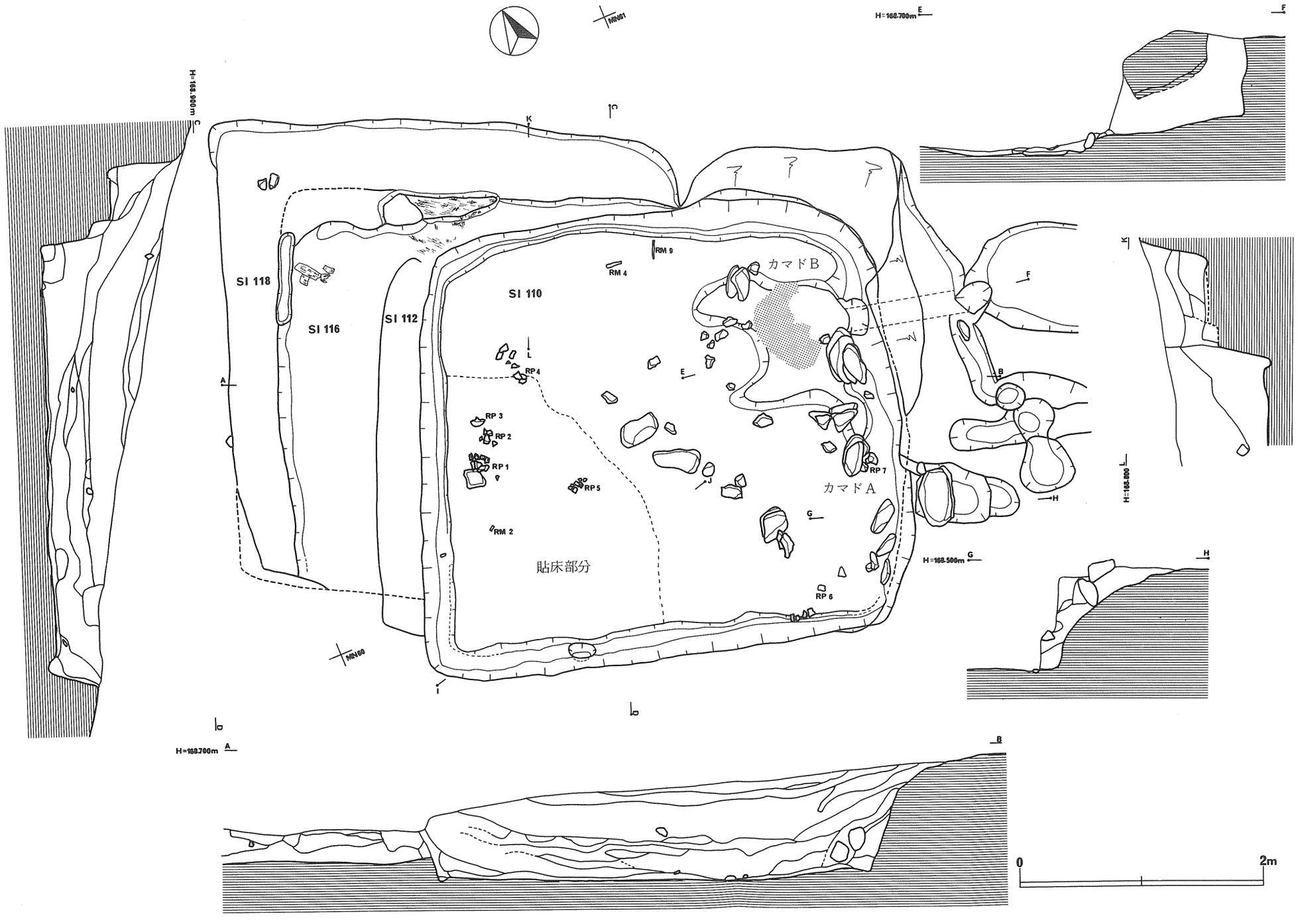
ＳＩ118の北西隅と南東隅を結ぶ対角線上にある住居の中心を、約80cmほど南東側に移動させて、ＳＩ118と同様な形態の竪穴住居跡を再建したものであろう。この場合にも、住居プランの南西側は黒色土上に床面を作出しなければならないために、盛土をしているが、西辺の南端側は明確でない。現状での平面プランは、東西320cm以上、南北320cmの略方形である。本住居跡は火災に遇ったらしく、床面が焼け、北辺際を中心に炭化材や、炭化した萱などが検出されている。北辺での壁高は、最高で60cm前後はあったものと思われる。西辺に壁溝の一部が見えるが全周していたかどうか不明である。

**ＳＩ112　竪穴住居跡**(第44図、図版16・17)

ＳＩ116を、さらに南東側にずらす形で再建した竪穴住居跡である。大部分をＳＩ110に切られているため、西辺プランしか確認できない。西辺は310cmほどの長さがある。やはり、西辺部分は盛土整地をして床面としている。埋土中から、167～169・171の土器が出土している。171は、土師器甕形土器の底部で、木葉痕が見える。

**ＳＩ110　竪穴住居跡**(第44図、図版16・17)

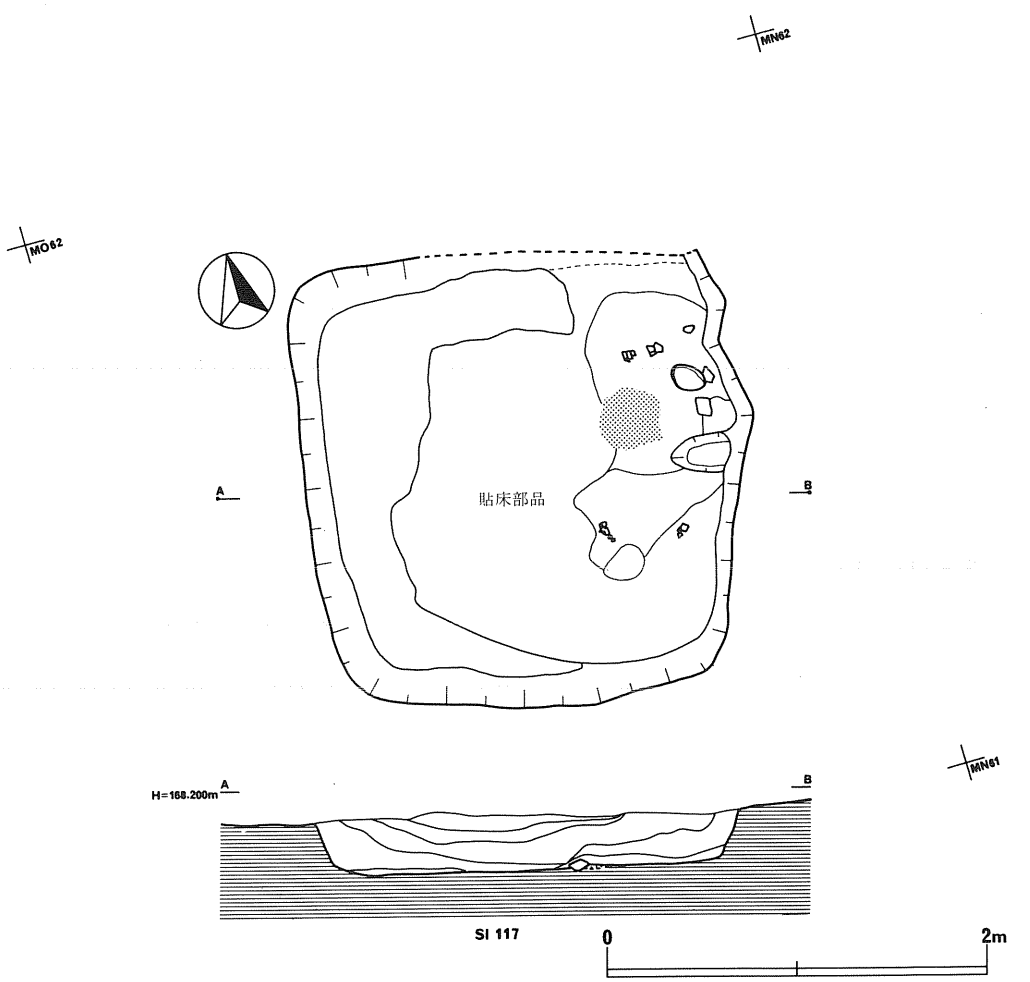
この部分の竪穴住居跡の中では最後に構築されたもので、直前の竪穴住居跡であるＳＩ112を若干東側にずらした位置である。平面プランは、東西370～400cm、南北360～365の略方形に近い。壁高は、北辺で80～130cm、南辺で約35cm、東辺で約90cmである。床面は、地山(細かい砂利と風化した軽石を含む明黄褐色の砂質土)を深く掘り込み、平坦でかたく締められているが、南西隅部は、ここに縄文時代のフラスコ状土坑ＳＫ129・130があったために、これを地山土で埋め貼り床している。浅い壁溝が東辺を除く３辺にあるが、東辺はカマド跡があることなどから判然としない。カマド跡は東辺に２基(南寄りをカマド跡Ａ、北寄りをカマド跡Ｂとする)検出された。両者、特にカマド跡Ａは、ソデ部などが残存せず、構築の際に使用された偏平な河原石や一部火熱を受けた粘性の弱い粘土などが床面東辺一帯に散乱していた。カマドＡは、住居南東隅から約100cm北寄りにあり、煙道部が残っている。煙道は、半地下風に壁外に斜上りに掘られて、途中大きな河原石を蓋にして煙出し部を開口している。煙道部は、蓋にした河原石を含め、わずかしか火熱を受けていない。カマドＢは、カマドＡの北側約140cm、住居北東隅から80cm南寄りに構築されている。壁から約20cm離れて、燃焼部と考えられる焼土(径60cm前後の円形を呈する)があり、この西側にＵ字形のうすい粘土が貼られている。煙道部は地山を掘り込んでいるため完全に残っている。住居内側から、１辺60～70cmの断面略方




第44図　ＳＩ 110・112・116・118 竪穴住居跡

形の穴を屋外に約200cmほどわずかな上り勾配に掘り込み、最奥部から垂直に立ち上がらせている（図版17）。煙道の下面以外は火熱を受けて壁が焼けている。A・B２つのカマド跡の被破壊状況は、Bの方がやや残りが良く、カマド跡Bが最後まで使用されたものと考えられるが、Aを壊した後の整理がほとんど行なわれておらず、このことからすると、カマドがA→Bの順で構築され、一時期に一方のみを使用したと決めつけることもできない。

遺物は、床面上から土師器杯形土器・鉄製品などが、埋土中から土師器・鉄塊、縄文土器などが、本遺跡の遺構の中にあっては最も多く出土している。49図176～183は、土師器杯形土器で、176～181は床面から出土した。176が図中のＲＰ１、177がＲＰ２、178がＲＰ４、179がＲＰ５、180がＲＰ６、181がＲＰ７で、182・183は埋土中から出土している。いずれも口径に比べて小さな底径で、回転糸切痕を有する。185は、高台付椀形土器である。内面は黒色処理され、内面の全面と外面体部上半がていねいにヘラミガキされている。184、186～189は甕形土




第45図　ＳＩ117竪穴住居跡

器で、187は床面ＲＰ３である。甕形土器はロクロ不使用で、外面に粗いヘラケズリを施すものが大部分であるが、184はロクロ仕上げのものである。須恵器は、甕形土器体部小破片が２点出土しているのみで、器厚がごく小さい。縄文土器は、後期の無文深鉢形土器片が数点出土したのみである。鉄製品は、50図１～３で、それぞれ１が図中のＲＭ１、２がＲＭ９、３がＲＭ４である。１と２は刀子、３は板状のものである。住居跡南東隅部の床面近くから、鉄塊が数個散らばって出土している。

**ＳＩ117　竪穴住居跡**(第45図)

平安時代の遺構としては、最も西側で検出された小さな竪穴住居跡である。ほんのわずかの部分ではあるが、第２層大湯浮石層を切っており、埋土中に大湯浮石の軽石が散らばって霜降状に含まれている。平面形は、１辺が280～290cmの方形を呈し、床面までの深さは、確認面から28cmである。北辺東半の壁は、範囲確認調査の際のトレンチで失われている。東辺内側にカマド構築の際に使用された粘性の弱い粘土の分布が見られ、燃焼部と考えられる径30cmの焼土もあることから、東辺北寄りにカマドのあったことがわかる。煙道部は残っていない。柱穴・壁溝は検出されなかった。床面は、ほぼ平坦でしまっている。床面の大部分は第３層黒色土中に構築されているため、赤黒～褐色の砂混じりの土でうすい貼床としている。

遺物は、床面カマド燃焼部周辺に第48図172の土師器甕形土器の破片が散在していたのと、埋土中から、同様の甕形土器片が20片ほど出土している。

**②　土坑(第46図)**

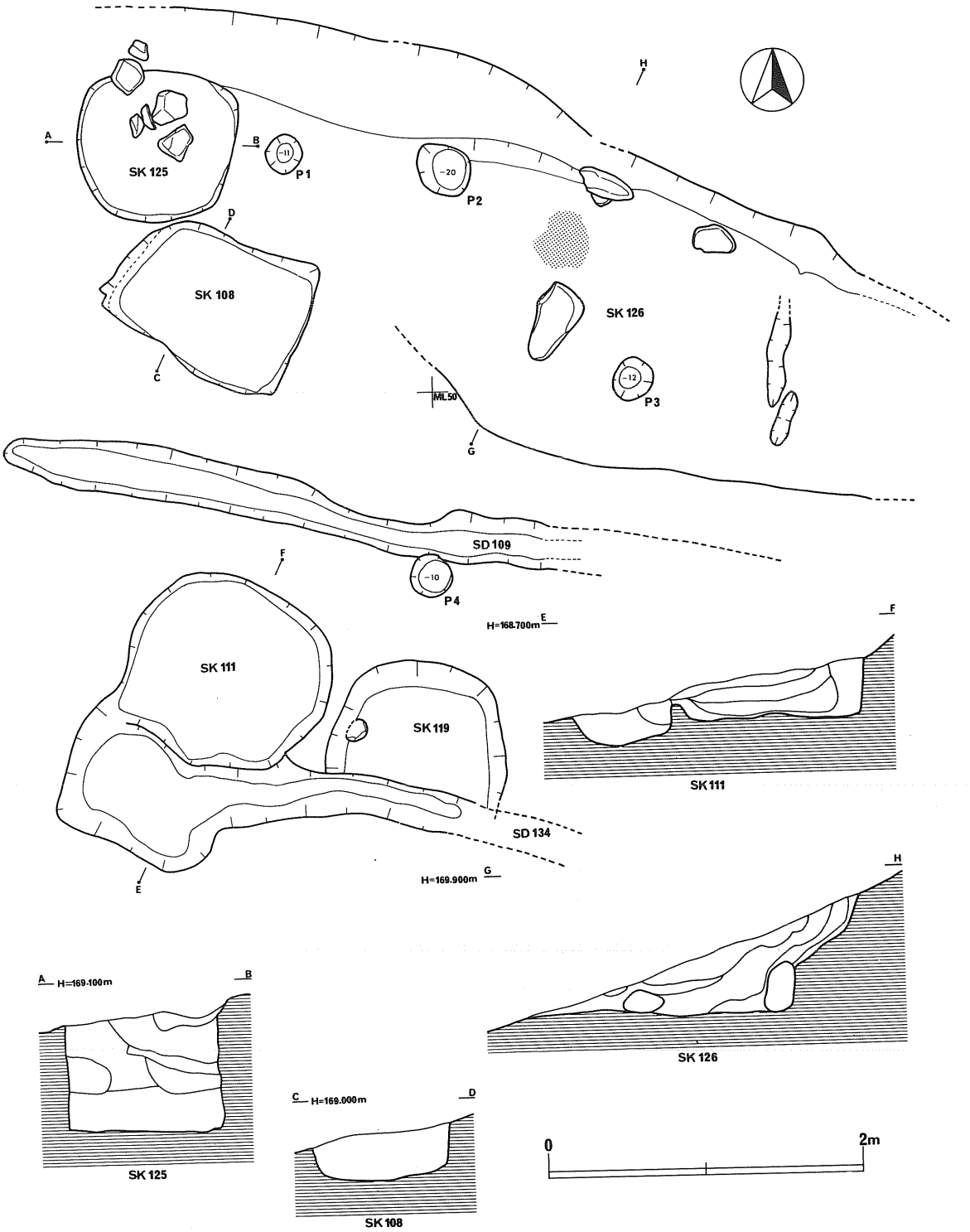
ＳＩ110竪穴住居跡の東側に、５基の土坑を検出した。うち４基(ＳＫ108・111・119・125)は、平面形が長方形～円形のものであるが、１基(ＳＫ126)は、他の４基に比べて浅くて大きく、他の諸点でも異なっている。ＳＫ126は、土坑ではないかもしれないが、明確に土坑以外の遺構とも言いきれないので、ここで扱うこととする。

**ＳＫ125　土坑**

ＳＩ110竪穴住居跡北東隅から、東方60cmで検出された土坑である。平面形は径100cmの略円形を呈し、深さは80cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。確認面で、火熱を受けた河原石数個があったが、この場に捨てられたものと考えられ、本土坑に直接関連するものではなさそうである。埋土中から、粗いヘラケズリのみの土師器甕形土器片が数点出土している。

**ＳＫ108　土坑**

ＳＫ125の南側に隣接して検出された、平面形が長方形の土坑である。長径120cm、短径85cm、深さ30cmである。西辺で、ＳＩ110のカマド煙出し穴と重複するが、新旧関係は明確にできなかった。埋土中から、ＳＫ125と同様の土師器甕形土器が10片ほど出土している。




第46図　ＳＫ108・125・126・111・119土坑
ＳＤ109・134溝状遺構

ＳＫ111　土坑

ＳＫ125・108の南側、斜面下方で、ＳＫ119と隣合って検出された土坑である。ＳＫ119とともにＳＤ134に一部切られているが、平面形はわかる。平面形は、１辺120～130cmの隅丸方形か円形に近く、深さは35cmである。埋土中から、48図173の土師器甕形土器が出土している。

ＳＫ119　土坑

南側をＳＤ134に切られており、全容は不明であるが、１辺が110cm前後、深さ30cmの土坑であると推定される。ＳＫ111と似ている。

ＳＫ126　土坑

ＳＫ125・108の東側に、斜面の等高線に沿うように削平し幅約200cm、長さ約250cmの平坦面が作出されている。これをＳＫ126としたのであるが、北壁のみが確認でき、他は不明である。平坦面上などに$P_1$～$P_4$の４個の柱穴及び焼土があり、床面に付くか、若干浮いた状況で３個の火熱を受けた河原石がある。床面がかたくしまっていることなどから、あるいは住居跡的なものかもしれない。埋土中から、48図174・175の甕形土器、50図４の刀子が出土している。174はロクロ使用、175はロクロ不使用である。他にも、ロクロ不使用の甕形土器片が多く出土している。

（３）　中世

調査区内の関上段丘面縁辺から、次の斜面にかけて溝状遺構が検出されている。各遺構内からその年代を決定するような遺物は全く出土していないが、これらが平安時代の土坑より新しいこと、埋土が比較的新しいと考えられる黒褐色土が主体であることなどから、ここでは大きく中世の遺構としておきたい。

溝状遺構（第46・47図、図版18）

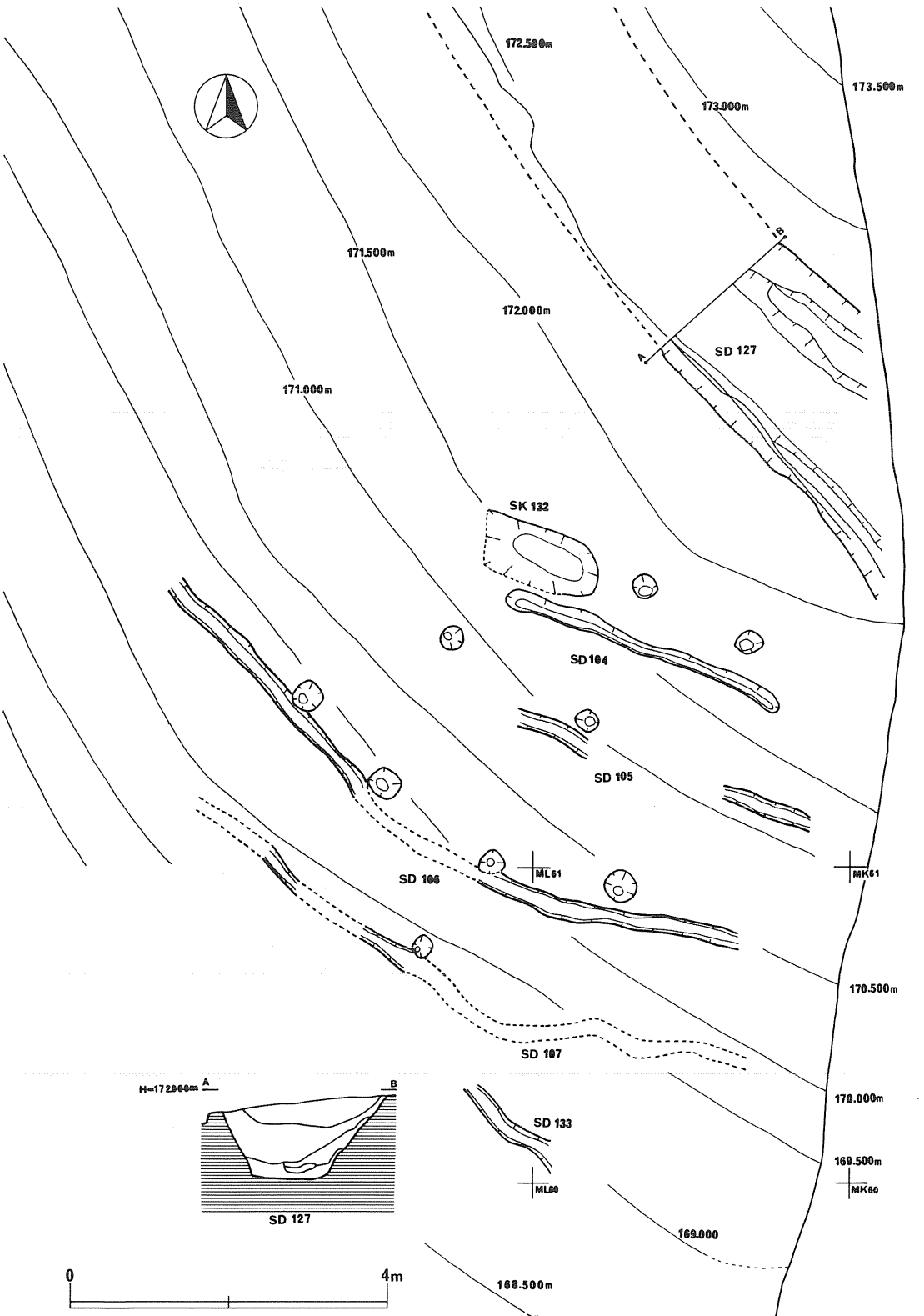
溝状遺構には、段丘縁に沿うように掘られた大きいもの（ＳＤ127）と、斜面等高線に沿うように掘られた小さなもの（ＳＤ104・105・106・107・109・133・134）がある。

ＳＤ127　溝状遺構

標高約175mの関上段丘面の、縁に掘られた溝状遺構である。上面幅約200cm、底面幅約100cm、確認面からの深さ100cmで断面形は逆台形を呈する。底面までは土砂崩れなどを恐れて長さ約４ｍしか掘っていないが、上面だけの観察では段丘縁に沿って連続するようである。

ＳＤ104・105・106・107・109・133・134　溝状遺構

段丘崖の最も上の約25°の斜面にほぼ当間隔で掘られた溝状遺構である。いずれも幅20～30cm、深さ10cm前後で、等高線に略沿う形である。調査区東部では明確であるが、西部では判然としない。これは西側に連続していないのではなく、東部の地山上の黒褐色土がうすくしか堆積していないため、掘り込みが地山上面で確認できるのに対し、西部では黒褐色土が比較的厚

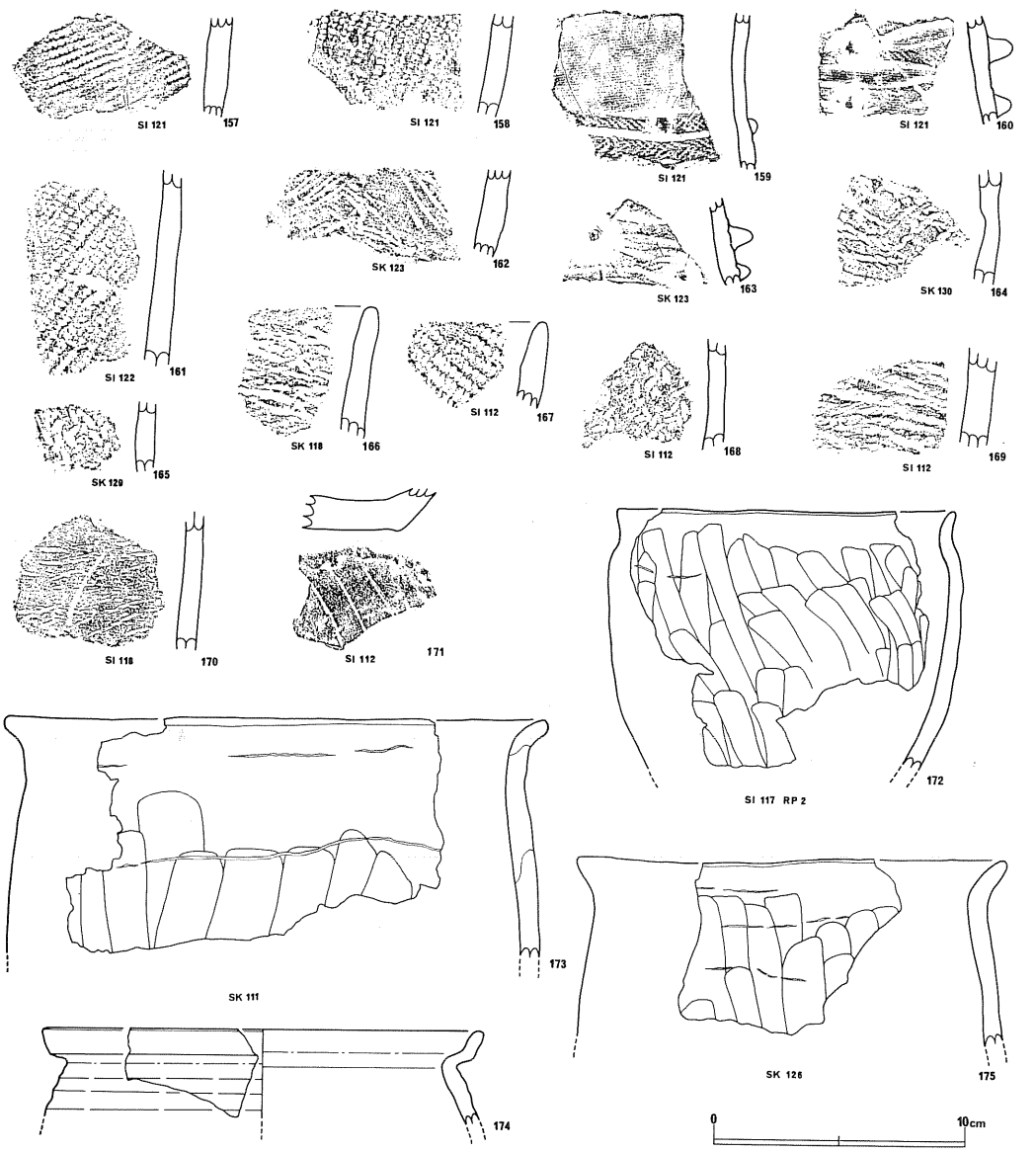



第47図　ＳＤ104・105・106・107・127・133溝状遺構

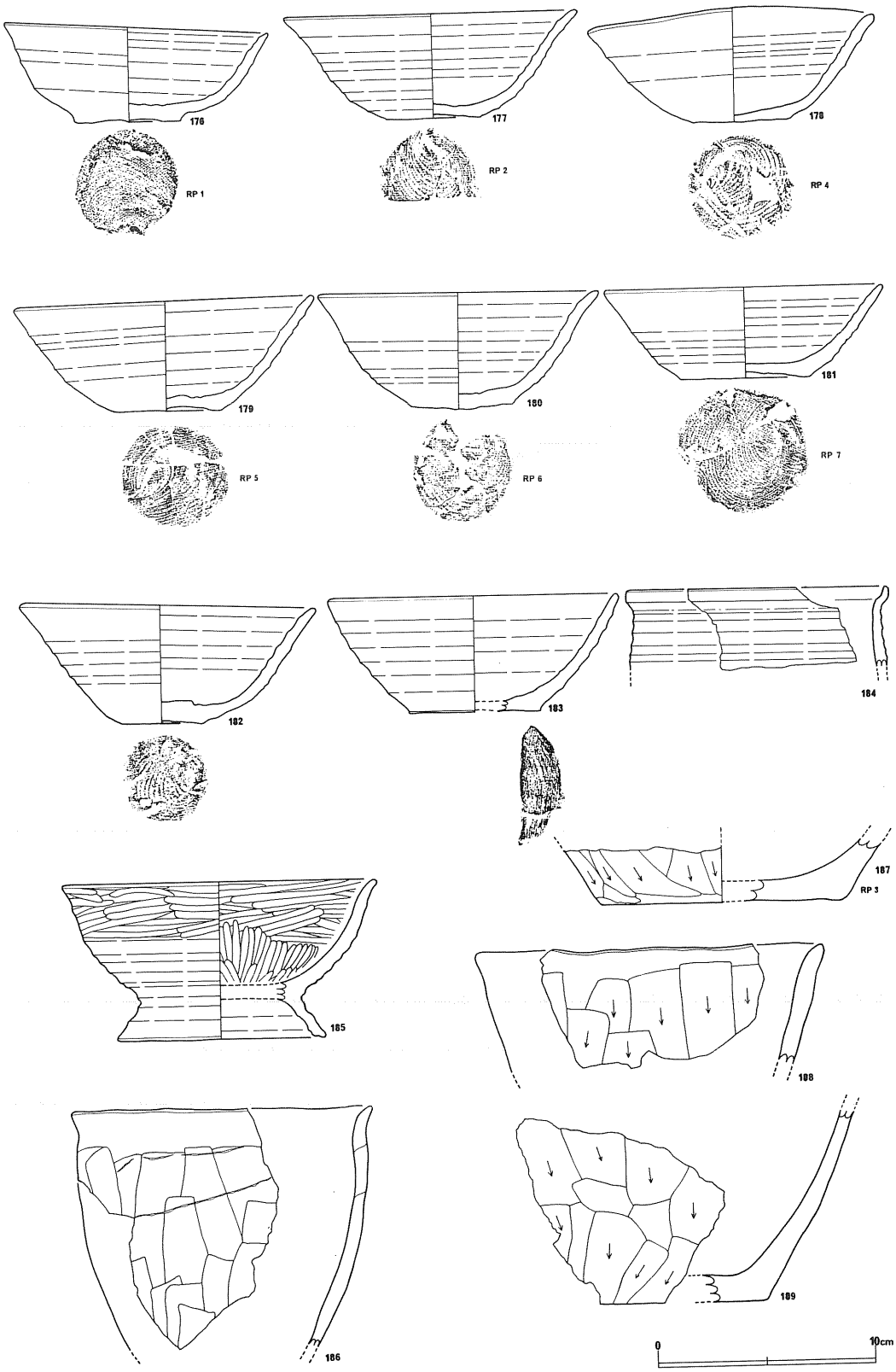
いため、地山までは掘り込まれなかったためと考えられる。各溝状遺構の斜面上側には、この遺構に沿うように柱穴状のピットが見られる。このピットは深さが10～15cmしかなく、柱状のものを立てたとも考えにくいが、あるいは杭状のものを軽く打ち込んだ痕かもしれない。柱穴の底面は平らでなく、乱れている。

### （４）　時期不明の遺構

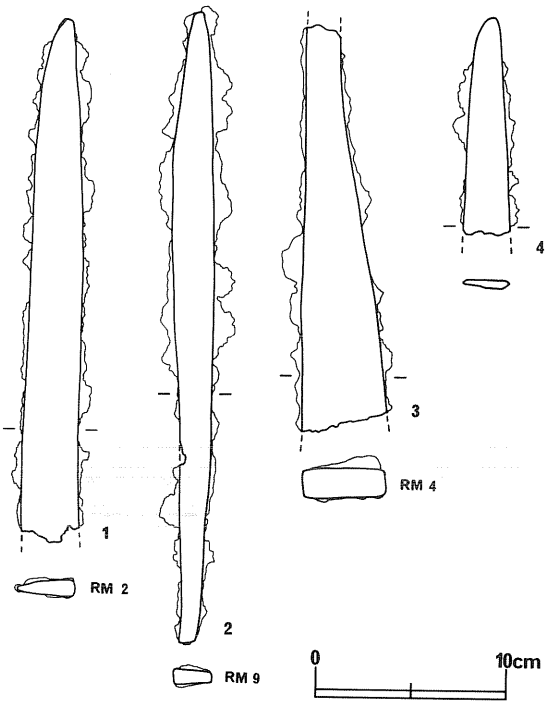
最も上の斜面から時期不明の土坑が２基（ＳＫ113・132）検出されている。長辺約150cm、短辺約70cmの略長方形を呈し、深さは約40cmである。遺物等が周辺からも出土しておらず、所属する時期については全く不明である。




第48図　Ｂ地区遺構内出土遺物(1)




第49図　B地区遺構内出土遺物(2)（176～189は全てＳＩ110出土）




第50図　Ｂ地区遺構内出土遺物(3)　鉄製品

## ２．遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、Ａ地区に比べて非常に少ない。またＡ地区からは、縄文時代後期末葉～晩期前葉の土器が主体をなして出土したのに対し、Ｂ地区では、縄文時代前期前葉～中葉、平安時代の土器が圧倒的である。石器は、Ａ地区同様少ない。

### （１）　土器

縄文時代前期前葉・中葉、同後期末葉、同晩期末葉、平安時代後葉、江戸時代初期の土器が出土している。

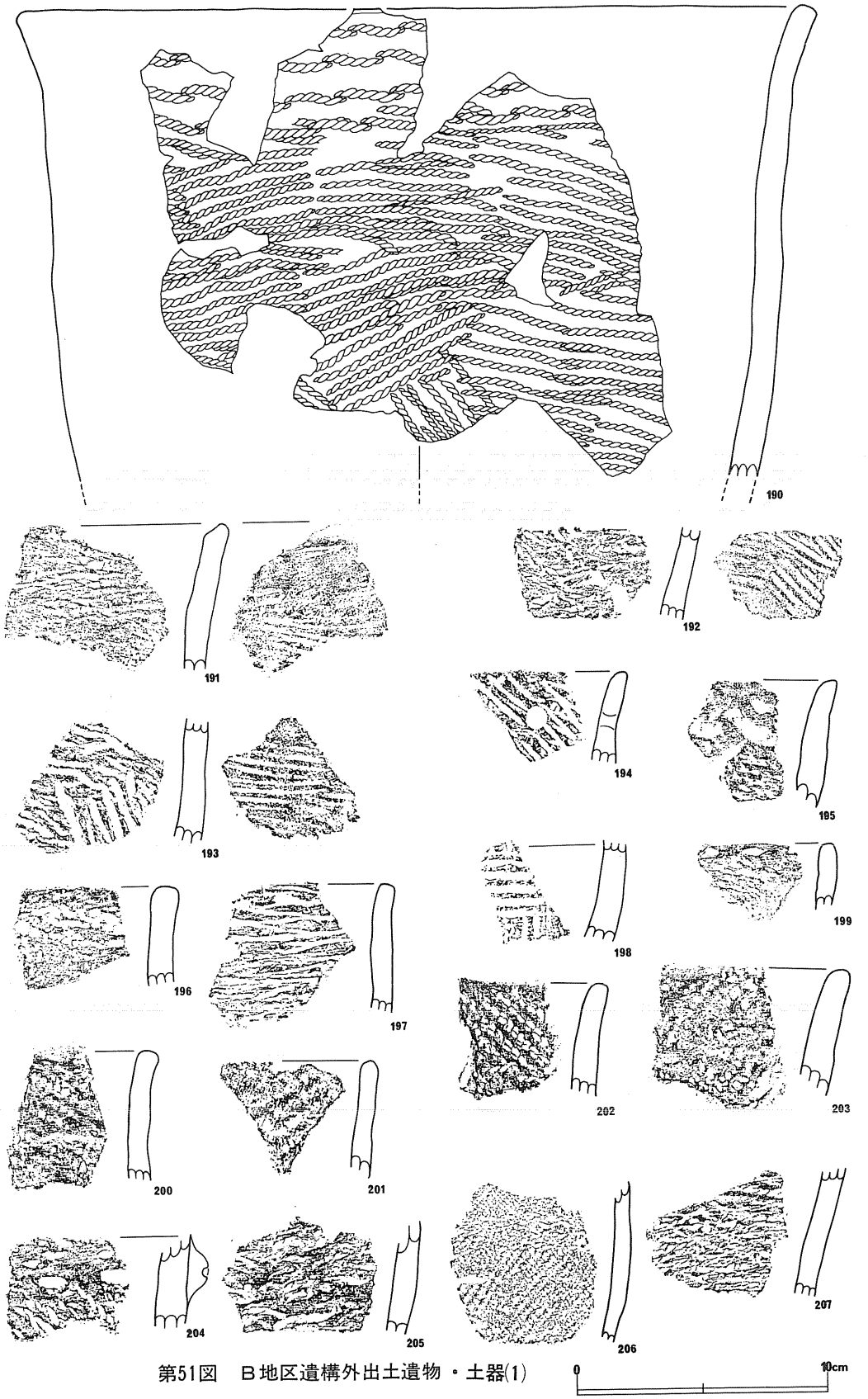
おおよその器形がわかるものは、縄文時代前期前葉の土器１点と、平安時代の土師器５点にすぎなく、他は全て破片である。

#### ①　縄文時代前期前葉～中葉の土器(第51図・52図208～223)

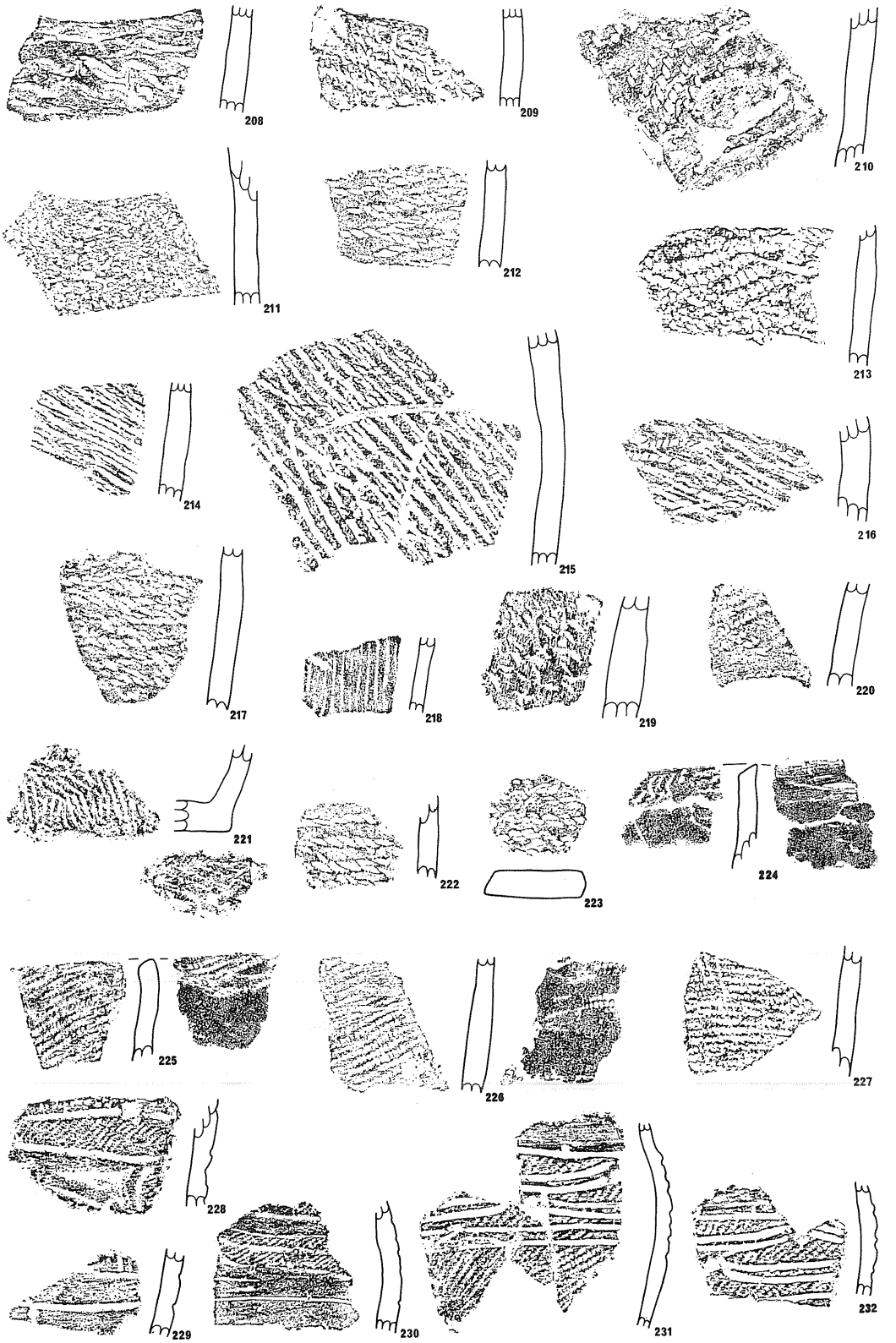
おおよその器形がわかるものは、51図190の１点である。190も含め、他の破片全てが多寡の差はあれ、胎土に繊維・小砂利・砂粒を含み、概して焼成が悪く、器面のあれているものが多い。190は、平底から外傾気味に体部が立ち上がり、体部上半で若干すぼみ、外傾する口縁部に至る深鉢形土器である。口頸部には横位の綾絡文、体部には無節の撚糸文が横位～斜位に施されている。口唇部は破片が少なく明らかでないが、縄の側面圧痕か指頭による圧痕が斜位に見える。191～193は同一個体と思われるが、器表面の縄文が全て違う。いずれも撚糸文である。器内面に横位～斜位の条痕が見える。194～203は口縁部である。195～199のように横位に綾絡文あるいは撚糸文を施すものと、194・200～203のように斜縄文のものとがある。204～220までは体部破片で、204は頸部に隆帯を持ち、その上に深い刺突が施されている。221は底部破片で、底部に敷物風の縄目が付いている。223は破片を用いた円盤状土製品であろう。

#### ②　縄文時代後期末葉の土器(第52図224～230)

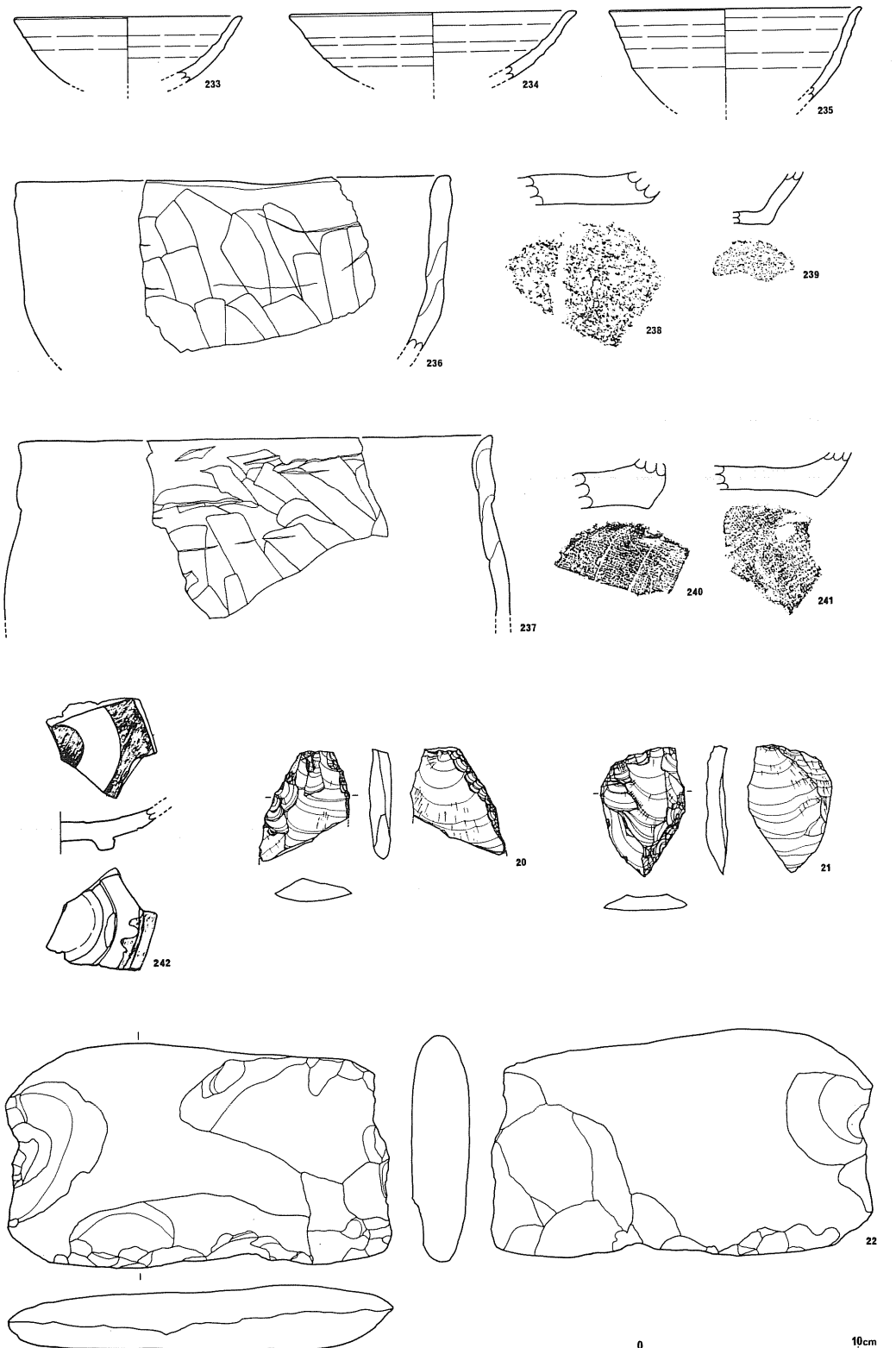
224～227は、深鉢形土器の同一個体破片である。224～226の内面には、消されずに残った縄文が見える。この時期にこのような例があるか寡聞にして知らないが、胎土などからするとほぼこの時期と考えられるので、ここに含んだ。228・229は入組帯状文の中に縄文と刻目を持つ




第51図　B地区遺構外出土遺物・土器(1)




第52図　Ｂ地区遺構外出土遺物・土器(2)




第53図　B地区遺構外出土遺物・土器(3)　石器

例である。230は壺形土器の体部破片か。

③　縄文時代晩期末葉の土器(第52図231・232)

231・232は鉢形土器体部上半の破片で、同一個体である。変形工字文が施されており、あるいは弥生時代初頭のものかもしれない。

④　平安時代後葉の土器(第53図233～241)

図示できるのは土師器杯形土器３点(233～235)、甕形土器２点(236・237)で、他には甕形土器の底部４点(238～241)である。杯形土器はいずれも体部上半からの破片で、ＳＩ110竪穴住居跡出土の杯形土器とほぼ同様のものである。甕形土器は外面粗いヘラケズリで、ロクロ不使用のものである。底部は、238・239がいわゆる砂底、240が木葉痕、241が蓆状の敷物痕であろうか細かい縄の跡が見える。

⑤　江戸時代前葉の土器(第53図242)

唐津系青緑釉皿の底部が１点のみ出土している。

（２）　石器

剝片を含めても石器の数は非常に少ない。図示できるのは３点のみである。

①　削器(第53図20・21)

やや縦長の剝片の１～２側辺に刃部を作出したものである。

②　半円状偏平打製石斧(第53図22)

細長くて偏平な河原石の長い１側辺を打ち欠いて、刃部としている。刃部は多少摩滅しているが、明瞭な面をなすには至っていない。両側の短い側辺にも打ち欠きによる抉入れ部を作出している。

# 第５章　まとめ

玉内遺跡は、秋田県鹿角市八幡平字玉内40番地、外に所在する。遺跡は昭和36年に発見され、縄文時代晩期前葉を中心とする土器・石器と同期頃のいわゆる日時計状組石１基が検出された。今回の発掘調査は、昭和62年７月20日～10月２日に行なわれ、縄文時代～中世の遺構・遺物が検出された。調査は遺跡の地形によってＡ地区・Ｂ地区に分けて行なわれ、調査面積は合わせて550m²である。調査の結果、検出された遺構と出土した遺物は以下のとおりである。

Ａ地区

検出遺構：検出された遺構は全て縄文時代晩期前葉のものと見られる。

配石墓：４基　　配石遺構：１基　　土壙墓：11基　　土器棺墓：３基

出土遺物：大部分が土器で、石器は非常に少ない。土器は、縄文時代中期・後期・晩期に属するものであるが、大半は後期末葉～晩期前葉のものである。

Ｂ地区

検出遺構：縄文時代・平安時代・中世の遺構が検出されている。

縄文時代：竪穴住居跡（中期末葉）：２軒　　土壙墓（後期末葉～晩期前葉）：２基

土坑：５基　　土器棺墓（後期末葉～晩期前葉）：４基

平安時代：竪穴住居跡：５軒　　土坑：５基

中　　世：溝状遺構：８条

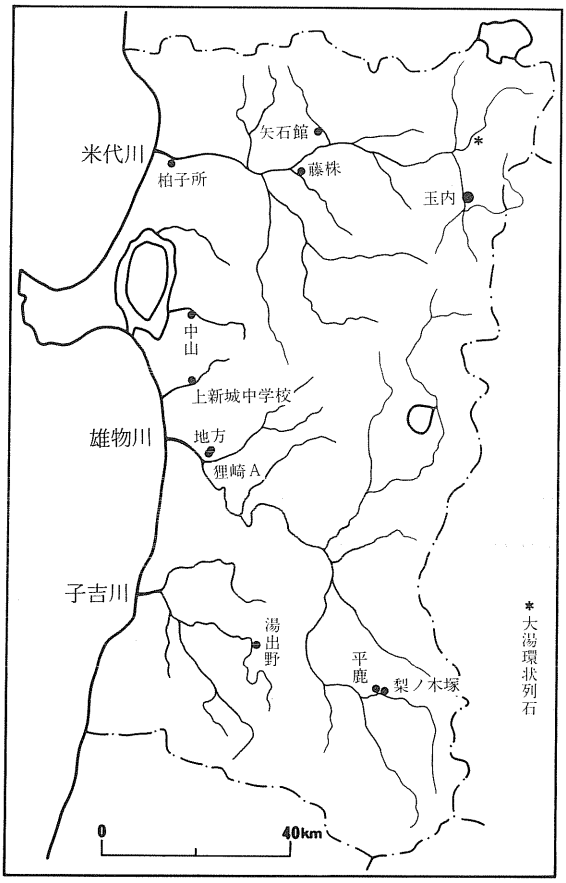
そ の 他：土坑：２基

出土遺物：遺物量は全般に少なく、大半は土器である。土器は、縄文時代前期・後期・晩期と、平安時代の土師器である。

調査の概要については以上のとおりであるが、このあと遺跡の立地、各遺構の年代、縄文時代晩期の墓域・配石遺構、出土した縄文時代後期末葉～晩期前葉の土器などについて若干まとめてみたい。

１．遺跡の立地について

遺跡は、その地形からＡ・Ｂ地区に分けられる。Ｂ地区は遺跡付近での標高が約175mの関上段丘の西南端部及びその崖斜面、Ａ地区はこのＢ地区崖面下方に棚状に分布する標高約153mの大里段丘面である。本地域における大里段丘は、幅10～15m、長さ約90mほど残っており、発掘調査はこの段丘面の西端部約100m²が対象となった。Ａ地区からは前述のように、縄文時代晩




**第54図　秋田県内における縄文後期後葉～晩期墓域が検出されている遺跡**

期前葉の配石墓・土壙墓・土器棺墓が検出され、その他の遺構は検出されなかった。従って、今回の調査区の東側約4mに位置する昭和36年発見の配石遺構をも含めて、本段丘の西端部が晩期前葉の墓域であったと見ることができる。また、B地区斜面からは、縄文時代後期末葉～晩期前葉と見られる土壙墓・土器棺墓が検出されている。この両者を同時存在とするしないについては、B地区の土壙墓・土器棺墓の細かい時期を特定する証拠に欠けるため、明確ではないが、ここでは一応ほぼ同時期のものとしておきたい。

ところで、これまで秋田県内で明らかになった縄文時代晩期の墓域を持つ遺跡は、湯出野(註1)・梨ノ木塚(註2)・平鹿(註3)・地方(註4)・狸崎A(註5)・上新城中学校(註6)・中山(註7)・柏子所(註8)・藤株(註9)・矢石館(註10)・玉内遺跡の11ケ所となる(第54図)。これらの遺跡の立地とその墓域をみると、本遺跡と柏子所貝塚を除くと、いずれもが河成段丘上、あるいは扇状地上の広い平坦面上である。これに対して、柏子所貝塚及び本遺跡は、段丘崖面途中にわずかに棚状に残る平坦面を墓域としており、本遺跡の場合、崖斜面がさらにこれに加わる(註11)。このような墓域の立地は、玉内遺跡の特徴の1つである。

また、縄文時代中期末葉・平安時代後葉の竪穴住居跡などが、崖面の中位緩斜面に建てられている。崖面の上方、段丘平坦面は広大である。平安時代の集落などが緩斜面に形成される例は、案内Ⅲ(註12)・堪忍沢(註13)・寒川Ⅱ遺跡(註14)などで例があるものの、本遺跡の場合、住居跡の西側は2m前後で45°以上の急崖である。竪穴住居からは、眼下に米代川の流れを一望できる。川の監視などを目的とする建物であったのであろうか。

2．遺構の時期について

検出された遺構の時期については、できるだけ各遺構の説明のところで述べて来たが、ここでは、縄文時代と平安時代の遺構について少し触れてみたい。

A地区から検出された各遺構は、伴出遺物にあまり恵まれず、その時期を確定するには困難

な面もあるが、埋土中や、周囲から出土している土器から、縄文時代晩期前葉として大過あるまい。B地区の土壙墓・土器棺墓の中には、SK123埋土中から出土したコブ付土器・SR103の条痕様のヘラミガキ痕のある深鉢形土器などをもって、後期末葉と考えることもできよう。従って、ここでは、B地区の土壙墓・土器棺墓は後期末葉〜晩期前葉としておきたい。

B地区平安時代竪穴住居跡・土坑の床面及び埋土中からは、土師器杯・甕形土器が比較的多く出土している。杯形土器は口径に比べて底径が小さく、底部は回転糸切りで無調整である。甕形土器は、器全体が小さくロクロ不使用のものが全体の9割方を占める。また、竪穴住居跡はSI110・112・116・118のようにほぼ連続して構築されたものと考えられる。このことから、これら遺構群の時期を平安時代後葉、10C後半以降のものとしておきたい。

3．配石墓・配石遺構について

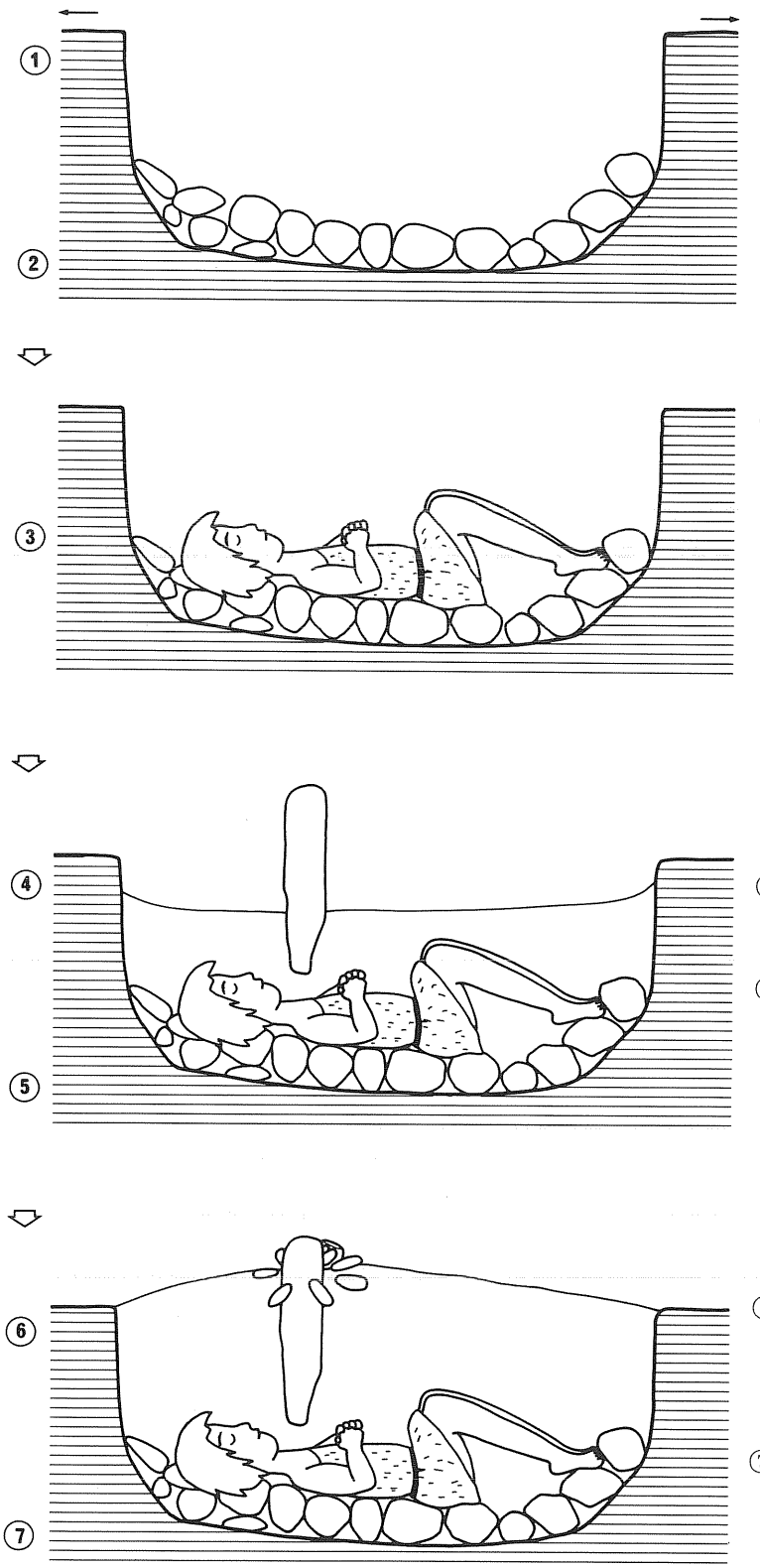
A地区から4基の配石墓及び1基の配石遺構が検出されており、これらは配石のあり方などによって大きくA〜Cに分けることができる。Aタイプ＝SQ14である。楕円形の壙を掘り、その底面や周壁下部に河原を敷き立て並べ、その上部に粗略ながらもいわゆる日時計状の組石を配するタイプである。SQ16もこのタイプの下部配石かもしれない。Bタイプ＝SQ15・28である。楕円形あるいは円形の壙を掘り、その壁下部に主に偏平な河原石を1〜3段積み重ねたもので、いわゆる組石棺墓に近い。Cタイプ＝SQ06である。単に細長い河原石を立てただけのもので、他には何も伴わない。

これらA〜Cタイプの配石遺構は、そのあり方からしてA・Bタイプが配石墓[註15]、Cタイプが何らかの意味での標識的な配石、とみてよい。「配石墓」については、阿部義平氏[註16]・鈴木保彦氏[註17]などの論考があり、細分類もなされている。また、県内の縄文晩期前葉における、Bタイプの類例としては、矢石館・梨ノ木塚遺跡に存在するが、矢石館遺跡の場合、使用されている石が板状あるいはそれに近い偏平な石で蓋石を持つことなど、玉内遺跡例とは若干趣を異にしている。

Aタイプの県内における類例としては、矢石館遺跡の第3・4号石棺があるが、それらは下部石棺状組石の蓋石面と上部の配石面が同レベルであること、下部石棺状組石に蓋石を持つこと、底面に敷石がないことなどが本遺跡のSQ14とは異なっている。なおSQ14については、下部の配石はもちろんのこと、上部の配石までもほぼ完全な形で把えることができた。このことによって、遺体の埋葬も含めたSQ14の構築過程はほぼ第55図のようになるものと思われる[註18]。

4．墓域の構成について

これまで県内で検出された縄文時代後期〜晩期における墓域には、埋葬施設として土壙墓・土器棺墓[註19]・配石墓などがあり、11遺跡の内訳をまとめたのが第2表である。もちろんこれらの遺跡は、遺跡全面が発掘調査されたわけではなく、この表の内容が即各遺跡の墓域の構成全て




① 平坦地に、長径約140cm×短径約90cmの楕円形の土壙を掘る。

② 壙底面及び壁下部に河原石を敷き・立て並べる。

③ 遺体を屈葬の形で安置する。（頭部は西北西、遺体の上・下には何らかの敷物があったと想像される）

④ 土を壙中位くらいまで埋める。

⑤ 頭部～胸部の上あたりに位置するように細長い石を立てる。

⑥ 再び土を、立石を中心に若干マウンドになるように埋める。

⑦ 立石の周囲に、細長い河原石を放射状に並べる。

第55図　ＳＱ14配石墓構築想像図
（人物のイラストは高橋弘美による）

第2表　秋田県内における縄文時代後期～晩期の墓域の構成

| 遺跡名 | 墓域の時期 | 土壙墓 | 土器棺墓 | 配石墓 | その他の配石遺構 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 湯出野 | 晩期全般 | 103 | 8 | | | |
| 梨ノ木塚 | 晩期全般 | 49 | 54 | 1 | | 晩期末葉の再葬墓(壺形土器)2基あり |
| 平鹿 | 晩期全般 | 127 | 30 | | 11 | |
| 地方 | 晩期前葉～中葉 | 559 | 3 | | | |
| 狸崎A | 晩期後葉 | 28 | | | | |
| 上新城中学校 | 晩期全般 | 94 | | | | |
| 中山 | 後期末葉～晩期前葉 | 29 | 4 | | | |
| 柏子所 | 晩期前葉～中葉 | 7 | | | | 8体の人骨出土、合葬あり |
| 藤株 | 後期後半～晩期前葉 | 86 | 1 | | | 後期の火葬墓1基あり |
| 矢石館 | 晩期前葉 | | | 5 | 4 | |
| 玉内 | 後期末葉～晩期前葉 | 13 | 7 | 4 | 1 | |

を示していないと思われるが、おおよその姿であろう。また、梨ノ木塚遺跡のように広範囲に調査された遺跡では、晩期の中でも、各時期、各墓域によってその構成施設は異なっている。(註20) これらを加味した上で、各遺跡における墓域を構成する施設の比較をすると、以下のようになる。①矢石館遺跡を除いて、土壙墓が墓域の主たる構成施設である。(註21) ②土壙墓と共に土器棺墓が検出されている遺跡と、土器棺墓の全くない遺跡があり、前者でもその比率にかなりの差がある。③配石墓をもつ遺跡が少ない。ただし、ほとんどの遺跡の土壙墓中には、多寡の差・検出される面の違いはあれ、種々の形で河原石が検出されている。従って、これらと土壙墓との分離が困難な場合が多い。

また、墓域の構成施設およびその内容からこれらの遺跡を類型化すると次のようになる。

Ⅰグループ　土壙墓と土器棺墓を主たる構成施設とする。

Ⅰ－a　土壙墓と土器棺墓がほぼ同数……梨ノ木塚

Ⅰ－b　土壙墓:土器棺墓＝2～5：1程度……平鹿・(中山)

Ⅰ－c　土壙墓に対して土器棺墓の占める割合が非常に小さい　湯出野・地方・藤株

Ⅱグループ　土壙墓だけで構成される　狸崎A・上新城中学校・柏子所

Ⅲグループ　土壙墓＋土器棺墓に配石墓を伴う　玉内・(梨ノ木塚)

Ⅳグループ　配石墓だけで構成される　矢石館

さらにこれらについて、墓域の時期をも加味して観ると、後期後葉～晩期前葉のものでも、

「土壙墓＋土器棺墓」を主とする場合と、土器棺墓をほとんど伴わない場合があるなど複雑である。このように、縄文時代晩期の亀ケ岡文化圏の広がりからすれば、比較的せまい範囲と考えられる秋田県内を取り上げても、各遺跡・墓域によってそのあり方は様々である。例えば、湯出野遺跡と梨ノ木塚・平鹿遺跡は約30km、湯出野遺跡と地方遺跡は約40km、藤株遺跡と矢石館遺跡は約10kmしか離れていないのにもかかわらず、墓域の構成施設にはかなりの差がみられる。ここで、これ以上のことについて言及する余裕はないが、このように一様でない理由はどこにあるのだろうか。もちろん、これを解き明かすためには、各遺跡の遺構・遺物の徹底的な比較、より近いところでの同時期の調査例の増加、後期末葉以前の墓域の調査例の増加などが不可決であるが、ここでは一応次のように考えておきたい。このような墓域の構成施設の差は、秋田県内の地方・地域における集団間の風習の差を示すもの、と。

5．A地区出土後期末葉～晩期前葉の土器について

玉内遺跡A地区から出土した縄文土器の主体は、後期末葉～晩期前葉のものであり、これを器種構成、器形、装飾・施文手法などを基軸に、「後期末葉の土器」・「晩期前葉第1期の土器」・「晩期前葉第2期の土器」・「晩期前葉第3期の土器」として分類し説明した。そしてこれに、昭和36年出土の土器及び、東北縦貫自動車道に係る発掘調査で近隣遺跡から出土した土器[註22]を若干加えて作成した図が、第56図である。これを従来の該期編年に照らし合わせると、おおよそ以下のようになるものと考えられる。

「後期末葉の土器」：安孫子昭二氏のいうコブ付土器第Ⅳ段階[註23]。

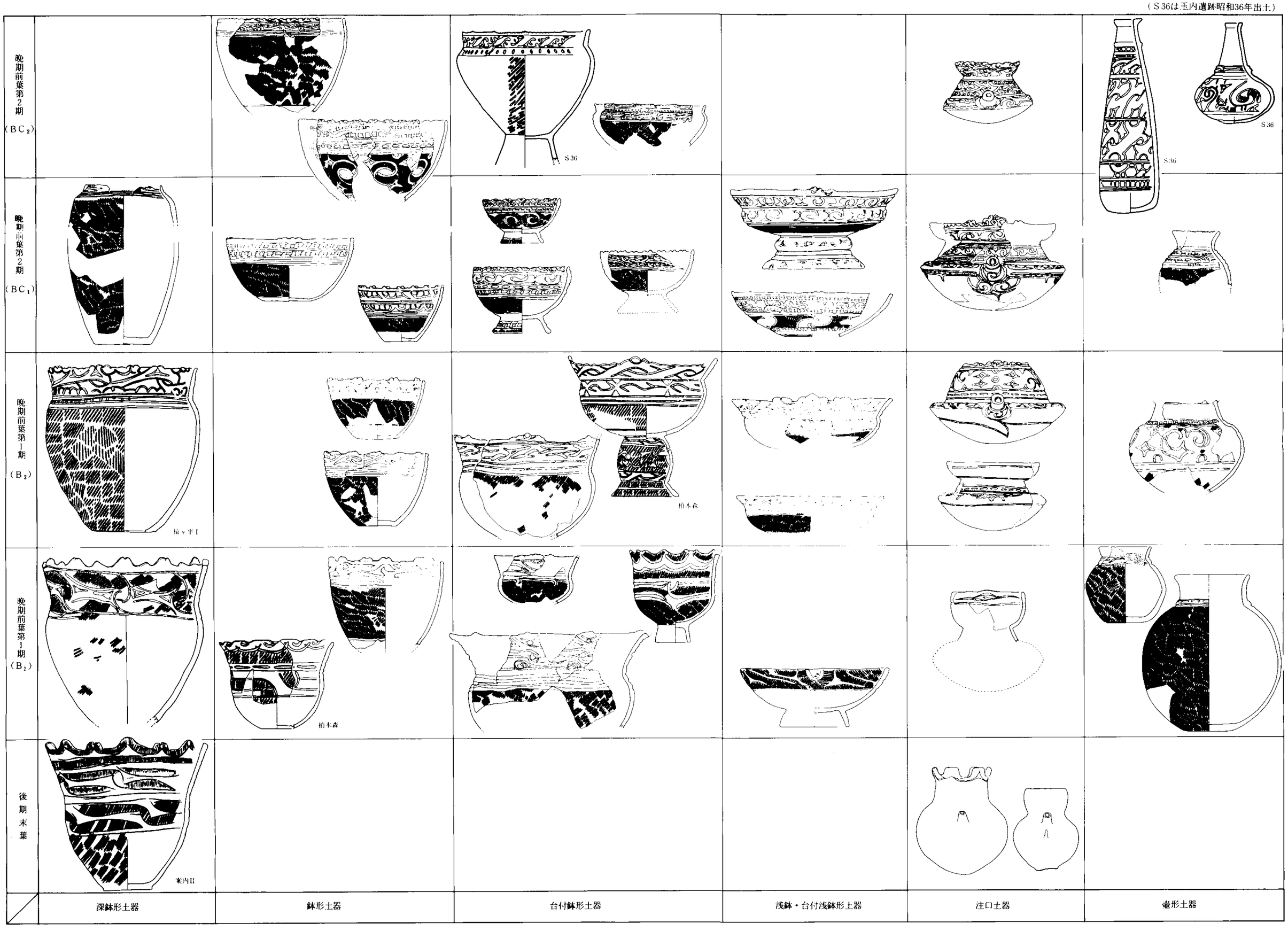
「晩期前葉第1期の土器」：山内清男博士の大洞$B_1$段階のもの[註24]と、$B_2$段階のものがありそうである。

「晩期前葉第2期の土器」：山内清男博士の大洞$BC_1$段階。

「晩期前葉第3期の土器」：山内清男博士の大洞$BC_2$段階。

以上、今回の調査成果についてまとめたわけであるが、何も触れないでしまった部分も多々ある。例えば、玉内遺跡の北約11kmには大湯環状列石[註25]があり、近隣の小坂町などでもいわゆる日時計型の組石が検出されている[註26]。玉内遺跡SQ14配石墓などはその変遷を考える上では、それらの遺跡との関連なしでは考えられないところである[註27]。

（S36は玉内遺跡昭和36年出土）




第56図　玉内遺跡及び周辺遺跡出土の縄文時代後期末葉～晩期前葉の土器

註１　秋田県教育委員会『湯出野遺跡発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第53集　1978(昭和53年)

註２　秋田県教育委員会『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第63集　1979(昭和55年)

註３　秋田県教育委員会『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第101集　1983(昭和58年)

註４　秋田市教育委員会『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』地方遺跡　1987(昭和62年)

註５　秋田市教育委員会『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』狸崎Ａ遺跡　1985(昭和60年)

註６　秋田市教育委員会『上新城中学校遺跡林道工事・小グランド造成に伴う緊急発掘調査報告書』1980(昭和55年)

註７　五城目教育委員会『中山遺跡発掘調査報告書』　1983・1984(昭和58・59年)

註８　秋田県教育委員会、能代市教育委員会『柏子所貝塚』　1965(昭和40年)

註９　秋田県教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第85集　1981(昭和56年)

註10　奥山 潤「縄文晩期の組石棺」『考古学雑誌』40巻第２号　1953(昭和28年)

註11　11ケ所の遺跡のうち晩期の住居跡が検出されているのは地方・狸崎Ａ・中山・藤株遺跡の４ケ所だけであり、その数も各々１～２軒どまりで、それぞれの墓域を形成した集団の集落ではなく、墓域あるいは葬送儀礼に関連した建物跡とする向が強い。それぞれの遺跡では土器捨場などが一部墓域と重なったり(梨ノ木塚・平鹿・柏子所)・墓域近くに捨場などがあったりして、検出された墓域を形成した集落が近くに存在する予測は立てられているものの、まだ当たっていない。

註12　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ』秋田県文化財調査報告書第99集　1983(昭和58年)

註13　秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　－堪忍沢遺跡－　』秋田県埋蔵文化財発掘調査報告書　1987(昭和62年)

註14　秋田県教育委員会『寒川Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第167集　1988(昭和63年)

註15　配石墓については、土壙墓との識別、用いる石の多寡の点で問題が多く、ここでは一応、「１個の埋葬施設あるいはこれに伴う標識(墓標)的なものを構築する際に主な材料として石を用いたもの」としておきたい。というのは、本遺跡ＳＱ14・15・28、矢立館遺跡第１～５号組石棺、あるいは梨ノ木塚遺跡ＳＫ228のようなものを「配石墓」とすることにさして異論はあるまいが、梨ノ木塚遺跡ＳＫ228やＳＫ220、湯出野遺跡８号土壙墓、本遺跡ＳＫ17などを「配石墓」とするには多少の躊躇を覚えるし、何よりも土壙墓中に１～２個河原石が存在した場合に、それが人為的なものか否かを判断することが大変である。

註16　阿部義平「配石墓の成立」『考古学雑誌』54巻第１号　1968(昭和43年)

註17　鈴木保彦「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」『神奈川考古』第９号　1980(昭和55年)

註18　現在検出されている土壙墓あるいは配石墓の大部分は、上部に配石などの上部構造を持っていたものが、水田や畑地の耕作等によって、上部が削平され、下部のみ残ったものが多いのかもしれない。

註19　県内の縄文時代後期後半～晩期にかけての遺跡で、粗製深鉢形土器を正立させて埋設した施設が主に墓域から検出されている。これは、埋設土器(註１、註２)などの遺構名で呼ばれて来ているが、県外の幾多の例からこれを遺体(特に死産児～乳幼児が多いようである)の埋葬施設とすることに異論はないところと考える。従って、ここでは「土器を棺とした墓」として土器棺墓の名称を付した。

註20　例えばII－B区東端部は、晩期後葉の墓域と見られるが、ここからは土器棺墓が検出されなかった。

註21　矢石館遺跡は広範囲な遺跡であり、昭和27・28年の調査はごく一部のトレンチ調査である。周囲に土壙墓・土器棺墓が存在する可能性が十分にある。また同様に、柏子所貝塚も土壙墓以外の埋葬施設が存在する可能性がある。

註22　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ』秋田県文化財調査報告書第91集　1982(昭和57年)

秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』秋田県文化財調査報告書第105集　1984(昭和59年)

註23　安孫子昭二「コブ付土器様式から亀ケ岡土器様式への変遷過程」『考古風土記』第５号　1980(昭和55年)

註24　山内清男「小川貝塚」『福島県史』第６巻　1964(昭和39年)

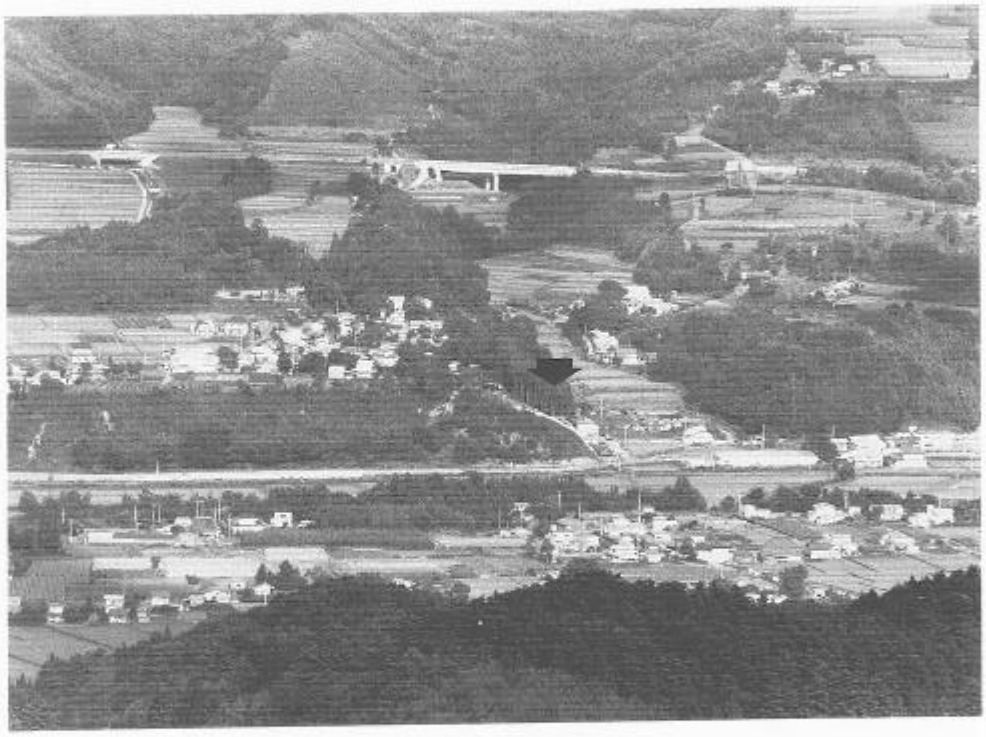
註25　文化財保護委員会『大湯環状列石』　1953(昭和28年)

註26　藤本・中田・安保・奥山『小坂環状列石墳墓』　1969(昭和44年)

註27　註16に同じ

図版1

1　水晶山山頂より見た玉内遺跡

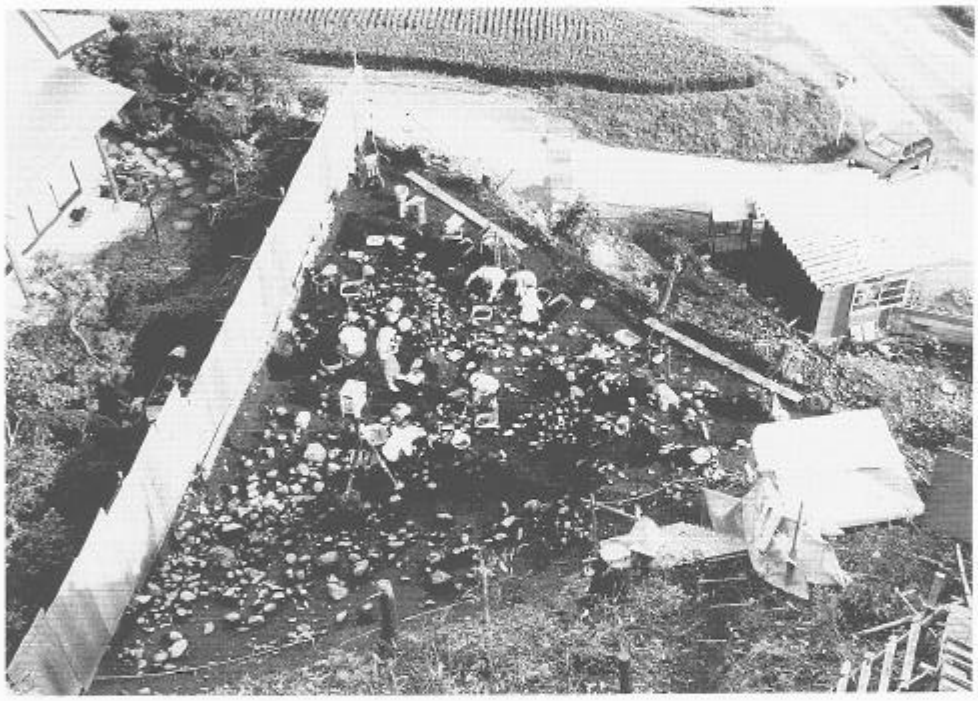


2　遺　跡　全　景（西▶）

3　遺　跡　近　景（南東▶）

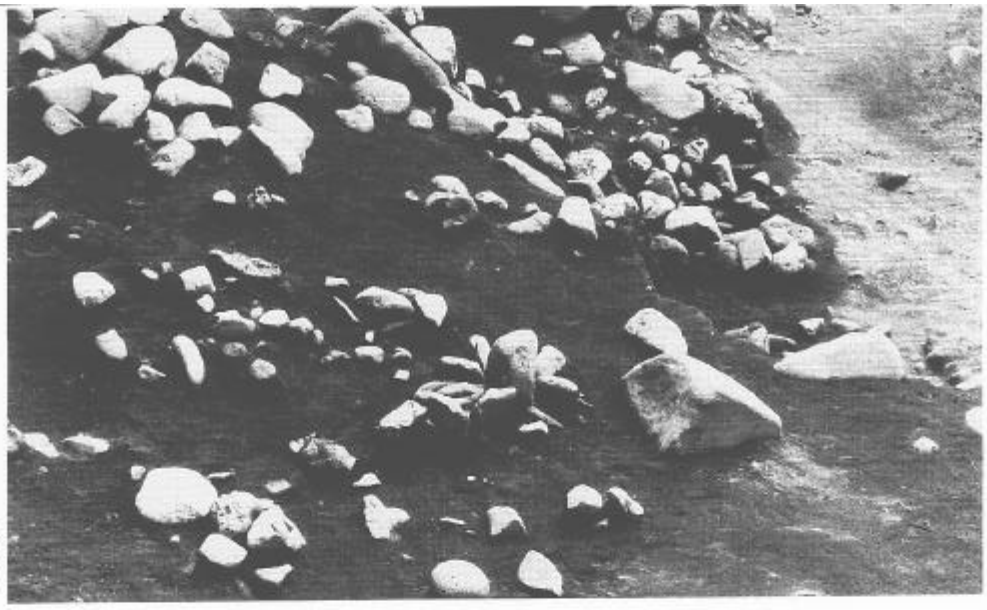
図版2

1　昭和36年発見の日時計状組石の現況

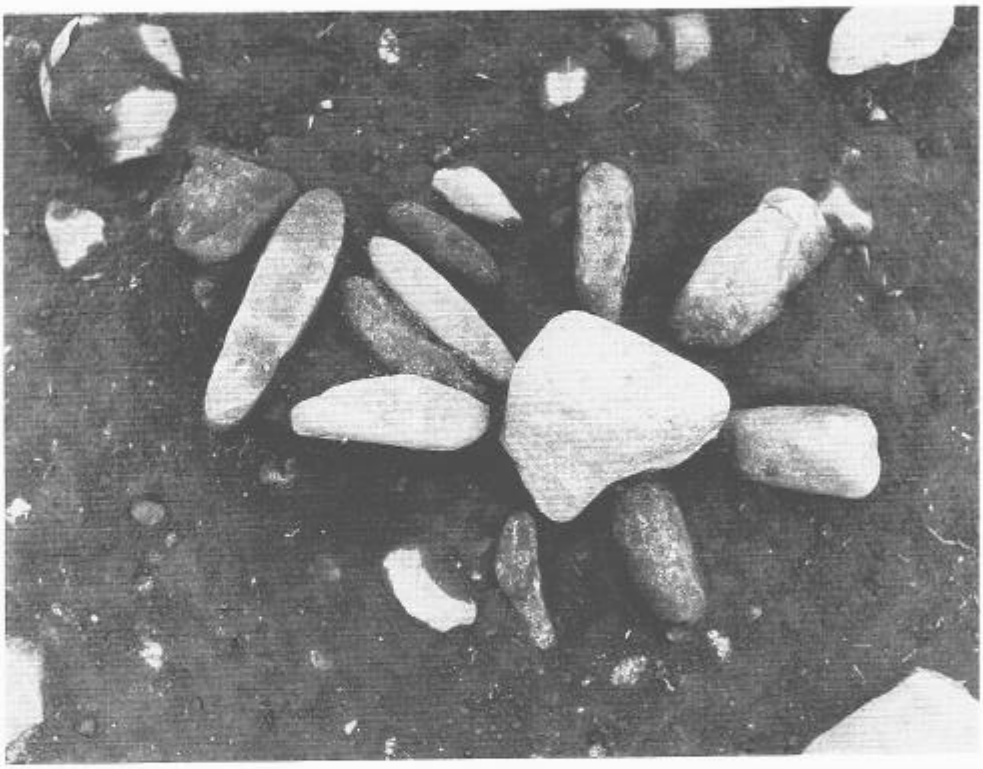


2　A　地　区　調査風景（北▶）

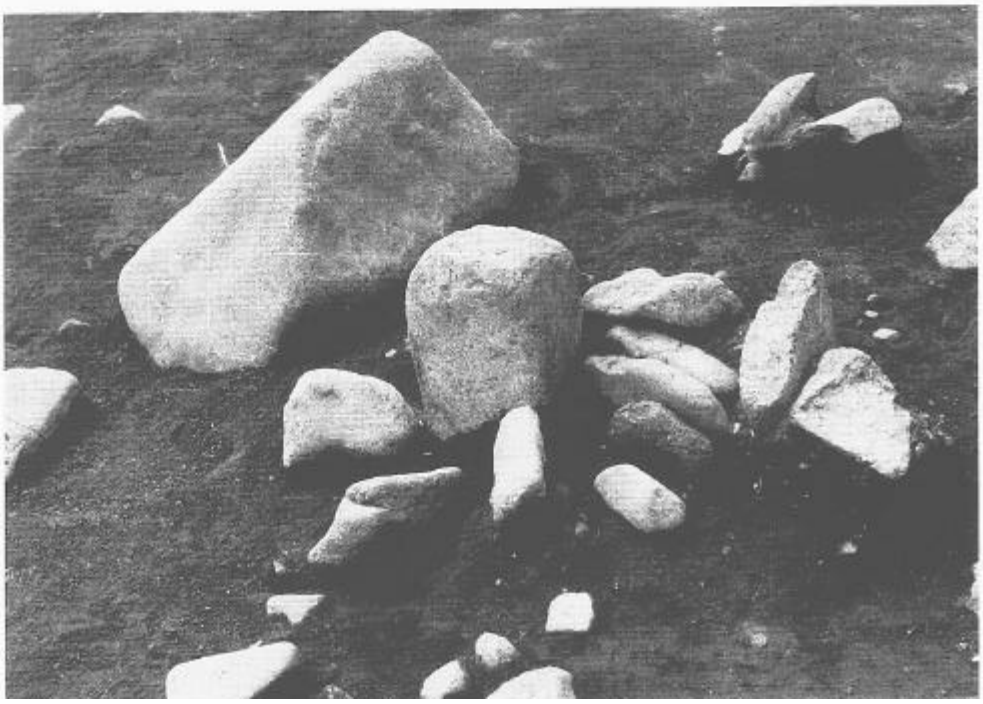
3　同　上



1　ＳＱ14配石墓検出状況　（北西▶）



2　同　上（真上から・上が南東）



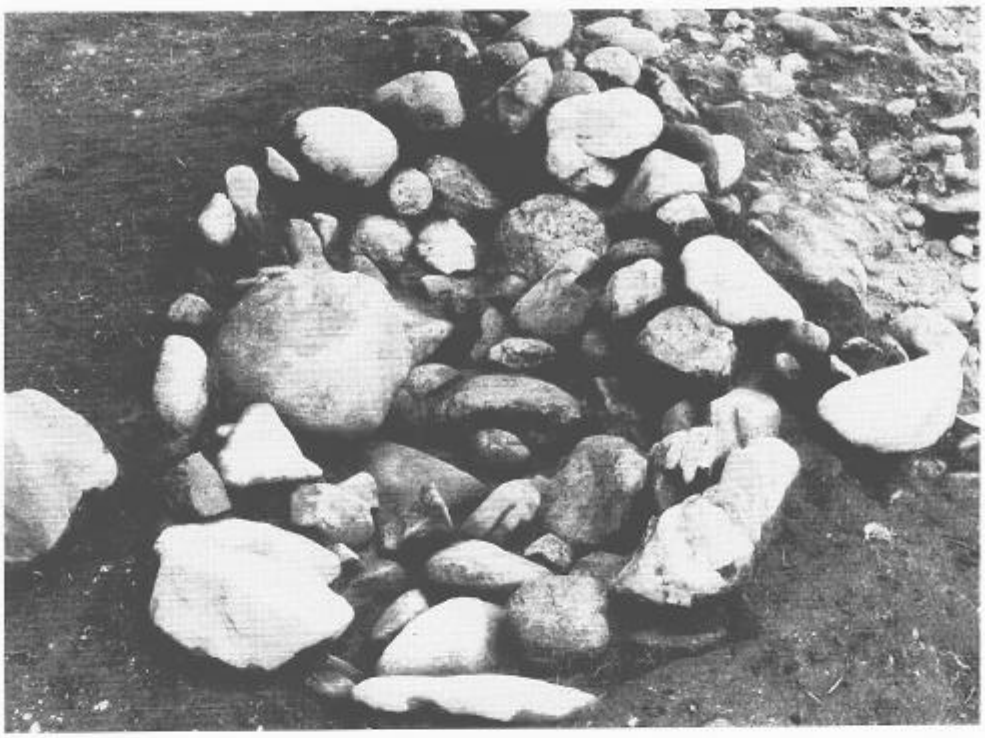
3　同　上（南東▶）

図版4

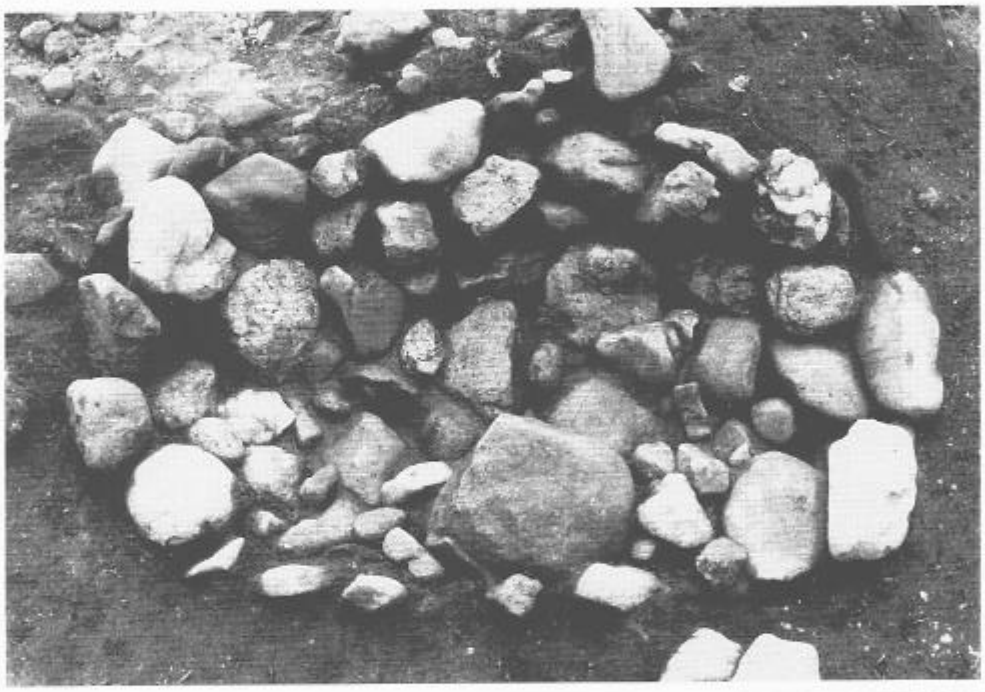
1　ＳＱ14配石墓検出状況　（北西▶）

2　ＳＱ14断面の状況（北西▶）

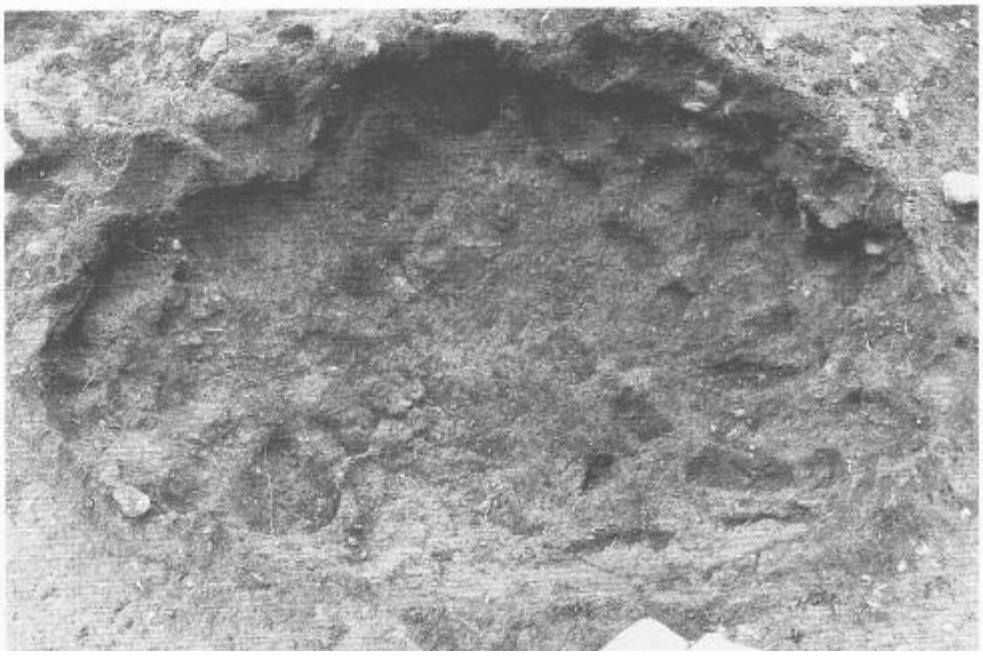
3　ＳＱ14立石と下部の配石状況（北西▶）



1　ＳＱ14下部の配石状況　（北西▶）



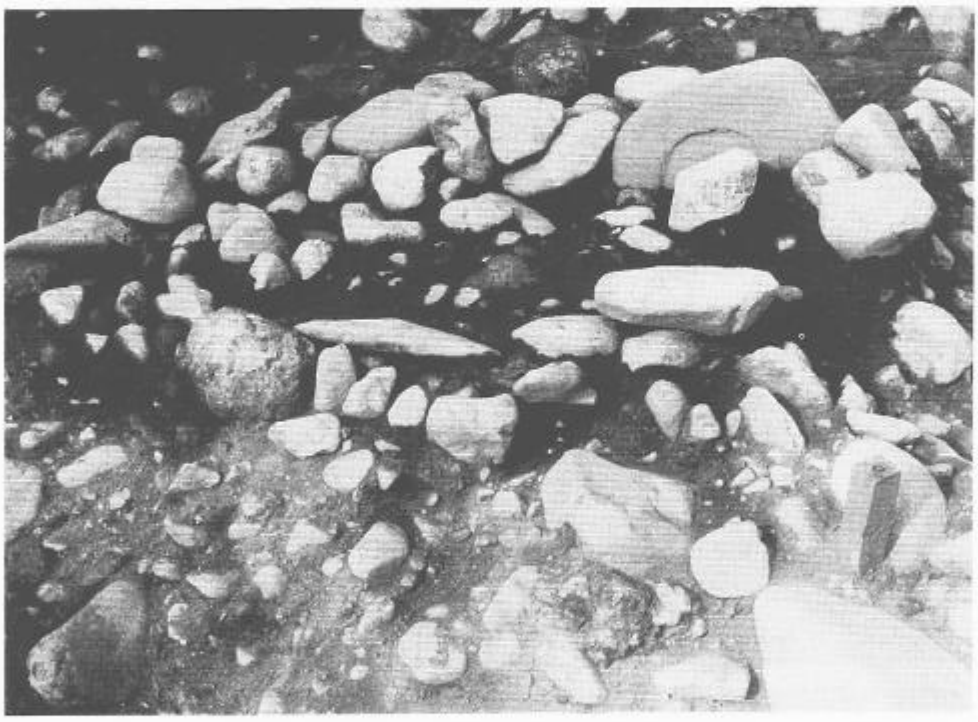
2　同　上（北東▶）



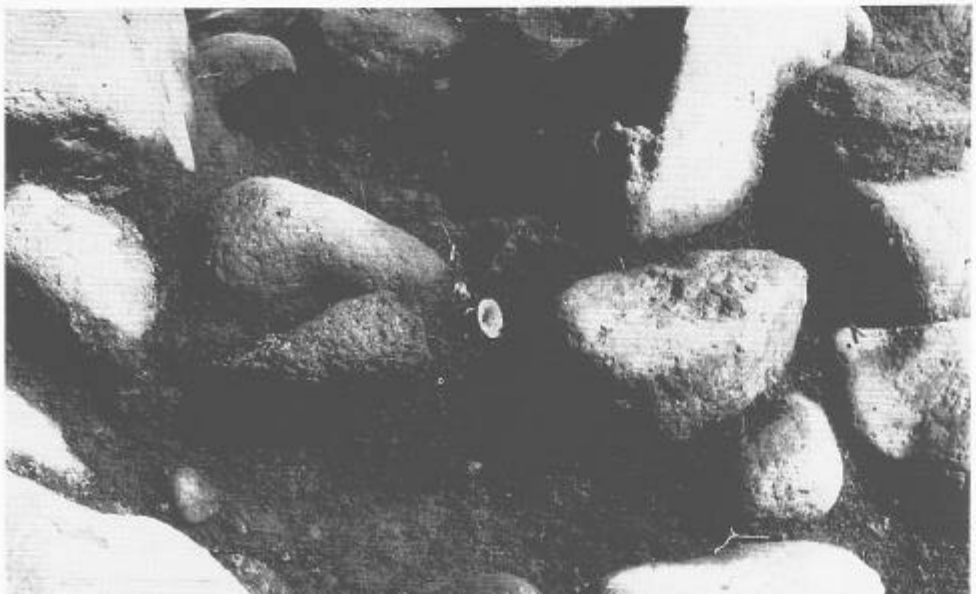
3　ＳＱ14壙底面の状況　（北▶）

図版6

1　ＳＱ15・28配石墓（南東▶）



2　同　上（南西▶）



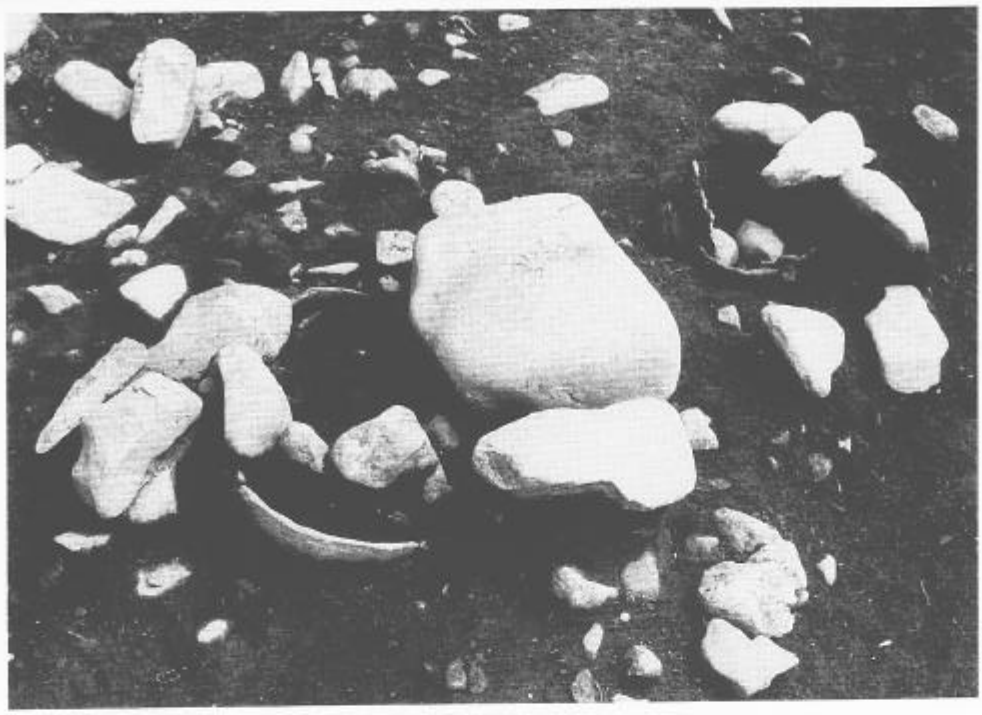
3　ＳＱ28耳飾出土状況

1　ＳＱ16配　石　墓
（東▶）

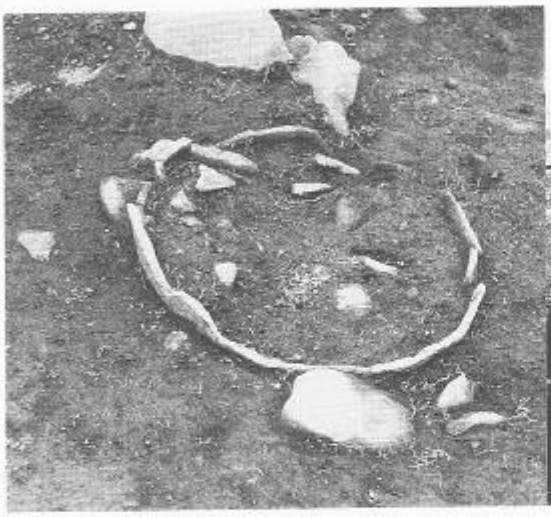
2　ＳＫ17～21・24土
壙墓検出状況
（南西▶）

3　同上完掘状況
（南西▶）

図版8



1　ＳＲ02・04土器棺墓検出状況(西▶)



2　ＳＲ01　(東▶)

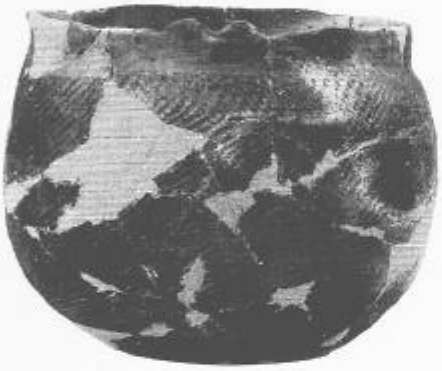
3　ＳＲ04　(西▶)

4　ＳＲ02　(西▶)

1　A地区遺物出土状況

2　同　上

3　同　上

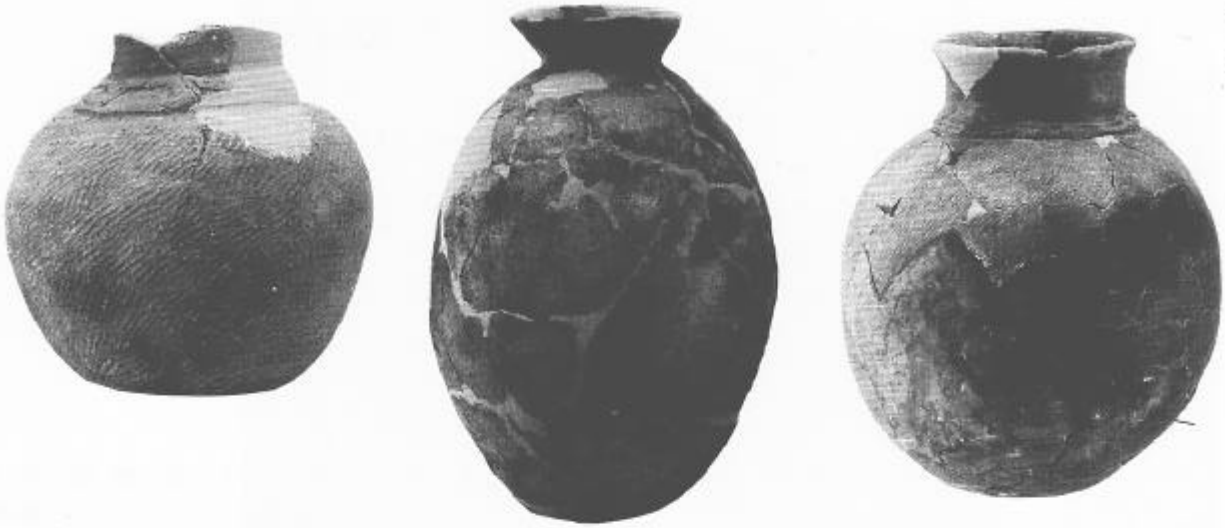


A地区出土土器・耳飾

A地区
出土器

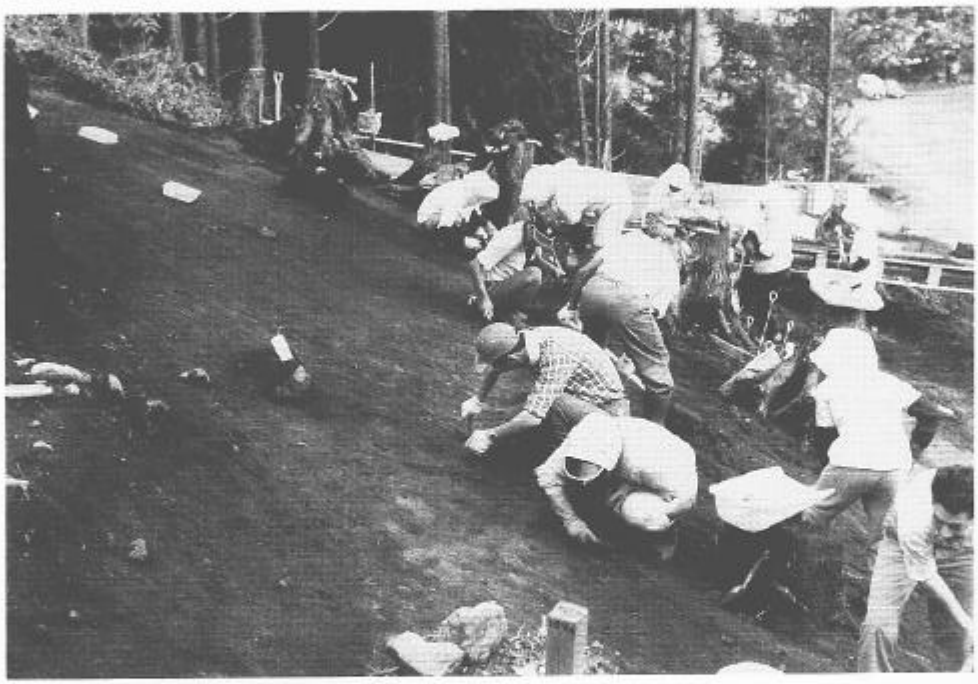
図版12

A地区出土土器



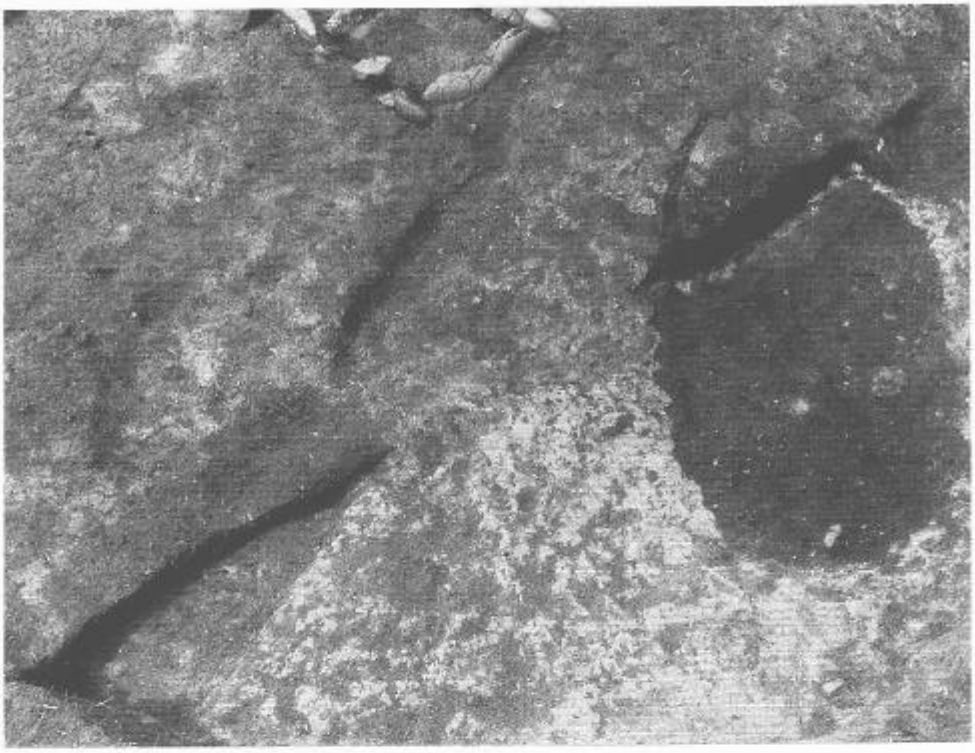
A地区出土
土器
B地区SI110
出土土器

1　B地区全景（南▶）

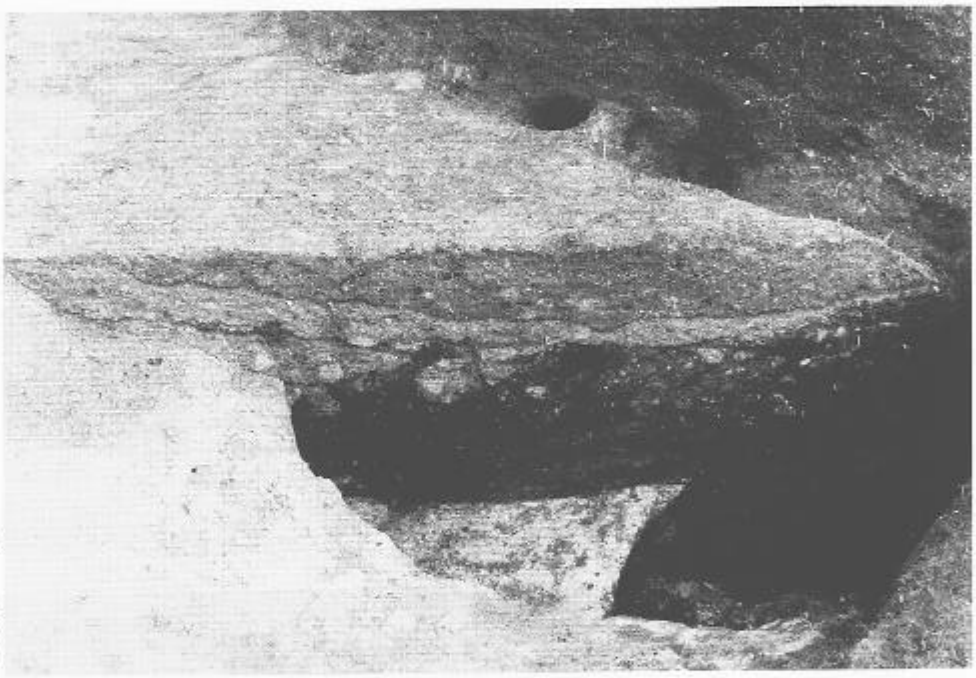


2　B地区SR101検出状況と調査風景（北▶）

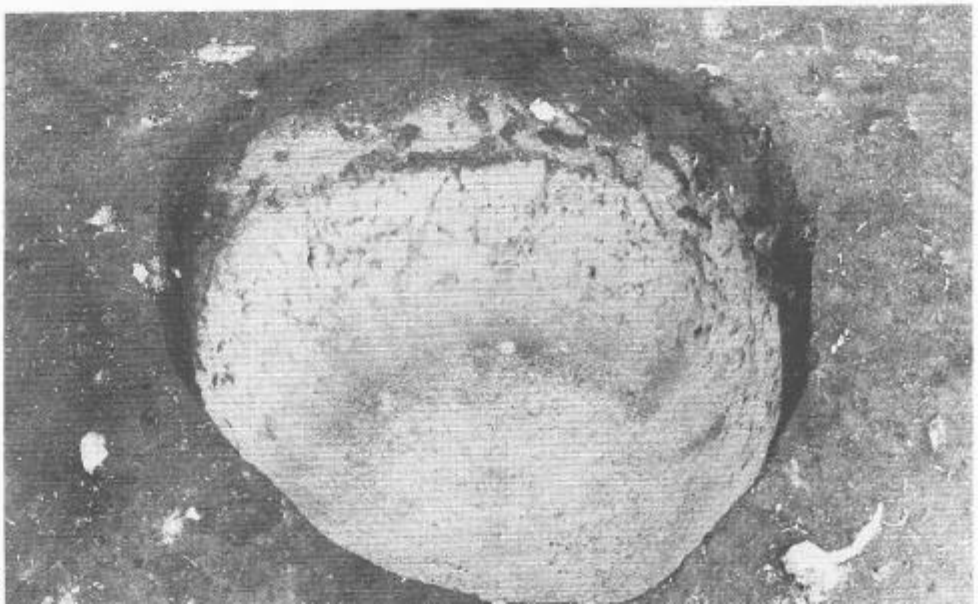
3　SI121竪穴住居跡完掘状況（南▶）



1　ＳＫ123・124の検出状況　（北東▶）

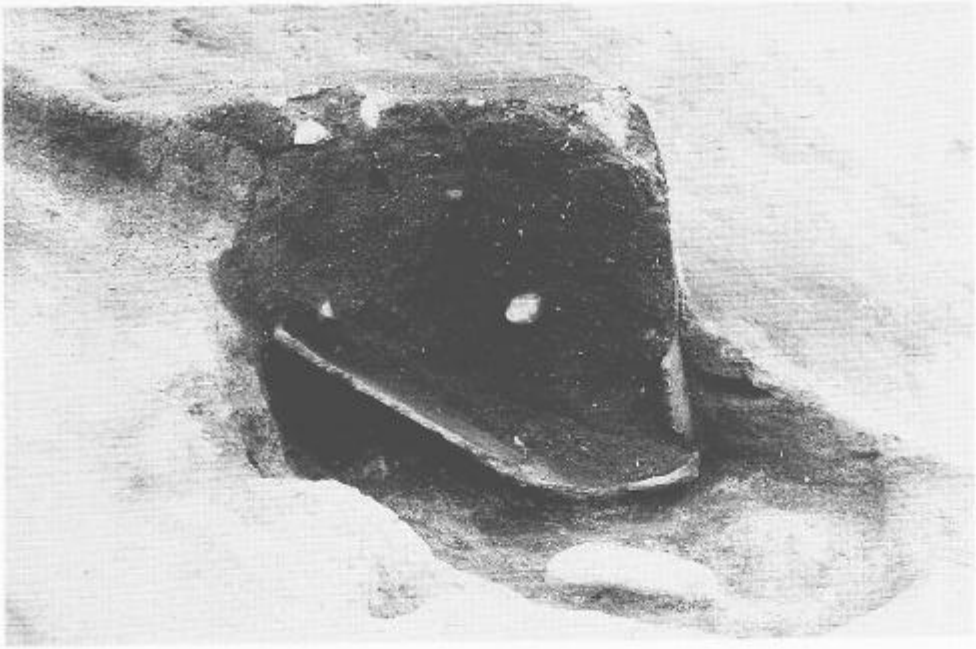


2　ＳＩ110床面貼床状況とＳＫ129・130フラスコ状土坑　（北▶）

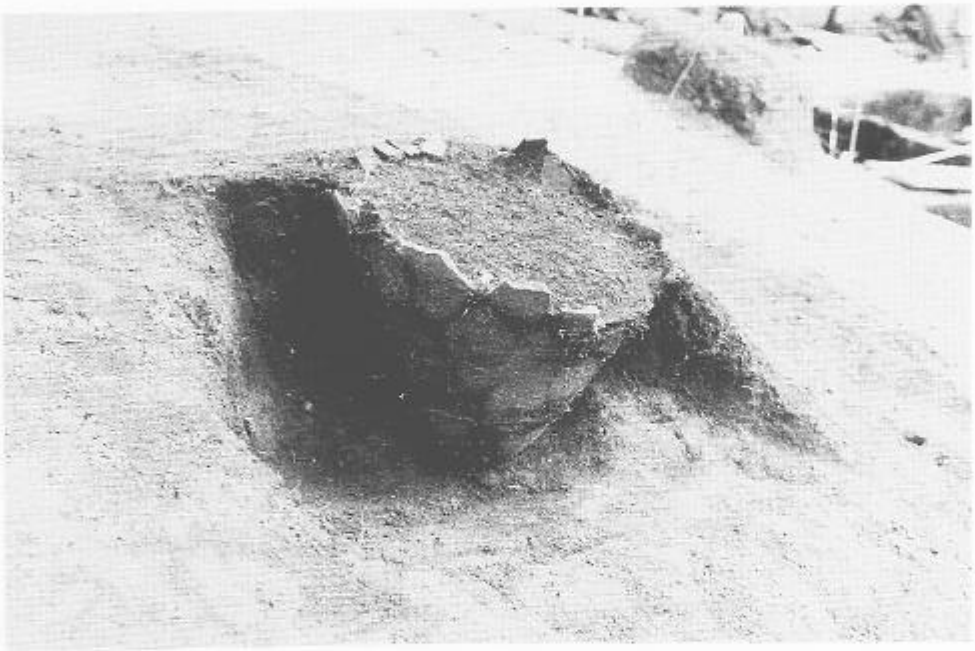


3　ＳＫ128土坑　（南西▶）

図版16

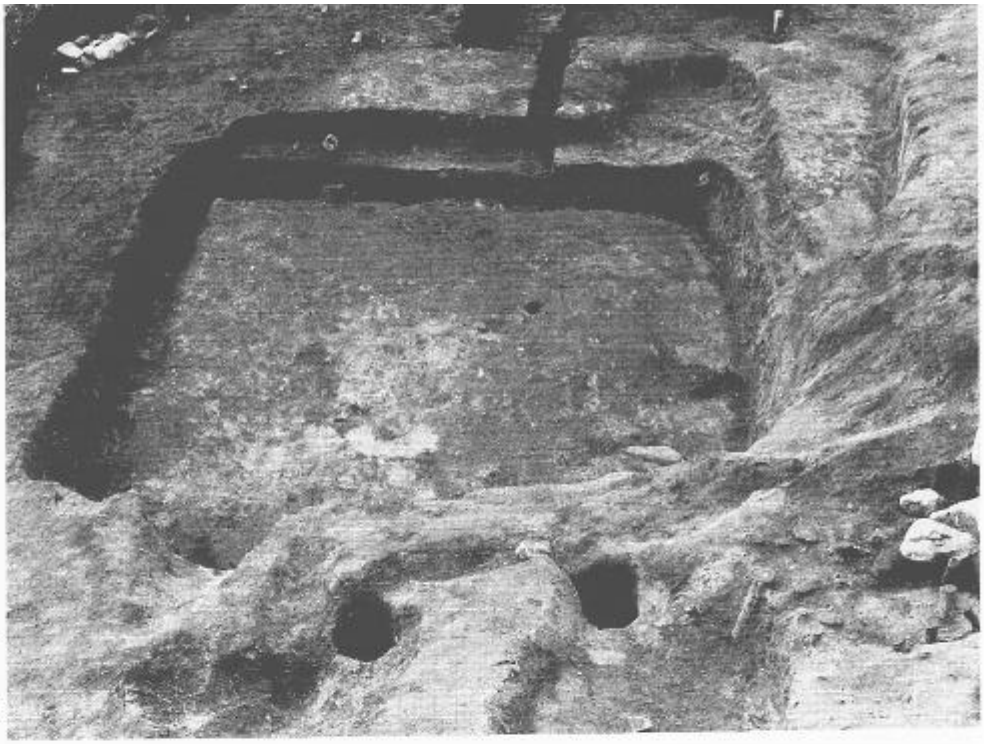


1　ＳＲ101土器棺墓
（北西▶）



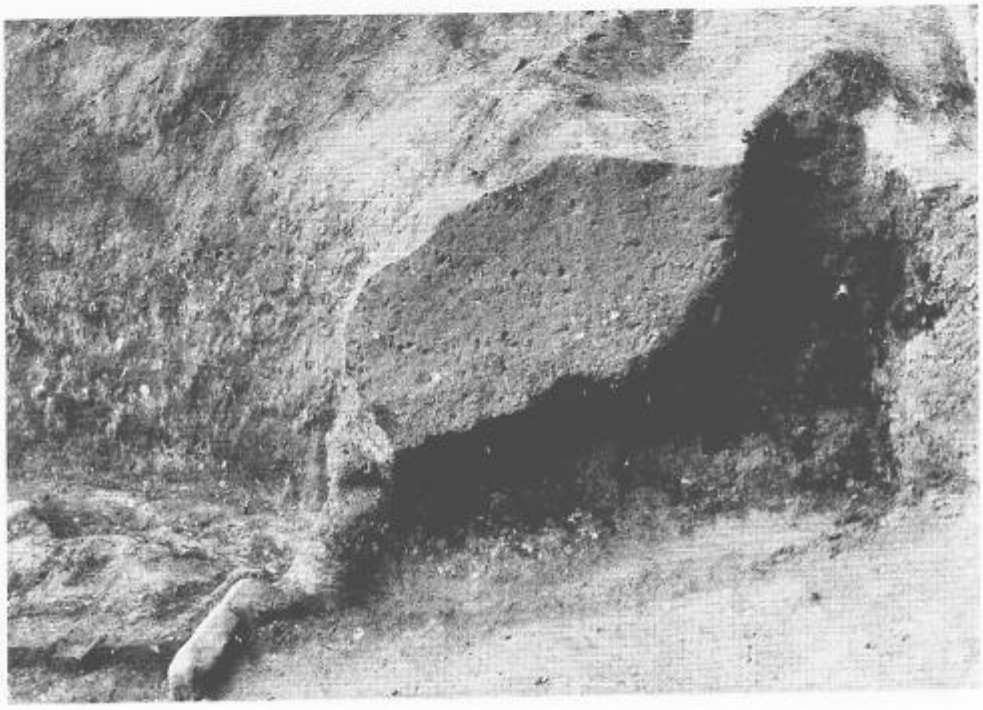
2　ＳＲ103土器棺墓
（北西▶）

3　ＳＩ110・112・116・118竪穴住居跡
（北▶）



1　S I 110・112・116・118竪穴住居跡（東▶）

2　S I 110カマド（西▶）



3　同　上　断　面（南▶）

1　ＳＤ104・105・106など溝状遺構（南▶）

2　ＳＤ124溝状遺構（北西▶）

3　Ｂ地区調査風景